兵庫県文化財調査報告　第369冊

伊 丹 市

南　辻　遺　跡

－都市計画道路伊丹飛行場線外１線（塚口長尾線）
の都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－

２０１０（平成２２）年３月

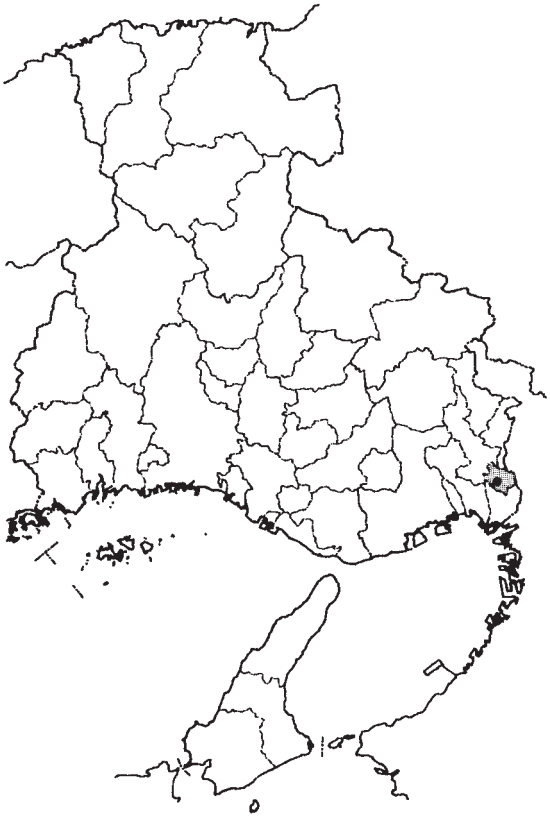
兵庫県教育委員会

伊丹市

南辻遺跡

（みなみつじいせき）

－都市計画道路伊丹飛行場線外１線（塚口長尾線）
の都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－



２０１０（平成２２）年３月

兵庫県教育委員会

例　　言

1　本書は兵庫県伊丹市昆陽３丁目・６丁目に所在する南辻遺跡の発掘調査報告書である。

2　この調査は都市計画道路塚口長尾線 街路事業に伴うもので、兵庫県阪神北県民局宝塚土木事務所の依頼を受けて、平成17年度および平成18年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が本発掘調査を実施した。

3　整理作業については兵庫県阪神北県民局宝塚土木事務所の依頼を受けて、平成20年度および平成21年度に兵庫県立考古博物館において実施した。

4　遺物写真の作成にあたっては、㈱タニグチフォトと委託契約を交わして、兵庫県立考古博物館において撮影した。

5　本文の執筆は岡田章一・渡辺 昇・村上泰樹・中川 渉・上田健太郎が行い、執筆分担については目次に明示した。ただし表１については村上が作成した。本書の編集は、松本嘉子の補助を得て、上田が担当した。

6　本報告にかかわる遺物・写真は、兵庫県立考古博物館で保管している。

7　調査・整理にあたっては、下記の方々および機関のご協力・ご指導を得た。記して謝意を表します。
伊丹市教育委員会、伊丹市立博物館、中畔明日香（伊丹市教育委員会）、小長谷正治（伊丹市立博物館）、福井英二（尼崎市立田能資料館）（敬称略、順不同、所属は発掘調査当時）

凡　　例

1．図版中における座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標系の数値を使用している。なお、平面直角座標系は第Ⅴ系を使用し、方位は座標北を示す。また、標高値は東京湾平均海水準（T.P.）を基準としている。

2．遺物は原則として、掲載順に通し番号を付けて掲載している。また、石製品にはS、玉類にはJ、金属器にはMをそれぞれの頭に付加し、土器と区別を図っている。

3．本書に掲載した第２図は、国土交通省国土地理院発行の２万５千分の１の地形図（図幅名「伊丹」）を改変して使用している。また、図版扉には伊丹市発行の都市計画図「V-OG-44-1(4)」「V-OG-44-2(5)」「V-OG-44-3(8)」「V-OG-44-4(9)」「V-OG-54-1(12)」「V-OG-54-2(13)」「V-OG-54-3(15)」「V-OG-54-4(16)」（昭和46年３月測図、昭和50年11月修正）、図版１には伊丹市発行の都市計画図「V-OG-44-3(8)」「V-OG-44-4(9)」「V-OG-54-1(12)」「V-OG-54-2(13)」（昭和46年３月測図、昭和50年11月修正）を改変して使用している。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯と経過……（中川）1
第１節　分布調査・確認調査……1
第２節　本発掘調査……1
第３節　出土品整理作業・報告書作成作業……2

第２章　遺跡をめぐる環境……（上田）3
第１節　地理的環境……3
第２節　歴史的環境……3

第３章　遺　構……（上田）7
第１節　西地区の遺構……（村上・上田）7
第２節　東地区の遺構……（渡辺・中川）12

第４章　遺　物……（岡田）15
第１節　中世遺構出土の土器・陶磁器……15
第２節　近世遺構出土の土器・陶磁器……16
第３節　染付磁器……20
第４節　金属製品・石製品……23

第５章　まとめ……（上田）24

表　目　次

表１　南辻遺跡周辺の主要遺跡……5
表２　昆陽・昆陽野関連年表……6
表３　出土土器・陶磁器観察表……25
表４　出土金属器一覧表……30
表５　出土石製品一覧表……30

挿　図　目　次

第１図　事業計画と調査区……1
第２図　南辻遺跡周辺の主要遺跡……5
第３図　南辻遺跡の遺構の変遷……24

図　版　目　次

図版１　調査区周辺の地形（1/5,000）
図版２　調査区平面図
図版３　調査区土層断面図（西地区東壁）
図版４　西地区平面図北半
図版５　西地区平面図南半
図版６　西地区中世の遺構
図版７　西地区近世の遺構①（井戸・埋桶）
図版８　西地区近世の遺構②（埋甕・埋桶）
図版９　西地区近世の遺構③（埋桶）
図版10　西地区近世の遺構④（土坑・落ち込み）
図版11　西地区近世の遺構⑤（石組遺構・溝）
図版12　西地区近世の遺構⑥（堀状遺構）
図版13　東地区平面図
図版14　東地区近世の遺構①
（東壁土層断面・落ち込み・堀状遺構）
図版15　東地区近世の遺構②（炉跡）
図版16　東地区近世の遺構③（炉跡・埋甕）
図版17　東地区近世の遺構④（土坑・落ち込み）
図版18　東地区近世の遺構⑤（土坑・溝・落ち込み）
図版19　東地区近世の遺構⑥（落ち込み）
図版20　東地区近世の遺構⑦（落ち込み）
図版21　西地区中世遺構出土遺物
図版22　西地区近世遺構出土遺物①
図版23　西地区近世遺構出土遺物②
図版24　東地区近世遺構出土遺物①
図版25　東地区近世遺構出土遺物②
図版26　東地区近世遺構出土遺物③
図版27　西・東地区出土染付磁器①
図版28　西・東地区出土染付磁器②
図版29　西・東地区出土金属製品
図版30　西地区出土石製品

写　真　図　版　目　次

写真図版１　遺跡　上　西地区調査区全景（南から）
下　西地区調査区全景（北から）
写真図版２　中世遺構　上　SK01～SK03土層断面（西から）
中右　SK01（西から）
中左　SK04土層断面（南から）
下　SK05・SK06（南から）
写真図版３　中世遺構　上　SK12・SK15（北から）
下上　SK12・SK15土層断面（南から）
下下　SK26（北から）
下右　SK17・SK18（東から）
写真図版４　中世遺構　上　SX01～SX04（南から）
下上　P1（北から）
下下　P5（北から）
下右　P3瓦質土器出土状況（南･西から）
写真図版５　近世遺構　上上　井戸１（西から）
上下　井戸２（東から）
上右　井戸３・断ち割り状況（北から）
下左　埋甕１（東から）
下上　埋桶１底板検出状況（南西から）
下下　埋桶２土層断面（南から）
写真図版６　近世遺構　上　埋桶４～埋桶６（東から）
下　埋桶５・埋桶６断ち割り状況（南から）
写真図版７　近世遺構　１左　埋桶３土層断面（東から）
１右　埋桶４断ち割り状況（南から）
２左　埋桶７・埋桶８（北から）
２右　SK09（南から）
３左　SK16（東から）
３右　SK19（南から）
４左　SK25（西から）
４右　SK29・SK30（東から）
写真図版８　近世遺構　上　SX06・SX07（東から）
中　SX08・SX09（北東から）
下　SX14・井戸３（東から）
写真図版９　近世遺構　上　井戸３・SX14・SD05（北から）
下上　SX14（西から）
下下　SX14（東から）
下右　SD05（南から）

写真図版10　近世　上　堀状遺構（南から）
　　遺構　下　堀状遺構土層断面（西から）
写真図版11　近世　上　１～３区全景（北から）
　　遺構　下　１～３区全景（南から）
写真図版12　近世　上　炉跡１・２検出状況（西から）
　　遺構　中　炉跡１完掘状況（西から）
　　下　炉跡２完掘状況（東から）
写真図版13　近世　１左　炉跡１検出状況（西から）
　　遺構　１右　炉跡１掘削状況（東から）
　　２左　炉跡1-a断面北壁（北から）
　　２右　炉跡1-b断面北壁（北から）
　　３左　炉跡１完掘状況（北から）
　　３右　炉跡１完掘状況（東から）
　　４左　炉跡1-a断ち割り断面（北から）
　　４右　炉跡1-b断ち割り断面（南から）
写真図版14　近世　１左　炉跡2-a断面北壁上層（北から）
　　遺構　１右　炉跡2-b断面南壁上層（南から）
　　２左　炉跡2-a断面北壁焼土面中層（北から）
　　２右　炉跡2-b断面南壁焼土面中層（南から）
　　３左　炉跡２焼土面（南から）
　　３右　炉跡２焼土面下層（東から）
　　４左　炉跡2-b下層焼土断面（南東から）
　　４右　炉跡２西壁断面（東から）
写真図版15　近世　１左　堀跡東壁断面（西から）
　　遺構　１右　堀跡東壁断面（西から）
　　２左　堀跡深掘り断面（西から）
　　２右　堀跡深掘り断面（南から）
　　３左　堀跡掘削状況（北から）
　　３右　SX09断面（北西から）
　　４左　遺構検出状況（北から）
　　４右　機械掘削（北から）
写真図版16　遺跡　上　東地区４～６区全景（南から）
　　下　東地区４～６区全景（北から）
写真図版17　近世　上　炉跡３周辺（西から）
　　遺構　下　炉跡３（南から）
写真図版18　近世　上左　炉跡３堆積状況（南から）
　　遺構　上右　炉跡３（南から）
　　中　炉跡３（東から）
　　下左　炉跡３断ち割り（南から）
　　下右　炉跡南側土坑（東から）
写真図版19　近世　上　SX01・SI01（西から）
　　遺構　中左　SI01（北から）
　　中右　SI01（西から）
　　下　調査風景
写真図版20　近世　１左　SK01堆積状況（南から）
　　遺構　１右　SK01（西から）
　　２左　SK01（南から）
　　２右　SK02（西から）
　　３左　SK02（南から）
　　３右　SK02（西から）
　　４左　SK03（西から）
　　４右　機械掘削風景
写真図版21　近世　１左　SK04（西から）
　　遺構　１右　SK06（西から）
　　２左　SK07（南から）
　　２右　SK09（北から）
　　3　SX01（西から）
　　4　SX03（西から）
写真図版22　近世　上　SX04上層（北西から）
　　遺構　中左　SX04上層堆積状況（北から）
　　中右　SX04埋桶遺物出土状況（南から）
　　下左　SX04上層遺物出土状況（南から）
　　下右　SX04埋桶遺物出土状況（西から）
写真図版23　近世　上　SX04下層（北から）
　　遺構　下左　SX04下層埋桶（西から）
　　下右　SX04下層方形木組み断ち割り（西から）
写真図版24　近世　上　SX04下層方形木組み（西から）
　　遺構　下　SX04下層埋桶（北から）
写真図版25　遺物　西地区遺構出土遺物
写真図版26　遺物　西地区遺構・包含層
　　東地区遺構出土遺物
写真図版27　遺物　西・東地区出土遺物①
写真図版28　遺物　西・東地区出土遺物②
写真図版29　遺物　西・東地区出土遺物③
写真図版30　遺物　西・東地区出土遺物④
写真図版31　遺物　西・東地区出土金属器

第１章　調査に至る経緯と経過

第１節　分布調査・確認調査

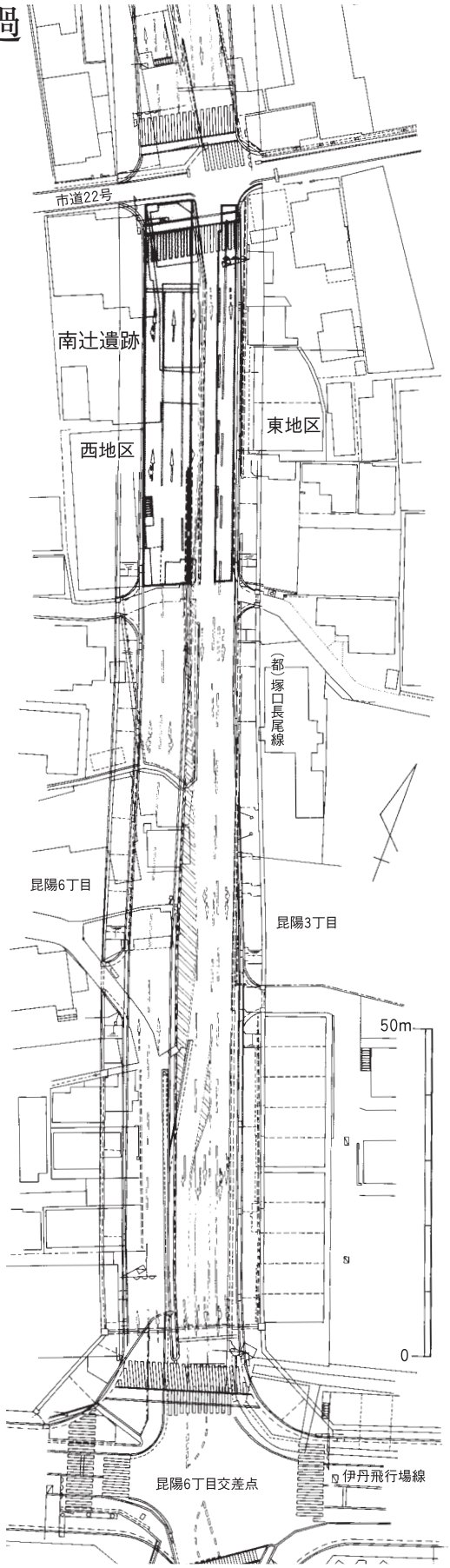
兵庫県宝塚土木事務所は、伊丹市昆陽地内において、都市計画道路塚口長尾線 街路事業を計画した。この事業は現道拡幅による車道の４車線化と、歩道の整備を目的とするものである。今回の調査の対象となったのは、国道171号昆陽交差点～（都）伊丹飛行場線昆陽６丁目交差点までの区間である。

事業対象区間のほぼ中央を近世西国街道が横断しており、周辺にも古代～中世に遡る寺院・神社が存在するため、兵庫県教育委員会は平成16年４月に、埋蔵文化財の分布調査（遺跡調査番号2004049）を実施した。調査対象地は市街化していて地表面の観察はできなかったが、微地形を観察すると同地は段丘上にあたり、字名も都市や城館に関連した地名であるため、中世の集落遺跡が存在する可能性が高いと判断した（平成16年６月22日付け　教埋文第3359号）。

上記の結果をもとに兵庫県教育委員会は、宝塚土木事務所からの依頼（平成17年９月６日付け　神北（宝土）第1508号）を受けて、平成17年９月に埋蔵文化財の確認調査（遺跡調査番号2005168）を実施した。調査の結果、旧西国街道より南側の段丘上で、中世～近世の遺構・遺物を多数検出した。しかし地形的に低くなる路線の南端までは、遺構は広がらなかった。一方、旧西国街道より北側については近現代の削平が著しく、遺構は残っていなかった。埋蔵文化財が遺存していたのは旧西国街道から南へ約60mの範囲で、字名をもとに「南辻遺跡」と呼ぶこととした（平成17年10月18日付け教埋文第3620号）。

第２節　本発掘調査

本発掘調査については、車線規制を伴う工事となり一括の調査ができないため、平成17年度にまず西側の北行２車線拡幅部を対象に行った（西地区）。この北行部分の本発掘調査（遺跡調査番号2005232）は、平成18年２月15日付け　神北（宝土）第1936号の依頼を受けて、平成18年２～３月に実施している。



第１図　事業計画と調査区

南行部分の本発掘調査（遺跡調査番号2006065）は、現道を西側へ振り替えた後、平成18年５月16日付け　神北（宝土）第1078号の依頼を受けて、平成18年９～10月に実施した（東地区）。なお調査区は、周辺店舗の進入路を確保するため、南北２地区に分けて南側から順次実施した。

平成17年度

調査期間：平成18年２月22日～３月18日

調査対象面積：370㎡

調査担当職員：調査第３班　西口和彦・村上泰樹・上田健太郎

平成18年度

調査期間：平成18年９月19日～10月17日

調査対象面積：135㎡

調査担当職員：企画調整班　中川　渉

調査第１班　渡辺　昇

第３節　出土品整理・報告書作成作業

出土品の整理作業は平成20年度および平成21年度に、兵庫県立考古博物館において実施した。実施した内容は、土器・石器の水洗い・ネーミング・接合補強・実測・拓本・復元・写真撮影、金属器の保存処理・実測・写真撮影、写真整理、図面補正、トレース、レイアウト、報告書印刷である。

平成20年度

調査担当職員　担当課長補佐　渡辺　昇、主査　中川　渉、主任　上田健太郎

整理担当職員　担当課長補佐　岡田章一　（工程管理担当）、主査　岡本一秀　（保存処理担当）

非常勤嘱託員　吉田優子・三好綾子・荻野麻衣（接合等担当）

岡田美穂（実測担当）

大前篤子・藤井光代・長濱重美・有馬利耶子（保存処理担当）

平成21年度

調査担当職員　担当課長補佐　渡辺　昇、主査　中川　渉、主任　上田健太郎

整理担当職員　担当課長補佐　岡田章一　（工程管理担当）

非常勤嘱託員　松本嘉子（実測・トレース・レイアウト等担当）

吉田優子・三好綾子・荻野麻衣（復元等担当）

第２章　遺跡をめぐる環境

第１節　地理的環境

南辻遺跡は、兵庫県伊丹市昆陽３丁目・６丁目に所在する。遺跡は伊丹市域の中央やや西寄りに位置し、市街地の西側にあたり、阪急伊丹駅の西、直線距離にして約1.4㎞の所にある。遺跡の所在する伊丹市は西を六甲山地、北を北摂山地、東を千里丘陵で囲まれた西摂平野のほぼ中央に位置する。この北摂丘陵の中の長尾山丘陵からは洪積段丘である伊丹台地が南に張り出している。伊丹台地は標高40mから５mまで北から南に向かって緩やかに傾斜しており、南辻遺跡の遺構検出面では標高20.5～21.3mを測る。伊丹台地は細かく見れば複数の段丘面に分かれており、最も東側の伊丹段丘が中位段丘として一段高く、西側の安倉面や、南側の南辻遺跡の立地する中野面は低位段丘に相当する。

市域西部には武庫川が、東部には猪名川がそれぞれ南流し、市域の地形はこの二河川と支流の形成した沖積低地と伊丹台地に分類される。遺跡の南側を東流する昆陽川はやがて南流し、庄下川に合流し尼崎港に注ぐ。一方昆陽池の北側を南西方向に流れる天神川は武庫川に注いでいる。なお、近世に昆陽・池尻・山田・寺本・野間・千僧・南野・御願塚・堀池の九村に水をひいた昆陽井は武庫川より取水されている。

第２節　歴史的環境

１　昆陽と西国街道について

昆陽の地名は、和名類聚抄に「武庫郡児屋郷」の記述がみえ、以降「昆陽」あるいは「崑陽野」の地名が散見される（表２）。次項で触れるとおり、昆陽周辺では奈良時代まで大規模な開発が認められない。731年（天平三）僧行基により「為奈野」開発の一環として、昆陽寺の前身となる「崐陽布施屋」が建立され、昆陽上池・下池が築造された。なお、下池は1608年（慶長一三）に埋め立てられている。

中世には、一帯に小屋庄（昆陽寺庄・小屋野庄など）が成立する。1150年代に後白河院から京都新熊野社に寄進されている鎌倉時代に東西に二分されており、東側は後宇多上皇の発願で西明寺領、西側は高野山安養院領となる。湊川合戦直後の1338年（建武三）に足利尊氏は、安養院の領有と昆陽寺による現地管理を安堵するが、同年のうちに尊氏が拠点とした東寺に付している。この後も東寺に、五重塔再建などのために度々寄進されるが、一方で安養院領としての安堵もなされていることから、上級領主権を東寺に寄進する一方で安養院の領家職を安堵したものと考えられる。しかしながら足利義満の代には幕府により相国寺雲頂院に寄進され、その後また安養院に返付されている。1534年（天文三）には三好政長と三好利長の合戦により「コヤノ庄上焼候」となったことが「私心記」に記されている。

近世の昆陽村は慶長国絵図に「小屋村」の村名がみえる。当初幕府領大和小泉藩預地で、直轄領となり、1686年（貞享三）に武蔵忍藩領となるが、1823年（文政六）幕府領に戻り明治維新に至っている。

中世山陽道では、昆陽宿が機能しはじめ、寛永年間（1624～44）には宿場町指定がなされたものとみられる。近世西国街道は本報告の調査地点北側隣接地を通り、昆陽村は東の瀬川・半町立会駅と西の西宮駅を結ぶ宿駅であった。「天保十四年昆陽村絵図」および「西国街道絵図」、昭和初期の大日本帝国陸地測量部発行の地形図を比較すると、調査地点現道（（都）塚口長尾線）は、この昆陽村を基点に南側が南野・塚口を南下する「大坂道」、北側が中野、安倉方面に向かう「有馬道」である。調査地点南側（伊丹飛行場線付近）には、「大坂道」から東に分岐して伊丹郷町に通じる「昆陽道」が通っていた。

2　周辺の遺跡

昆陽付近では現在までのところ古墳時代以前の集落遺跡は確認されておらず、弥生時代の石鏃が採集されている（昆陽石鏃出土地点：27）にとどまる。周辺では荒牧長野遺跡（3）で有舌尖頭器が、緑が丘遺跡（5）では縄文時代後期の石鏃や削器、二次加工痕のある剥片等が出土している。有岡城下層で縄文時代中・後期の土坑および弥生時代前期の土器が確認されている。荒牧遺跡では弥生時代中期後半と後期の集落のほか河道から前期、中期後半、後期の土器が出土し、西野遺跡では弥生時代後期の竪穴住居跡が検出されている。北園遺跡では弥生時代前期、後期の土器と扁平片刃石斧が出土している。

古墳時代に入ると、武庫川左岸に安倉高塚古墳（13）が築かれる。河原石積みの竪穴式石室床面には割竹形木棺を安置したとみられる粘土床が残存し、朱で赤く染まっていたと報告されている。「赤烏七年」銘の半円方形帯神獣鏡や内行花文鏡のほか管玉、鉄製鍬先、ヤリガンナ、鉄刀、鉄矛が出土している。

伊丹台地上に立地する古墳のうち、伊丹市から尼崎市にかけての一群は特に「猪名野古墳群」と総称されている。このうち前期に属するのが、有岡城内においてそれぞれ西側、南側の砦として墳丘利用のなされた女郎（上臈）塚古墳（32）、鵜塚古墳（33）である。女郎（上臈）塚古墳は近年くびれ部が確認され、４世紀後半の前方後円墳とされる。鵜塚古墳は埴輪の時期から４世紀末の円墳とされている。女郎（上臈）塚古墳の約100m東の地点（204次調査）では前期末とされる円筒埴輪棺が出土している。

中期古墳では５世紀前半の柏木古墳が知られるが、円墳と前方後円墳の両方の可能性が考えられる。円筒埴輪と蓋・家・盾形埴輪を持つ。５世紀後半（第３四半期）には帆立貝式古墳の御願塚古墳（30）が知られる。全長52mを測り、二重の周濠や円筒埴輪のほか人・家・蓋・馬・大刀形埴輪を伴う。南本町遺跡でも５世紀後半の埴輪が出土しており、埋没古墳の存在が想定されている。なお、昆陽池の北に位置する中野古墳では前方後円墳状の墳形が想定されているが、これまでのところ遺物の出土は皆無である。近年のトレンチ調査ではその確証が得られず、電気探査結果からは古墳の存在自体が疑問視されている。

後期古墳では南本町遺跡（34）で埋没古墳が確認され、６世紀前半の３基が円筒埴輪と蓋･家･盾･靭･馬形埴輪を持つ。南野遺跡（南野古墳：28）や有岡城跡内にもほぼ同時期の古墳が１基ずつ確認されている。南野遺跡のすぐ南にも方墳とされる平塚古墳（29）が知られるが未調査のため時期は不明である。

７世紀前半には緑ヶ丘古墳群が造営され、白鳳時代には近接して法隆寺式伽藍配置の伊丹廃寺（6）が建立され、鎌倉時代まで存続する。同じ頃猪名寺廃寺（35）も建立され、南本町遺跡（34）では飛鳥時代から奈良時代にかけて20棟以上の掘立柱建物が確認され、建物の方位が揃うことや井戸の格式が高いことが注目される。荒牧遺跡では奈良時代の井戸や溝が検出され、緑釉陶器が出土している。昆陽寺境内遺跡では、奈良時代の礎石建物や９世紀代の土坑をはじめ、18世紀代までの遺構が検出されている。周辺でも山田遺跡（18）、寺本遺跡（19）、昆陽黒田遺跡（20）、山田有堀遺跡（21）など奈良時代から平安時代もしくは中世にかけての遺跡が認められ、この時期の開発が垣間見られる。平安時代後期には北村廃寺が建立され室町期まで存続する。鎌倉時代では安倉南遺跡（12）で井戸や炉が検出されている。鎌倉時代末には伊丹氏が伊丹城を居城とし、猪名川左岸には伊丹氏の庶子である森本氏の居館跡が営まれる。

伊丹城は1574年（天正二）に伊丹氏を破った荒木村重により有岡城と改称され、大規模な改修がなされた。すなわち、南北に長い伊丹段丘の地形を利用し周囲に土累をめぐらせ、要所には砦を配し、侍屋敷や町屋までをも取り込み、いわゆる惣構えの都市的機能を内包した城郭となった。惣構えは南北1.7㎞、東西0.8㎞に及び、中央やや東寄りに堀で囲まれた主郭（城郭）部と、内郭部、外郭部により構成されている。天正年間に寺が移転･創建され、文禄年間には15町の町場が展開し、在郷町が形成され始める。

表１　南辻遺跡周辺の主要遺跡

下図	遺跡番号	遺　跡　の　名　称	よ　み　が　な	遺跡の所在地	時　代	種　類
1		南辻遺跡	みなみつじ	伊丹市昆陽３丁目・６丁目	中世・近世	集落･生産遺跡
2	080003	荒牧戸ノ尻遺跡	あらまきとのじり	伊丹市荒牧字戸尻	奈良～中世	散布地
3	080004	荒牧長野遺跡	あらまきながの	伊丹市荒牧字長野	中世	散布地
4	080009	東野遺跡第１地点	ひがしのいせき１	伊丹市東野８丁目他	古墳･奈良･中世	散布地
5	080012	緑ヶ丘遺跡	みどりがおか	伊丹市緑ヶ丘７丁目他	古墳～中世	集落・社寺
6	080013	伊丹廃寺跡	いたみはいじ	伊丹市緑ヶ丘４丁目	奈良・平安	社寺
7	080014	猿ケ山城跡	さるがやまじょう	伊丹市緑ヶ丘５丁目	中世	城館
8	080017	北村遺跡	きたむら	伊丹市鋳物師４・５丁目	弥生～中世	散布地
9	080018	北園遺跡	きたぞの	伊丹市北園２丁目他	古墳～中世	集落
10	080023	大鹿遺跡	おおじか	伊丹市瑞穂町４丁目他	奈良・平安	散布地
11	080028	中野古墳	なかの	伊丹市中野東２丁目	古墳	古墳
12	150224	安倉南遺跡	あくらみなみ	宝塚市安倉南１丁目	中世	集落
13	150211	安倉高塚古墳	あくらたかつか	宝塚市安倉南１丁目	古墳	古墳
14	080029	西野マウンド１遺跡	にしのまうんど１	伊丹市西野３丁目	近世	他
15	080030	西野マウンド２遺跡	にしのまうんど２	伊丹市西野３丁目	近世	他
16	080032	寺本猪名野神社境内遺跡	てらもといなのじんじゃけいだい	伊丹市寺本２丁目	平安・中世	散布地
17	080033	昆陽寺境内遺跡	こやでらけいだい	伊丹市寺本２丁目他	奈良～中世	社寺
18	080034	山田遺跡	やまだ	伊丹市山田２丁目他	奈良～中世	集落
19	080035	寺本遺跡	てらもと	伊丹市寺本字東ノ口	弥生･奈良･平安	散布地
20	080036	昆陽黒田遺跡	こやくろだ	伊丹市昆陽字黒田	奈良～中世	散布地
21	080037	山田有掘遺跡	やまだありぼり	伊丹市野間北１丁目	奈良～中世	散布地
22	030002	北裏遺跡	きたうら	尼崎市常松２丁目	弥生～奈良	集落
23	030105	長ノ手遺跡	ながのて	尼崎市武庫之荘９丁目	中世	集落
24	030007	時友遺跡	ときとも	尼崎市武庫之荘８丁目	平安・中世	集落
25	030011	道ノ下遺跡	みちのした	尼崎市武庫之荘８丁目	弥生～中世	集落
26	080044	昆陽林田遺跡	こやはやしだ	伊丹市昆陽林田他	奈良・平安	散布地
27	080045	昆陽石鏃出土地点	こやせきぞくしゅつどちてん	伊丹市行基町２丁目	弥生	散布地
28	080047	南野遺跡	みなみの	伊丹市安堂寺町６丁目他	古墳～中世	散布地・古墳
29	080048	平塚古墳	ひらつか	伊丹市安堂寺町６丁目	古墳	古墳
30	080055	御願塚古墳	ごがづか	伊丹市御願塚４丁目	古墳	古墳
31	080061	有岡城跡・伊丹郷町	ありおかじょうせき・いたみごうまち	伊丹市伊丹１丁目他	弥生～近世	城館･生産遺跡
32	080063	女郎塚古墳（有岡城女郎塚砦跡）	じょろうづかこふん	伊丹市中央６丁目	古墳・中世	古墳・城館
33	080064	鴨塚古墳（有岡城鴨塚砦跡）	ひよどりづかこふん	伊丹市伊丹７丁目	古墳・中世	古墳・城館
34	080066	南本町遺跡	みなみほんまち	伊丹市南本町７丁目他	古墳～中世	集落･古墳･城館
35	030046	猪名寺廃寺跡	いなでらはいじあと	尼崎市猪名寺１丁目	奈良～中世	社寺

第２図　南辻遺跡周辺の主要遺跡（S=1/35,000）

表２　昆陽・昆陽野関連年表（『兵庫県の地名』より）

西暦	年　号	地　名	記　述	文　献	著　者
731	天平三年	崑陽	行基に従う61歳以上の優婆塞と55歳以上の優婆夷らに入道を許す。行基、摂津国河辺郡に楊津院・崑陽施院、河内国丹比郡に狭山池院・尼院、山城国紀伊郡に法禅院、葛野郡に河原院・大井院、乙訓郡に山崎院、大和国添下郡に隆福尼院を起工する。行基の狭山池修造はこのころか？	「行基年譜」	安元元年(1175) 成立
934	承平四年	児屋郷	訓「古也」	「和名類従抄」	源順（みなもとしたごう）：承平四年成立？
945	天慶八年	児屋寺	同年七月二十八日付、摂津国司解に「河辺郡児屋寺」の記載。	本朝世紀	藤原通憲：1150～59成立
1007	寛弘二(1005)～四(1007)年	つの国のこや	源重之「あしのはにかくれてすみしつの国のこやもあらはに冬はきにけり」	拾遺集（しゅういしゅう）	藤原長能・源道済撰集？
1180	治承四年	小屋野	福原に替わる宮都造営地候補としてあげられる。「改和田都以小屋野、可為其地、早遣木工寮、可打定其地」	「玉葉」（ぎょくよう）6月15日条	関白太政大臣九条兼実：長寛2(1164)～正治2(1200)記述
1180	治承四年	小屋	平維盛、源頼朝討伐の際、小屋で１泊。	「玉葉」９月23日条・「源平盛衰記」巻23	
1181	養和元年	小屋	同年12月８日付後白河院庁下文：「摂津国　小屋小林庄」	新熊野神社文書	
1184	寿永三年	崑陽野	源範頼軍陣を一ノ谷の合戦に備え構える	「平家物語」巻９・「源平盛衰記」巻36	
1207	承元元年	摂津国小屋昆陽	後鳥羽上皇建立の最勝四天王院（京都市東山）の和歌の名所の障子絵の候補にあがる。	「名月記」四月二十一条	藤原定家
1212	建暦二年	小屋	定家は有馬温泉に赴く途中小屋の風景を愛でる記述あり。	「名月記」正月二十一・二十二条	藤原定家
1221	承久三年	津の国の小屋	承久の乱に破れた後鳥羽上皇が同年七月一三日に「津の国のこや」を通ったと記載。	「六代勝事記」	作者不詳：貞応年間(1222～24)の記述
1223	貞応二年	小屋野	「つの国のはやし：宝塚市」から帰京する藤原光経が小屋野で遊女と別れる際、「旅人のゆきゆきの契り結ふともわするな我を我もわすれし」	「藤原光経集」十一月条	
1243	仁治四年	小屋	隠岐に配流された紀伊高野山僧　道範、小屋を通る。	南海流浪記	道範阿闍梨：定嘉２(1258)成立
1332	元弘二年	津の国昆陽の宿	隠岐に配流される後醍醐天皇が「津の国昆陽の宿」で「命あれば昆陽の軒ばの月も見つ又いかならんいく末の空」を詠む。	「増鏡」巻16	作者未詳：寿永２(1183)～元弘３(1333)の記述
1333	元弘三年	小屋野	同年３月10日、六波羅勢を迎え撃つため、赤松則村方の軍勢三千余騎小屋野の宿の西に控える	「太平記」巻８	作者未詳・文保２(1318)貞治６(1368)記述
1338	暦応元年	小屋宿	貴志義氏九月に小屋宿に陣取り味方との合流を図る。	貴志義氏軍忠状案（余田文書）	
1362	康安二年	小屋野	南朝方楠木正儀・和田正武軍、小屋野・富松（とまつ：尼崎市）付近に展開、摂津守護代箕浦定俊と交戦。	「太平記」巻38	作者不詳・文保２(1318)～貞治６(1368)記述
1481	応永元(1394)～文明13(1481)年	昆陽駅	「昆陽駅午憩（ごけい）」「客伝多美酒　女報有新炊」	「漁庵小稿」	一休宗純（臨済宗大徳寺派）
1493	永享七～明応二年	児屋・昆陽（小屋）庄		蔭涼軒日録（おんりょうけんにちろく）他	季瓊真蕊（きけいしんずい）・亀泉集証：1435～1493年記述
1519	永正十六年	小屋	越水城（こしみず：西宮市）を攻めた細川澄元軍に対し、細川高国軍小屋・野間などに布陣。	「細川両家記」	生島宗竹
1549	天文十八年	小屋城	三好長慶の攻撃を受けた伊丹氏、小屋城に小川式部丞を籠もらせる	「細川両家記」	生島宗竹

近世には、1661年（寛文元）大半が近衛家領となった伊丹郷町が領主家の保護の下、酒造業を伴って発展する。17世紀後半には第二の発展期を迎え、享保年間まで町数が増加する。酒造業は灘の台頭により低迷するものの、18世紀後半から19世紀にかけて町屋が盛んに形成される。他の城郭では猿ケ山城跡(8)の空堀状遺構が寛文年間の絵図に描かれている瑞ヶ池東側の城のものと推定される。武庫川の左岸には旧河川堤防跡である西野マウンド１遺跡（14）、西野マウンド２遺跡（15）が築堤されたが、現存しない。

参考文献

赤松和佳・和島恭仁雄編2008『伊丹市埋蔵文化財報告書』伊丹市埋蔵文化財調査報告書第33集

伊丹市立博物館編1982『伊丹古絵図集成（本編）』伊丹資料叢書６　伊丹市役所

伊丹市立博物館編1994『新・伊丹史話』伊丹市立博物館

大手前女子大学史学研究所文化財調査室編1999『有岡城の二十年』伊丹市教育委員会・大手前女子大学史学研究所

小長谷正治・瀬川眞美子1999『伊丹市埋蔵文化財報告書』伊丹市埋蔵文化財調査報告書第23集

岸本一宏編2007『北村遺跡・南本町遺跡』兵庫県文化財報告第320冊　兵庫県教育委員会

瀬川眞美子・吉川敬子2008『御願塚古墳発掘調査報告書』伊丹市埋蔵文化財調査報告書第34集

中村弘1999『安倉南遺跡』兵庫県文化財報告第188冊　兵庫県教育委員会

長谷川眞1993『伊丹郷町発掘調査報告書』兵庫県文化財報告第123冊　兵庫県教育委員会

兵庫県史編集専門委員会1992『兵庫県史　考古資料編』兵庫県

兵庫県教育委員会社会教育・文化財課編1986『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和58年度　兵庫県教育委員会

兵庫県教育委員会社会教育・文化財課編1988『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和60年度　兵庫県教育委員会

平凡社地方資料センター編1999『兵庫県の地名』日本歴史地名体系第二九巻Ⅰ　平凡社

村上泰樹編1991『北園遺跡』兵庫県文化財報告第91冊　兵庫県教育委員会

第３章　遺　構

第１節　西地区の遺構

１　基本層序

調査区の現状は舗装された道路である。舗装部分の下層は、盛土により底上げされ、平坦な道路になっている。しかし地山面の状況は、北から南へ向かって緩やかに傾斜している。地山面での北端と南端では約60㎝の比高差である。

北側部分は地山面が遺構確認面となり、中世および近世の遺構が同一面で確認されている。調査区の中央付近から南側へは２面の旧耕作土が見られ、上層と下層の耕作土の間には、地山土のブロックが混じる整地土が確認できる。このことは、下層の耕作土面を整地して、新たに耕作面を作り直したと理解できる。南端部分には、中世段階の遺物を含む、にぶい黄橙色の砂混じりシルトの堆積が認められる。

南半部の調査区内の基本層序は、下層から地山土、中世包含層、旧耕作土（２面）となる。

２　中世の遺構

土坑（図版４～６・写真図版２・３）

中世に属すと考えられるものは17基を数える。このうち４基は、埋土中に礫が充填されている。

SK01は直径62㎝の円形で深さ52㎝を測る。底部はすり鉢状にすぼまり、埋土上半には礫を含む。

SK02は長径1.25m、短径1.06m、検出面からの深さ73㎝を測る。上部をSX05に切られるが、断面半球形で底部は丸い。粘性の強いシルトをブロック状に含み人為的に埋められた可能性が考えられる。

SK03は北西部分を他の土坑と切り合うが、長さ1.38m、幅1.23mの隅丸長方形をなし、深さ51㎝を測る。横断面形は逆台形で底は浅い皿状となる。直径15㎝～35㎝とやや大きめの花崗岩角礫を含む。

SK04は長さ1.12m、幅74㎝の丸みをおびた長方形状で、深さは15㎝に留まる。横断面形は皿状を呈する。埋土は粘質の強いシルトをよく含み、わずかに炭が含まれている。

SK05は長軸54㎝、短軸51㎝の円形で深さ21㎝、SK06は長軸62㎝、短軸55㎝の円形で深さ、17㎝を測る。SK06がSK05を切る。ともに上部には多量の礫が充填されている。

SK09は長軸1.08m、短軸56㎝の楕円形で、深さ37㎝を測る。立ち上がりが垂直に近いため、横断面形は長方形に近い逆台形をなし、底部は平坦である。

SK12はSK15を切り、隅丸長方形を呈する。長さ1.63m、幅1.04m、深さ56㎝を測る。横断面形は逆台形に近く、底は概ね平坦である。下半（７層）は粘性の強いシルトとベース土がブロック状に入り乱れる。上半では下部に粘質が強く礫を含む６層と、上部の褐色の粒度の粗い４・５層に分かれる。

SK14はSX03に切られる。長軸70㎝、短軸（検出最大幅）56㎝の楕円形で、深さ27㎝を測る。

SK15は長さ2.47m、幅1.07mの隅丸長方形で、深さ37㎝を測る。底部は浅い皿状となる。埋土は粘性の強いシルトとベース土がブロック状に入り乱れる。備前焼Ⅴ期の擂鉢片が出土している。

SK17・SK18は埋土中に３～18㎝大の亜角礫を充填し、SK17がSK18を切る。SK17は長軸80㎝、短軸64㎝の楕円形、SK18は直径88㎝程度の円形である。

SK20は隅丸長方形を呈し、長さ1.95m、検出最大幅1.02m、深さ32㎝を測る。西寄りで埋没後に柱穴が掘り込まれている。横断面形は逆台形をで底は平坦である。埋土は粘性の強いシルトとベース土がブ

ロック状に混じる。

SK21はSK20に切られ、検出最大長59㎝、幅71㎝、32㎝を測る。平面形は丸みをおびた長方形で、横断面形は逆台形に近いが、底部は南東方向に傾斜している。埋土の状況はSK20に酷似する。

SK26は長軸59㎝、短軸56㎝の円形をなし、上部に亜角礫が充填される。この亜角礫の検出上部において、須恵器甕の破片および丹波焼と思われる破片が出土している。

SK28はSD02を切り、検出面において長さ1.00m、検出最大幅64㎝を測る。平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は長方形に近いが底面のほうが検出平面よりも外側に出る袋状となる箇所がある。近世の整地層に類似した層により覆われており、埋没後に周辺を削って盛られた可能性が考えられる。

SK31は長さ2.85m、検出最大幅1.92mに楕円形に近い不整円形をなし、深さ20㎝を測る。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦である。土師皿（10）が出土するが、SD04と直結する状況からSX14同様の貯水施設とも考えられ、遺構自体は近世に属す可能性も残る。

落ち込み（図版４・６・写真図版４）

調査区北東隅付近において切り合う４基、北部において１基の落ち込みを検出した。

SX01はSX02・SX03を切り、東側は調査区外に及ぶ。いびつな台形状を呈し、検出最大長1.83m、幅1.70m、深さ39㎝を測る。最下層のシルトは粘性が強く、目張りしている状況が認められる。

SX02はSX01に切られ、SX04を切る。残存する形状から全体形は長方形状を呈するとみられるが、北辺では緩やかな弧を描き、周縁には11～26㎝大の亜角礫が配される。検出最大長2.53m、検出最大幅1.54m、深さは25㎝を測る。埋土は暗い灰色のシルトが混じる砂礫で構成され他とは異質である。

SX03はSX01に切られ、SK14を切る。平面形は台形状をなし、南側に一段浅いステップ状の部分を持つ。検出最大長4.30m、検出最大幅1.91m、深さ34㎝を測る。

SX04はSX02に切られる。検出最大長2.12m、検出最大幅1.91m、深さ53㎝を測る。断面形は逆台形で、底は平面だが北東隅が最も深い。埋土は粘性の強いシルトとベース土がをブロック状に混じる。

SX05はSK02の上部を切る。長さ2.63m、幅1.78mの台形ないしは五角形状を呈し、深さ45㎝を測る。中層（２層）を中心に花崗岩の角礫を含み、下層では粘性の強い灰色シルトとベース土がをブロック状に混じる。備前焼擂鉢や丹波焼甕破片、土師皿など16世紀を下限とする遺物が多く出土している。

柱穴（図版４・写真図版４）

12～13世紀代の遺物を含むものと、16世紀代の遺物を含むものがある。

P1は直径約55㎝、深さ30㎝で直径９～16㎝大の亜角礫を含む。P2は直径24㎝。P3は直径23㎝で、直径10㎝の柱痕が認められ炭を含む。検出上部において瓦質の羽釜が水平になって残存していた。P4はSX06を切り、直径22㎝、深さ45㎝を測る。P5は直径30～32㎝、検出面からの深さ22㎝を測る。北東に隣接するほぼ同規模の柱穴を切る。検出上部において瓦質の羽釜が水平に残存していた。

溝（図版６）

３本検出した。SD01・SD02は調査区北西隅で直行し、SD02がSD01を切る。最深でSD01が17㎝、SD02が23㎝を測る。SD04はSK31と直結し、最大幅82㎝、深さ11㎝で、底は南側に傾斜する。

３　近世の遺構

井戸（図版８・写真図版７）

３基検出した。いずれも素掘りで、断面形はいずれも長方形に近いが、井戸１のみ袋状を呈する。

井戸１の大部分は調査区西側に及ぶが、直径は検出した1.03mからさほど大きくはならないとみられ、深さ1.13㎝を測る。埋土はシルトを含む砂礫層で構成されるが、下層により多くシルトが含まれる。

井戸２はわずかに調査区西側に及ぶが、径98㎝、深さ63㎝以上を測る。

井戸３は長軸1.07m、短軸97㎝を測り、深さ1.69mを測る。中層（１・２層）は粘質シルトを中心に構成されるが、下層（３層）は砂礫で構成される。西側から南側にかけてL字に曲がる最大幅56㎝、深さ28㎝の溝が付属する。

埋甕（図版８・写真図版５）

埋甕１は、備前焼の甕底部付近が原位置に据わった状態で残存していた。内側には有機物と思われる白色の物質が付着している。掘り方は長軸63㎝、短軸57㎝とほぼ円形に近く、検出面からの深さはわずか８㎝である。甕は底径29㎝で、高さ約14㎝が残存していた。

埋甕２は、甕本体が原位置を留めた状態ではないが、埋土中から丹波焼の甕（32）が割れた状態で出土している。長さ1.51m、検出最大幅93㎝の長方形プランの土坑内部に、長さ1.14m、検出最大幅80㎝、深さ51㎝の掘り方を確認した。底部は長軸55㎝、短軸43㎝の楕円形をなし、平坦である。

埋桶（図版７～９・写真図版５～７）

９基を確認した。桶材が残っていたのは埋桶１・５・６のみで、他のものは埋土中に桶部分の痕跡が識別できた。埋桶２・４に埋土中には、亜角礫が充填されている。

埋桶１は削平が著しく、底面に底板のみ残存していた。掘り方は直径85～90㎝の円形で深さ７㎝を測る。底板は長軸65㎝、短軸61㎝で円形に近く、取り上げを試みたものの腐食が激しく断念した。

埋桶２は長軸1.20m、短軸1.12m、深さ42㎝の掘り方を確認した。埋土上層では直径４～25㎝大の亜角礫が多量に充填されるが、５㎝程度と10㎝程度の礫が多く特に前者が主流である。下層では直径約55㎝、深さ14㎝の桶部分の痕跡が観察され、礫も認められるが上層と比較して格段に少ない。

埋桶３は直径1.33m、深さ1.19mを測り、約３割が調査区西側に及ぶ。井戸との判断に困惑するが、底部付近北寄りにに径約80㎝の落ち込みが観察される。埋土はシルト混じりの砂礫層で構成される。

埋桶４は長軸1.17m、短軸1.08m、深さ51㎝の掘り方を検出した。埋土のうち１層が桶部分の堆積土と考えられるが、桶自体は残存していない。２層は裏込め土と考えられる。１層の方が２層に比して礫の量が格段に多く、粘性の強いシルトから粘土を非常によく含んでいる。

埋桶５は埋桶６を切る。掘り方は直径1.26m、深さ1.01mを測る。桶部は底板のみ残存し、埋土により裏込め土と桶部分の識別が可能であった。桶部の底部付近（６層）は炭を含む粘質シルト層、上部から中部付近（５層）は砂礫混じりのシルト層で構成され、平面中央付近には息抜きが設けられていた。

埋桶６は埋桶５に切られる。掘り方は長軸1.18m、短軸は残存長82㎝（復元長98㎝）を測る。桶部は桶が残存し、直径80～90㎝、底径54㎝、残存高は1.01mである。埋土の状況は埋桶５と同様である。

埋桶７は埋桶８に切られ、約４割が調査区西側に及ぶ。掘り方は直径1.29m、深さ1.11mを測る。埋土上層（１・２層）はベース土に似るがやや暗い色調を呈し、より粘質を帯びる。

埋桶８は埋桶７を切り、上部をSX13に切られる。掘り方は長軸は残存長1.41m、短軸1.32mのいびつな長円形を呈し、深さは80㎝を測る。桶は残存していなかったが、埋土中に桶部分の痕跡を認識した。

埋桶９はSX09中に位置し、直径1.12mを測る。遺物の時期から本遺構がSX09を切る可能性が高い。いわゆる広東碗（肥前系染付磁器）、染付鉢が出土しており、19世紀前半の所産と考えられる。

土坑（図版10・写真図版７）

近世に属すと考えられるものは20基を数えるが、確実に中世と判断できるものを除外した総数である。

SK07は西側半分強が調査区外に及ぶが、直径96㎝、深さ45㎝を測る。北側が最も深い。

SK08は長さ64㎝、幅56㎝の隅丸三角形に近い長円形で、深さ10㎝を測る。

SK10は長さ88㎝、幅58㎝の隅丸長方形で、深さ18㎝を測る。底は平らで断面形は逆台形を呈す。

SK11はSK12を切る。残存長78㎝（復元長84㎝）、幅60㎝の隅丸長方形状を呈し、深さ32㎝を測る。底はほぼ平坦で断面形は逆台形を呈する。

SK13は長軸1.07m、短軸71㎝の楕円形をなし、深さは15㎝程度である。中央付近で柱穴を切る。

SK16はSK15を切る。長軸70㎝、短軸66㎝の楕円形で、深さ18㎝を測る。

SK19はSK20を切る。長さ94㎝、幅85㎝の丸みを帯びた長方形を呈し、深さは34㎝を測る。底は平坦で、断面形は逆台形を呈する。

SK22は東側が調査区外に及ぶが楕円形になると思われ、長軸92㎝、検出幅67㎝、深さ66㎝を測る。上部をSK27に切られる。底部は平坦で、本来埋桶であった可能性も指摘される。

SK23は長さ1.25m、幅1.21mの方形で、東側では深さ30㎝を測る。底部西側が東側に比べて２～６㎝高い段状となり、土層断面観察では把握できなかったものの複数の遺構の切り合いないしは掘り返しの画期を想定できる。SK10と接しているが、両者の切り合い関係は不明である。

SK24は西側が調査区外に及ぶが長円形であろう。検出最大長1.13m、最大幅36㎝、深さ16㎝を測る。南半の埋土上部に４～21㎝の亜角礫の集積が認められる。

SK25はSK21を切る。検出長2.16m（復元長2.38m）、検出最大幅1.26mを測り、深さは最大で30㎝、南側の一段高い部分で15㎝を測る。底部は北側が最も深いが概ね平坦であり、断面形は逆台形を呈する。埋土中から、さな（35）のほかに肥前系染付青磁も出土しており、18世紀代と考えられる。

SK27はSK22の上部を切る。東側が調査区外に及ぶが楕円形になると思われ、長さ1.78m、検出幅42㎝、深さ51㎝を測る。底部は北側が若干低いが概ね平坦で、断面形は逆台形となる。

SK29は直径約85㎝の円形で、深さ26㎝を測る。SK30と近接するが、切り合い関係は不明である。

SK30は長軸90㎝、短軸76㎝の楕円形で、深さ24㎝を測る。底部は平坦で断面形は逆台形を呈す。

SK32はSX14に切られる。長さ2.83m、幅1.11mを測る長方形に近く、深さは30㎝を測る。底は平坦で、断面形は逆台形を呈する。出土した丹波焼擂鉢および火入れから18世紀代のものであろう。

SK33はSX06を切る。長軸1.15m、短軸90㎝を測り、検出面からの深さ54㎝を測る。掘り方の規模・形状より本来埋桶であった可能性が指摘される。

SK34は長さ1.50m、幅1.28mの隅丸長方形で、深さ30㎝を測る。底は南側が最も深い。

SK35は調査区南東部に位置する。長軸85㎝、短軸78㎝の楕円形で、深さ10㎝を測る。

SK36は長軸119㎝、短軸98㎝の楕円形で、深さ40㎝を測る。底は平坦で、断面形は逆台形を呈する。南西側でSK37と接するものの、切り合い関係は不明である。

SK37は北側及び西側を確認トレンチにより失うが、検出長73㎝、検出幅56㎝、深さ27㎝を測る。

落ち込み（図版10・写真図版８・９）

SX06はSK33およびその北西側の土坑に切られる。平面形L字状を呈し、長さ5.83m、4.67mを測る。底面は約40㎝を測る。南北で新旧２段階に分かれ、南側のものが新しい。

SX07は西部のほとんどが調査区外に及ぶが、検出最大長4.72m、最大幅1.75m、深さ35㎝を測る。北端部西壁に石積みが確認されたが、裏込めの堆積状況を観察することはできなかった。南部を切るSX10が同様の石積みおよび裏込めの状況と思われる。遺物の多くが埋土最下層から出土している。

SX08～SX11は調査区中央部付近で切り合う。SX08はSX09を切るが、SX10・SX11を含めた切り合いが錯綜し、規模は把握できなかった。深さは49㎝である。SX09は長さ4.64m、最大幅2.22mの隅丸長方形状を呈し、深さ38㎝を測る。SX10 はSX07を切り、埋桶３･SX09 ･SX11に切られる。規模は不明だが、深さ77㎝を測る。SX11はSX10を切り、井戸２･埋甕１･埋桶２を切るがSX09との関係は不明である。規模は不明ながら調査区の東西を横断し、深さは25㎝程度である。SX08～SX10では18世紀代の染付磁器のほか、SX08・SX09では16世紀を下限とする備前焼・丹波焼甕片、瓦質火鉢、土師皿なども多く出土している。SX11では19世紀中頃から後半にかけての遺物が主体である。

SX12はSX14に切られ、東側は調査区外に及ぶ。最大長3.65m、最大幅3.52m、深さ42㎝を測る。

SX13はSX14に切られ、埋桶７・８の上部を切る。埋桶８を切る。長さ2.29m、検出最大幅1.40mの長方形で、深さは48㎝を測る。底部は底中央付近が最も深くなる浅い皿状となる。

SX14はSK32・SX12を切る。掘り方の平面形は長さ1.67m、幅1.20mの長方形に近いが、南半では幅が狭まり、SD05の取りつく付近では円形に近くなっている。北西隅から西側にかけておよび、東側では14～37㎝大の亜角礫を主体とした石積みを設け、東側では２～３段、西側では北半では２～３段、南半では１段積まれている。この西側の石積みの段構成の異なる境目は平面形の屈曲部分となっており、石積み列が30㎝近く内側に入り込み南半部幅が狭くなっている。深さは35㎝で、北半にむけて南半よりスロープ状に深くなっている。なお、SD05取り付き部では、16㎝の高低差を測る。

溝（図版11・写真図版９）

SD03はL字状に屈曲する溝で、延長29.7m、最大幅26㎝、深さ７㎝を測る。SD05はSX14から堀状遺構まで導水する溝である。中央部分が途切れるが検出長17.3m、幅53㎝～93㎝、深さ16㎝を測り、底部の南北両端での高低差は29㎝である。両側には12～45㎝の亜角礫が配されている。

堀状遺構（図版12・写真図版10）

調査区南端に位置する。東西方向に延び、東区の堀状遺構と同一のものである。堀の南肩部分は調査区外で、すでに工事が終了しており、検出は不可能であった。確認できる堀幅は5.5m以上で、地山面からの深さは３mである。堀の北肩部の掘込みは、多少傾斜をもつがほぼ垂直で、底部付近は逆台形様に掘削され、堀底が平坦である。箱堀に分類される。埋土は下層に暗褐色～灰色のシルトが、その上には暗灰色粗砂～礫層が堆積している。これらは堀が機能していた段階の堆積と思われる。図示できなかったが18世紀代の肥前染付の細片が最下層より出土している。近接する中世城郭の防御施設と考えられるが、その機能が停止した近世段階には、水利施設として機能していたのであろうか。

第２節　東地区の遺構

１　調査方法と概要

東地区も現道部分であり、道路を横切るライフラインを中心に後世の手が加えられていた。特に西側部分はほぼ全体に既存管の影響を受けており、調査対象外とした。調査区は最大幅で2.5m、延長56mで、南端を０とし10mごとに便宜的に区切って１～６区とした。遺物の取り上げや実測等もこの杭を基準として使用した。東側店舗の入口を確保するために、１～３区と４～６区に分けて調査を実施した。

今回の調査も前回と同じく中世から近世にかけての遺構を検出した。西地区と違って中世に遡る遺構は堀だけで、大半の遺構は近世でも後半期に位置するものである。町屋遺構として捉えられる生活感の強い遺構群である。

検出した遺構は堀状遺構と炉跡・溝・落ち込み・土坑・埋甕・埋桶・ピットである。溝は屋敷を区切っていた溝である可能性が残される。ピットは掘立柱建物に復原できるものではなかった。

２　近世の遺構

炉跡

３基確認している。円形の焼土坑２基が並んだ炉跡１と、方形掘り方の炉跡２、円形掘り方の炉跡３の３基がある。北側の炉跡１と南側の炉跡２の間に、両者を切る形で円形土坑があるが、これは近現代の掘り込みである。

炉跡１（図版15・写真図版12・13）

掘り方内に粘土を貼って構築した円形炉が、南北に２基並んでおり、北から炉跡１-a・１-bとした。炉の内壁は高熱を受けて赤く焼けており、検出時には環状の焼土が２基並んだ状況であった。円形炉の内径は50～60㎝、検出面からの深さ40㎝である。西端はガス管の掘り方に切られていて不明瞭であるが、１-aの断面の状況からみて、西側に焚き口状の施設があったようである。

埋土の下層には炭・焼土混じりの層が堆積し、中層に炭層・焼土層が形成される。上層は円礫を詰めて人為的に埋め戻されている。埋土からはいぶし瓦片が出土しており、18世紀～幕末の所産とみられる。

炉跡２（図版15・写真図版12・14）

方形掘り方で、西端はガス管の掘り方に切られている。規模は南北1.9m×東西の現存長1.2mである。掘り方の底面、埋土中層、埋土上面の３面での利用を確認した。

掘り方の底面は南側1.2mを一段深い平坦面とし、北側70㎝と東側20㎝は約15㎝高いステップとなっている。北側ステップには幅40㎝の溝状の掘り込みがある。掘り込み部分で火を焚いたとみられ、底が赤く硬化した焼土面となっている。炭・焼土は南側の平坦面に掻き出されており、作業場もしくは灰原になっていたものと考えられる。

下層の焼土・炭層を明褐色の粘質土で埋めた後、全面に中層の焼土・炭層が広がっており、掘り方全体が作業場もしくは灰原として利用されていたものとみられる。

中層の焼土・炭層を礫混じりの砂質土で埋めた後の埋土上面では、炭・焼土面が南北に２基並んだ状況を検出し、北から炉跡２-a・２-bとした。いずれも東側がふくらむ不整形な三角形で、二口のカマドの下部であった可能性がある。砂質土からはいぶし瓦片が出土しており、18世紀から幕末の所産とみられる。炉跡１との併行関係は不明である。

炉跡３（図版16・写真図版17）

炉跡３は４区にある。径50㎝の平面円形で、東側に開き炭・焼土が溝状に広がっている。壁に厚さ２～３㎝の粘土を貼っており、被熱によって赤化している。２時期以上あり古い時期は東西方向が多少長い楕円形に近い。最も深い部分で22㎝を測る。新しい段階では10㎝前後の深さと浅い。炭層が底に堆積しており、その上の層にも焼土・炭を含んでいる。焼土層は調査区東端まで延びており約80㎝の長さとなる。東に向かって浅くなっている。底は僅かに湾曲ぎみの平坦な形状になる。壁の開口部は約20㎝開いており、東側に広がっており端部で65㎝を測る。埋土から五徳の破片が出土している。上部に置かれたものであろうか。埋土最上層は瓦を含むオリーブ黒極細砂で幕末に埋められた土層であろう。南側に切られた土坑（SK08）があり、やはり焼土・炭を含んでいる。底・壁は明瞭に焼けてはいないが、関連遺構であろう。

埋甕（SI01／図版16・写真図版26）

調査区北端に位置し、SX01を切る。時期的に新しいと想定したが、整理作業段階で埋甕が中世の備前焼甕と判明した。遺構の時期は幕末で、伝世品が使用された例として興味深い。底部は掘り方底に接し、直立状態で据えている。甕下半部は原位置を保つが、上半部は下半部に収まっていた。町屋廃絶後の片付けで破砕されたものと思われる。土坑底は平坦で甕底径より１回り大きい45㎝で深さ36㎝を測る。

土坑（図版17・18・写真図版20・21）

土坑は９基確認した。遺構の性格がわかるものはない。平面形態も様々である。

SK01は６区にあり、径25㎝、深さ15㎝を測る。断面は深めの半球形で底は丸い。埋土は小礫を含む細砂の上に地山シルトを含むシルト質の土を入れている。最も新期の遺構で複数の遺構を切っている。

SK02は５区にあり、長径40㎝短径32㎝の平面は卵形をしている。中央部分に長径17㎝短径12㎝のやはり卵形の窪みがあり、その北東側に粘土を貼っている。粘土は卵形の尖った部分に置いている。土坑全体は底面25㎝で平坦になっており、深さ24㎝を測る。

SK03は６区にありSX02に接した方形の土坑である。１辺30㎝で深さ10㎝を測る。底は平坦である。大きめのピットに南辺を切られている。

SK04は５区にあり、南西部をSK02に切られている。やや歪な径50㎝の土坑で深さ20㎝を測る。底はやはり平坦である。

SK05は６区にあり、SX02を切っており、SK01に切られている。隅円方形の最大長25㎝の土坑である。最大の深さは12㎝である。

SK06は５区にあり、水道管によって北側を削られている。幅25㎝のトラック形の土坑で残存長40㎝、深さ10㎝を測る。底は平たい。

SK07も５区にあり。南北に主軸を持つ長楕円形の土坑である。長さ88㎝で北側に径20㎝の不定円形の土坑がさらに掘り下げられている。深さ15㎝である。

SK08は４区にあり、炉跡３南側にある土坑である。前記したように焼土・炭を含んでいることから、火に関連する土坑であろう。

SK09は４区にあり、SX07底面に存在している土坑である。土坑は全体的に新しいものが多いが、SK09はSX07に切られた古い時期の遺構である。径13㎝で深さ５㎝を測る。

落ち込み（図版18～20・写真図版15・19・21～24）

SX01は調査区北端にあり、北東方向に延びている。肩部分にSI01が存在しており、SX01の方が古い遺構である。深さ15㎝を測り断面形は擂鉢状になっている。最大幅で1.14ｍを測る。

SX02は６区にある不定長方形の落ち込みである。南東部と北西部に土坑が複数あり、SX02を切っている。長さは最大値で1.3ｍを測るが、深さは15㎝と浅い。東西方向に長く、南北は90㎝である。

SX03は遺構中央をガス管と水道管が横断し大きく損われ、南西部はSK06に切られる。南北3.1ｍ・東西80㎝以上を測り、深さは80㎝と深い。深い部分はガス管南側（1.3ｍ分）であるが、その北側にも遺構上層は延びるようで、SK02・04まで及ぶ。肩は急傾斜で70°前後になり、底は平坦である。

SX04の上層は不定形の落ち込みで廃棄土坑と考えられる。比較的多くの瓦と土器類･礫が入っている。遺物などを取り上げてから掘り下げたところ、下層から埋桶（SI02）と方形の落ち込みを検出した。１対になった遺構と考えられる。城下町などでは埋桶が２基（大小のことが多い）並んでおり、それとは異なる機能と思われる。方形のものは珍しいと思われる。円形土坑（SI01）は径90㎝で深さ55㎝を測る。桶が残存していた。埋土から柿釉が出土しており、19世紀のものである。方形の落ち込みは、調査区東側に延びており、南北1.8ｍあり東西は調査範囲で1.1ｍを測る。深さは30㎝である。底は平坦で東西方向に板を敷いている。方形の遺構が大きいことから水回りの台所のような遺構が想定される。

SX05は５区にある調査区東に延びている落ち込みである。端部だけが調査区に入っている状態である。最大長2.2ｍ、幅30㎝、深さ30㎝を測る。

SX06は５区にあり、SX05の北側に位置する。長方形の落ち込み２基が切りあっている。古い方は残存幅70㎝で残存長1.2ｍで東側に続いている。深さは15㎝と浅い。新しい方は幅90㎝、残存長1.25ｍで深さ20㎝と浅い。

SX07は４区に位置し最大長1.7ｍで深さ25㎝の不定円形である。後に中央にSK09が築かれている。

SX08は４区にある大形の落ち込みである。最大長3.7ｍを測り、調査区西側に延びている。新しい時期の遺構で廃棄土坑と考えられる。

SX09は２・３区にまたがり、方形をしている。東半部は調査区外に及んでいる。掘り方の断面形は緩やかな逆台形で、底面は平坦である。規模は径3.3ｍ×3.7ｍ、深さ40㎝である。

堀状遺構（図版14・写真図版15）

調査区南端の１区に位置する。昨年度の調査区から続く東西方向の堀状の落ち込みで、幅は検出範囲内で5.3ｍあるが、南肩は調査区外に伸びており、本来は６～７ｍを超えるものであったとみられる。検出面から3.6ｍまで深掘りしたが、底には到達しておらず、深さを確認することはできなかった。断面形は、北側の肩部から深さ1.8ｍまでは垂直に近く、以下は傾斜面となっている。

埋土の上層（１～７層）では､多量の河原石を含む土砂が北側から投棄されている状況が見て取れた。また中層（８～13層）では、被熱シルトブロック・焼土・炭・瓦が層を成しており、火災に伴う片付け行為があったものと考えられる。出土した陶器片は概ね18～19世紀の年代である。

下層については重機による断ち割りのため充分な観察はできなかったが、深度２ｍ以下は暗灰色シルト層となり、2.4ｍ以下になると亜円礫の堆積となる。出土した陶器・丹波焼片には、17～18世紀の年代を示すものがある。

第４章　遺　物

第１節　中世遺構出土の土器・陶磁器

中世の土器・陶磁器のうち、ここでは中世遺構から出土したものを報告し、近世の遺構から出土するものについては第２節で扱う。なお、中世の遺構は西地区のみで検出されている。

SK01出土遺物（図版21・写真図版28）

１は擂鉢の口縁部片である。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成し、一部を捻って片口を作り出す。内外面とも回転ナデ調整を施す。備前焼Ⅳ期の擂鉢で15世紀代に比定される。

SK09出土遺物（図版21・写真図版25・29）

２は土師器皿である。非ロクロ成形で器壁は全体に薄い。底部は上げ底気味に成形し、体部は直線的に外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施す。京都系土師器皿で16世紀代の所産である。３は青磁碗である。体部は内彎気味に外上方に延び、口縁部は外方にひらく。体部内面に沈線が１条巡る。龍泉窯系青磁無文碗で16世紀代に比定される。

SK12出土遺物（図版21・写真図版29）

４は土師器皿である。非ロクロ成形で底部はヘソ皿状に上方に突出する。内外面ともヨコナデ調整を施す。京都系土師器皿と考えられる。５・６は無釉陶器甕である。５は体部は内彎し、口縁部は直立して、断面は楕円形状に肥厚する。口縁部内外面には強い回転ナデ調整を施す。備前焼Ⅳ期の甕で15世紀代の製品である。６は平底で体部は内彎気味にほぼ直上に延び、口縁部は外方に水平に折り曲げる。内外面とも回転ナデ調整を施し、胴部外面に指頭圧痕が残る。丹波焼で16世紀代の製品である。

SK18出土遺物（図版21）

７は土師器火舎である。高台は細く高く、「ハ」の字状に外方にひらく。平底で体部は直線的に外上方に立ち上がる。内外面とも回転ナデ調整を施す。色調はにぶい黄橙色を呈する。

SK20出土遺物（図版21・写真図版27）

８は施釉陶器皿である。高台は断面台形状で低い。平底で体部は内彎気味に外上方に延び、口縁部は外方にひらく。底部内面に草花文をヘラで描き、内外面とも灰釉を施釉する。瀬戸・美濃系灰釉陶器の黄瀬戸皿で16世紀代に比定される。

SK28出土遺物（図版21・写真図版27）

９は瓦器椀である。器形は全体に若干歪む。体部内面にミガキ調整を施し、平行暗文が残る。色調は暗灰色を呈する。

SK31出土遺物（図版21）

10は土師器皿である。非ロクロ成形で器壁は全体に薄い。平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強いヨコナデ調整を施す。体部内外面には指頭圧痕が残る。京都系土師器皿である。

SX03出土遺物（図版21・写真図版25・27・29）

11は土師器皿である。ロクロ成形で平底、体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施す。底部外面は不調整で糸切痕が残る。12は無釉陶器壺である。平底で体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。体部内外面に回転ナデ調整を施し、底部外面には板ナデ調整を加える。備前焼と考えられる。13は体部が上に向かって内傾する徳利である。備前焼で16世紀代に比定される。14は瀬戸・

美濃系灰釉陶器丸碗である。口縁端部は尖り気味に収め、内外面とも灰釉を施釉しオリーブ黄色に発色する。16世紀代の製品である。15は瀬戸・美濃系灰釉陶器皿である。内面にヘラ状工具で菊花文を施文し、内外面とも灰釉を施釉する。黄瀬戸皿で16世紀代の製品である。16は青磁鉢である。体部は内彎して外上方に延び、口縁部は屈曲して若干外方にひらく。内外面とも青磁釉を施釉し、高台は露胎である。龍泉窯系青磁と考えられる。

SX05出土遺物（図版21）

17は非ロクロ成形の土師器皿で器壁は全体に薄い。平底で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部内外面に強いヨコナデ調整を施し、体部外面に指頭圧痕が残る。16世紀代の京都系土師器皿と考えられる。

SD01出土遺物（図版21・写真図版25）

18は土師器皿である。非ロクロ成形で平底、体部は直線的に外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施し、色調は灰白色呈する。京都系土師器と考えられる。

SD02出土遺物（図版21・写真図版27）

19・20はいずれも非ロクロ成形の土師器皿である。平底で底部と体部の界は不明瞭である。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。色調は浅黄橙色を呈する。21は須恵器鉢である。口縁部は上下に拡張して小さい縁帯を作り、口縁部内外面に強い回転ナデ調整を加える。東播系須恵器鉢で14世紀代に比定される。

柱穴出土遺物（図版21・写真図版25・27・29）

22はP1出土の白磁壺底部で、高台は断面台形状で幅が広く比較的低い。平底で底部の器壁は厚く、体部は直線的に外上方に延びる。内面に透明釉を施釉し灰白色に発色する。外面は露胎である。華南産白磁四耳壺（12世紀代）か。23・24はP2出土。23は須恵器甕で、口縁部は外方にひらき、口縁端部は外方につまみ出す。口縁部内外面に強い回転ナデ調整を施し、体部外面には平行叩き目が残る。東播系須恵器で12世紀後半～13世紀前半代。24は青磁香炉である。体部は直立し、口縁部外面に浅い沈線が１条巡る。内外面とも青磁釉を施釉し、オリーブ灰色に発色する。16世紀代の龍泉窯系。25はP3出土の瓦質土器羽釜である。平底で体部は僅かに内彎気味に外上方に延び、体部外面に断面三角形状の比較的幅の広い鍔を貼り付ける。体部外面は縦・横方向の板ナデ調整を施し、体部外面の最下部にはミガキ調整を加える。鉄鍋を模倣したもので、色調は暗灰色を呈する。26はP4出土の須恵器鉢で、体部は直線的に外上方に延び、口縁部は玉縁状に肥厚する。色調は灰色を呈する。東播系須恵器で13世紀代。

第２節　近世遺構出土の土器・陶磁器

１　西地区の遺物

井戸１出土遺物（図版22・写真図版27・28）

27は非ロクロ成形の土師器皿で平底、体部は若干外反気味に外上方に延びる。口縁部内外面に強いヨコナデ調整を施す。京都系土師器皿である。28は瓦質土器鍋で体部は直線的に外上方に延び、口縁部は外方にひらき、口縁端部は上方につまみ上げる。体部外面に縦方向、内面に横方向のハケ目調整が施される。焼成はややあまく色調は黄灰色を呈する。29は備前焼擂鉢の口縁部で口縁部は上下に拡張して縁帯を形成し、外面に凹線が２条巡る。体部内面に櫛描きの擂目を施文する。備前焼Ｖ期で16世紀代。

井戸２出土遺物（図版22・写真図版25）

30は土師器焙烙である。型作り成形で平底、体部はやや内傾する。口縁部内外面には強いヨコナデ調整が、底部外面には多方向の板ナデ調整が施される。焼成はややあまく、色調は黄灰色を呈する。

埋甕２出土遺物（図版22・写真図版25）

31は土師器火舎の底部である。脚部は若干外方にひらき、比較的細く高い。脚部の接地面には浅い抉りが入る。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。体部内面にはナデ調整が外面には板ナデ調整がそれぞれ施される。色調は橙色を呈する。東山焼のいわゆる弥七焜炉と考えられ、19世紀前半代に比定される。32は丹波焼甕である。平底で、体部は僅かに内彎気味にほぼ直上に延び、口縁部はT字状を呈する。内外面とも鉄釉を施釉し、さらに灰釉を柄杓掛けする。19世紀前半代の製品と考えられる。

埋桶４出土遺物（図版22）

33は白磁壺の底部である。高台は幅が広く低い。体部は大きく内彎する。外面に透明釉を施釉し、内面は露胎である。肥前系磁器の油壺と考えられ、18世紀代に比定される。

埋桶６出土遺物（図版22・写真図版30）

34は緑釉の御神酒徳利である。高台部を欠失する。広義の京焼系陶器で19世紀前半代に比定される。

SK25出土遺物（図版22・写真図版27）

35は焜炉に附属するさなである。型作り成形で円形の穿孔を施す。焼成は軟質で色調は灰白色を呈す。

SK32出土遺物（図版22・写真図版25･30）

36は無釉陶器の火入れで、平底で体部はやや外反気味にほぼ直上に延びる。体部外面に把手を貼り付ける。内面に部分的に灰釉が附着する。丹波焼と考えられる。37は丹波焼擂鉢の底部で、平底で体部内面に６条１単位の櫛描きの擂目を施文する。底部内面には同心円と×印状の擂目を施文する。18世紀代。

SX06出土遺物（図版22・写真図版28）

38は無釉陶器鉢。平底で体部は直立し、口縁部は若干横方向に拡張する。口縁部上面に凹線が２条、体部外面全面に凹線を施文する。内外面とも赤土部を塗布しにぶい赤褐色を呈し、丹波焼と考えられる。

SX07出土遺物（図版22・写真図版28）

39は備前焼擂鉢である。口縁部は上下に拡張して縁帯を作り出し、口縁部外面には凹線が2条巡る。体部内面には櫛描きの擂目を施文する。備前焼Ⅴ期の製品で16世紀代に比定される。

SX08～10出土遺物（図版22・写真図版25）

40はロクロ成形の土師器皿である。平底で体部は直線的に外上方に延びる。底部外面には糸切痕が残る。焼成は良好で色調はにぶい黄橙色を呈する。

SX14出土遺物（図版22・写真図版25・26・29）

41は無釉陶器の壺。体部は大きく内彎し、頸部は短く、口縁部は若干外方にひらき、蓋受けをもつ。体部外面に赤土部を塗布しにぶい黄褐色に発色する。丹波焼あるいは信楽焼か。42は白磁皿で内外面とも透明釉を施釉し、底部内面は蛇の目状に釉ハギする。外面の高台脇以下は露胎である。肥前系波佐見産の粗製の白磁皿で18世紀前半代。43は白磁油壺である。高台は断面台形状で比較的低い。体部は大きく内彎する。外面は透明釉を施釉し、内面は露胎である。肥前系波佐見産の粗製の白磁壺で18世紀代。

SD05出土遺物（図版22・写真図版28）

44は堺・明石産擂鉢である。口縁部は上下に拡張して縁帯を作り、外面に凹線２条、内面に凹線２条がそれぞれ巡る。体部内面に10条１単位の擂目を施文する。18世紀代の所産と考えられる。

包含層出土遺物（図版23・写真図版26・28）

45・46も44と同タイプの堺・明石産擂鉢である。いずれも７条１単位の櫛描きの擂目を施文する。47は施釉陶器鉢である。平底で口縁端部は玉縁状に内側に肥厚する。内面に灰釉を施釉し灰オリーブ色に

発色する。外面は露胎である。丹波焼と考えられ、18世紀代の製品であろう。48は無釉陶器の甕である。平底で体部は内彎気味に外上方に延び、口縁部は大きく外方にひらく。外面には土部を塗布し暗赤褐色に発色する。底部外面は露胎である。丹波焼と考えられる。

2　東地区の遺物

埋甕１出土遺物（図版24・写真図版26）

49は備前焼甕である。平底で体部は大きく内彎し、肩部は丸味をもつ。頸部は短く直立し、口縁部は断面楕円形状に肥厚する。口縁部内外面には強い回転ナデ調整を加える。体部外面中位には横方向のナデと縦方向の板ナデ調整が、また体部外面下位には縦方向の板ナデ調整が施される。焼成は良好で色調は暗赤褐色を呈する。備前焼Ⅳ期相当で、15世紀代に比定される。

炉出土遺物（図版24・写真図版27・30）

50～53はいずれも非ロクロ成形の土師器皿である。50・51は底部はヘソ皿状のやや上げ底で、体部は直線的に外上方に延びる。52は器壁は全体に薄く、平底で体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。53は平底で底部と体部の界は不明瞭で、体部は緩やかに外上方に延びる。いずれも京都系土師器皿で15世紀代～16世紀代に比定される。54は土師器鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を施し、体部外面にはヘラケズリ調整を加える。体部内面には横方向の細かいハケ目調整を施す。色調は灰色を呈する。55は唐草文軒平瓦である。外面にはタテ・ヨコ方向のナデ調整を施す。色調は暗灰色を呈する。近世の所産であろう。

SK01出土遺物（図版24）

56・57は瀬戸・美濃系灰釉陶器皿である。56は高台が断面台形状で比較的低く、平底で体部は底部との界で大きく屈曲し外上方に延びる。口縁部は外方にひらき端部は丸味をもつ。内面～口縁部外面に灰釉を施釉し、灰オリーブ色に発色する。大窯期のいわゆる黄瀬戸皿で16世紀代の製品である。57も同様に黄瀬戸皿。高台は断面三角形状で低い。底部内面に印花でかたばみ文を施文する。16世紀後半代。

SK02出土遺物（図版24）

58は瀬戸･美濃系灰釉陶器皿である。平底で底部の器壁は比較的厚い。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は丸味をもつ。内面から口縁部外面に灰釉を施釉し淡緑灰色に発色する。外面の体部以下は露胎で底部外面には糸切痕が残る。大窯期の製品で16世紀代に比定される。59は青磁皿である。高台は断面台形状を呈し、底部の器壁は非常に厚い。内外面とも青磁釉を施釉し、灰オリーブ色に発色する。底部内面は蛇の目状に釉ハギし、高台裏は露胎である。肥前系青磁と考えられる。

SK04出土遺物（図版25・写真図版27・28～30）

60は土師器焙烙。丸底で体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚する。口縁部内外面には強い回転ナデ調整が施され、体部外面にはヘラケズリ調整が加えられる。外面には煤が附着し、色調は橙色を呈する。61は土師器風炉と考えられる。器壁は比較的厚く、体部は内彎気味にやや内傾する。口縁部内面に突起状の受部を貼り付ける。体部外面中央に花弁状の透かしを入れる。外面にはヘラミガキ調整が施される。焼成は良好で色調は橙色を呈する。62は土師器の隅丸方形状の平面形状を呈する容器で三方と考えられる。体部内外面にはヨコ方向の板ナデ調整が、底部外面には多方向の板ナデ調整がそれぞれ施される。色調はにぶい橙色を呈する。63は堺・明石産の擂鉢。体部は僅かに内彎気味に外上方に延び、口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部内外面にそれぞれ凹線が２条巡

る。体部内面には８条１単位の櫛描きの擂目を施文する。18世紀代。64は壺蓋。体部は直線的に短く外上方に延びる。上面に環状の把手を貼り付ける。外面には鉄釉施釉の後、灰釉を施釉する。内面は露胎である。丹波焼と考えられる。65は施釉陶器壺である。平底で体部は大きく内彎し、口縁部は短く外方にひらき、端部は玉縁状に肥厚する。内面全面に灰釉を施釉し、外面は露胎である。丹波焼と考えられる。66・67は肥前系白磁の紅皿。型作り成形で高台は断面三角形状で低い。体部外面に型押しで菊花状に縦線を施文し、口縁端部は上面に端面をもつ。内面に透明釉を施釉し、外面は露胎である。19世紀前半代。68は三ツ巴文軒丸瓦。内面には多方向のナデ調整が施される。色調は暗灰色を呈する。

SX03出土遺物（図版25・写真図版26･28）

69は土師器焙烙である。口縁部は断面三角形状に肥厚し、内外面とも強い回転ナデ調整を施す。焼成は良好で色調は橙色を呈する。外面に煤が附着する。70は無釉陶器擂鉢である。口縁部は直線的に外上方に延び、口縁部は上下に拡張して縁帯を作る。口縁部外面に凹線が２条巡る。体部内面には９条１単位の擂目を施文する。焼成は堅緻で色調は灰茶褐色を呈する。堺・明石産擂鉢と考えられる。71は二彩唐津鉢である。高台は幅が広く比較的低く、体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。内面全面に白濁釉施釉の後、灰釉と緑釉を施釉する。外面は白濁釉を刷毛塗りした後、灰釉と緑釉を施釉する。外面の高台脇以下は露胎である。肥前系二彩唐津鉢で17世紀後半～18世紀前半代に比定される。73は青磁皿の底部片である。内面には櫛描きの雷光文、ヘラ描きの草花文をそれぞれ描き、青磁釉を施釉する。外面は露胎である。同安窯系青磁で12世紀後半～13世紀前半代に比定される。

SX04出土遺物（図版25・写真図版27）

74～76はロクロ成形の土師器皿である。74は平底で体部は直線的に外上方に延びる。内外面とも回転ナデ調整を施し、底部外面は不調整で糸切痕が残る。焼成は良好で色調は浅黄橙色を呈する。75は内面に透明釉を施し外面は露胎のいわゆる柿釉の灯明皿である。76は底部内面に凸帯が１条巡る。内面から口縁部にかけては透明釉を施釉する。75・76はいずれも19世紀前半代に比定される。

SX07出土遺物（図版26・写真図版28）

77は堺・明石産擂鉢の口縁部片である。口縁部は上下に拡張して縁帯を作り、外面には凹線が２条巡る。焼成は堅緻で色調はにぶい赤褐色を呈する。78は瀬戸・美濃系の施釉陶器皿である。高台は断面台形状で低く、体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。内外面とも透明釉を施釉し外面の体部下半以下は露胎である。底部内面に鉄釉の摺絵で草花文を施文する。79は丹波焼の鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は断面三角形状に内側に肥厚する。内面全面に灰釉を施釉し、外面は露胎である。

SX08出土遺物（図版26・写真図版26・28）

80は須恵器甕の体部片である。外面に綾杉状の叩き目が残る。焼成は不良で、色調は暗褐色を呈する。東播系須恵器と考えられる。81は瓦質土器羽釜である。体部～口縁部はほぼ直立し、口縁端部は斜め上方につまみ上げる。口縁部外面には断面三角形状の比較的短い鍔を貼り付ける。体部外面にはヨコ及び斜め方向の板ナデ調整を、体部内面には多方向のナデ調整を施す。焼成は良好で色調は黄灰色を呈する。82は丹波焼の植木鉢である。平底で体部外面の最下部に三角形状の脚を貼り付ける。体部は直線的に外上方に延び。口縁部は外方に水平に折り曲げる。口縁部上面に波状文、体部外面上位に雷文帯などを貼り付ける。焼成は堅緻で色調は灰黄褐色を呈する。19世紀前半。83は備前焼の擂鉢片。口縁部は上下に拡張して薄い縁帯を作り、外面に凹線が２条巡る。焼成は堅緻で色調は褐灰色を呈する。備前焼Ⅴ期相当で16世紀代。84は瀬戸･美濃系灰釉陶器皿。高台は幅が広く低く、体部は内彎気味に外上方に延びる。

口縁部は若干外方にひらく。内面～口縁部外面に灰釉を施釉し淡緑灰色に発色する。外面の口縁部以下は露胎である。いわゆる黄瀬戸皿で16世紀後半代。85は肥前系唐津皿である。高台は断面台形状を呈し、体部は内彎して外上方に延びる。口縁部は外方にひらき、口縁部内面に凹線が１条巡る。内外面とも灰釉を施釉し灰オリーブ色に発色する。いわゆる溝縁皿で17世紀前半代に比定される。

SX09出土遺物（図版26・写真図版28・30）

86は堺・明石産擂鉢。体部は直線的に外上方に延び、口縁部は上下に拡張して縁帯を作る。口縁部外面に凹線２条、口縁部内面に凸帯が１条巡る。また体部外面には板ナデ調整を、体部内面には９条１単位の擂目を施す。焼成は良好で色調はにぶい赤褐色を呈する。87は型作り成形の土製人形で体部側面に貼り合わせ痕が見られる。彩色は全て剥落し、色調は橙色を呈する。モチーフは花魁と禿と考えられる。

堀出土遺物（図版26・写真図版27～30）

88は非ロクロ成形の土師器皿。平底で底部と体部の界は不明瞭で体部は内彎気味に外上方に延びる。内外面ともヨコナデ調整を施すが体部外面下位には指頭圧痕が残る。焼成は良好で浅黄橙色を呈す。89は丹波焼擂鉢。体部は直線的に外上方に延び、口縁部は上下に拡張して断面三角形状の縁帯を作り外面には凹線が２条巡る。体部外面は回転ナデ調整を加え体部内面には７条１単位の櫛描きの擂目を施文する。17世紀後半代。90は丹波焼壺。体部は内彎して上方に延び、頸部は短く直立し口縁部は外方にひらく。口縁部内外面は強い回転ナデ調整を加え、体部外面・底部には板ナデ調整、体部外面は回転ナデ調整を施す。口縁部から体部外面と底部内面には自然釉が附着し褐色を呈す。91は丹波焼火入れ。平底で体部は外反気味に直上に延び、口縁部上面に端面をもつ。体部外面に縦方向の把手を貼り付ける。内外面とも回転ナデ調整を施すが底部外面は不調整で指頭圧痕が残る。焼成は堅緻で色調は灰褐色を呈する。92は施釉陶器椀。高台は断面台形状で比較的高く底部の器壁は厚い。体部はほぼ直上に延び、口縁端部は尖り気味に収める。内外面とも透明釉を施釉し浅黄色に発色する。広義の京焼系陶器と考えられる。93は白磁皿。高台は断面三角形状で低く体部は内彎気味に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。内外面とも透明釉を施釉し白色に発色する。94は青磁碗。体部は内彎気味に外上方に延び口縁端部は尖り気味に収める。内外面とも青磁釉を施釉し淡青緑色に発色する。肥前系と考えられる。95は青磁碗の底部。高台は断面台形状で比較的高く、体部は直線的に外上方に立ち上がる。内外面とも青磁釉を施釉し明オリーブ灰色に発色する。三田青磁と考えられ、19世紀前半代。96は白磁皿である。体部は僅かに内彎気味に外上方に立ち上がり、口縁部は屈曲して外方にひらく。内外面とも透明釉を施釉し明オリーブ灰色に発色する。底部内面は蛇の目状に釉ハギし、外面の体部下半以下は露胎である。肥前系波佐見産の粗製の白磁で18世紀前半代。97は青磁香炉の底部片。平底で体部外面最下部に脚を貼り付ける。内面に劃花文を施文し内外面とも青磁釉を施釉する。底部外面は蛇の目状に釉ハギする。肥前系。

第３節　染付磁器

１　西地区

井戸３出土遺物（図版27）

98は鉢。蛇の目凹形高台で体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は大きく外方にひらく。内面は銅版転写で牡丹唐草文、外面は鳳凰文をいずれも酸化コバルトで描く。近代以降の製品と考えられる。

SK23出土遺物（図版27）

99は陶胎染付の水滴である。平底で体部は算盤玉状に大きく内彎する。外面に簡易な草花文を施文し、

体部下半以下は露胎である。京焼系で19世紀前半以降の製品と考えられる。

SX06出土遺物（図版27）

100は碗。高台は断面台形状で低く、底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。外面は梅花文、内面は無文で底部内面は蛇の目状に釉ハギする。肥前系波佐見産のくらわんか手碗で18世紀後半代。101は皿。高台は断面三角形状で比較的低い。平底で体部は内彎気味に外上方に延びる。内面は牡丹唐草文、外面は唐草文を施文し、底部外面には「□□年製」銘を描く。肥前系で18世紀代。

SX08～10出土遺物（図版27）

102は碗で器壁は全体に薄く、高台は比較的細く高い。体部は内彎気味に外上方に延びる。内外面とも一重網目文を施文し、白色を呈する。肥前系と考えられ、19世紀前半代。103は色絵磁器の鉢蓋である。体部は内彎し、口縁部は内側に引き出す。外面は呉須で窓を描き、中に緑釉、黄釉で草花文を施文する。上絵付けのため、色絵の剥落が著しい。104は皿。高台は断面台形状で低く、底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。内面は「壽」と翼を広げた鳥文、外面は界線２条をそれぞれ描く。外面は全面に灰被りを受け文様が不鮮明となっている。105は染付青磁鉢。体部は内彎し、口縁部は外方にひらく。内面の口縁部と底部は呉須で施文し、外面には青磁釉を施釉する。肥前系で18世紀代。

SX14出土遺物（図版27）

106・107は碗。体部は内彎気味に外上方に延び、口縁端部は丸味をもつ。外面は宝尽くし文、内面は界線を2条施文する。肥前系で18世紀後半代。107は高台が比較的細く、体部は直線的に外上方に延びる。外面に牡丹文を描き、内面は無文である。肥前系で18世紀後半～19世紀前半代。108は皿。高台は断面台形状で比較的低く、平底で体部は直線的に外上方に延び、口縁端部は若干外方につまみ出す。内面は桐文、外面は界線２条をそれぞれ描き、口縁端部には鉄釉を施釉する。肥前系で19世紀前半代。109は肥前系の壺の底部と考えられる。高台は比較的高く、体部は内彎して外上方に延びる。外面には島嶼文を描き、内面は露胎である。波佐見産の粗製の壺で18世紀後半代。110・111は仏具碗。いずれも底部外面は蛇の目状に削り出し、脚部は短く直立し、体部は内彎気味に外上方に延びる。110は外面に簡易な蓮弁文を、111は半截菊花文を描く。いずれも波佐見産の粗製の磁器で18世紀後半代。

SD05出土遺物（図版27）

112～114は碗である。112は器壁が全体に薄く、体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁部内面には四方襷文を、体部外面には細かい牡丹唐草文を施文する。肥前系で19世紀前半代。113は高台が比較的細く高く、体部は直線的に外上方に延び、口縁部は若干外方にひらく。内外面とも井桁文など線描きの文様を施文する。近代以降の製品の可能性が高い。114は器壁が全体に薄く、高台は細く高い。体部は直線的に外上方に延びる。外面に丸に樹木、唐子文をプリントする。近代以降の時期が考えられる。

包含層出土遺物（図版27）

115は青花皿である。平底で高台は断面三角形状で比較的細く高い。体部は短く直線的に外上方に延び、口縁部は外方にひらく。外面及び底部内面に草花文を描く。16世紀代の明青花と考えられる。

２　東地区

SK04出土遺物（図版27･28）

116～118は碗である。116は染付青磁碗である。体部はほぼ直線的に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。外面は青磁釉を施釉し、内面は四方襷文を施文する。肥前系で18世紀代に比定される。

117は肥前系波佐見産のくらわんか手の碗である。高台は断面台形状で底部の器壁は非常に厚い。外面に丸文、内面は四方襷文と底部内面にはコンニャク印判で五弁花文を施文する。18世紀後半代の製品である。118は肥前系の広東碗の底部である。高台は細く高い。内面に松に鶴文、外面には文字文を施文する。19世紀前半代に比定される。119は杯である。体部は直立し口縁端部は丸味をもつ。外面に細かい斜格子文と菊花文を施文する。肥前系で19世紀前半代に比定される。120・121は蓋である。120はつまみは若干外方にひらき端部は丸味をもつ。体部は内彎し、口縁部は尖り気味に収める。外面は丸に壽字文、草花文、内面には菱形文を描く。肥前系で19世紀前半代の所産であろう。121はかえりをもつ鉢蓋で、外面には同心円を描き、内面は無文である。122は皿で、高台は断面台形状を呈し、底部の器壁は厚い。底部内面は蛇の目状に釉ハギし、二重線の斜格子文を施文する。外面は無文である。肥前系波佐見産の粗製の皿で18世紀後半代に比定される。123は香炉の底部である。高台は平高台を円錐状に削り、体部外面最下位に団子状の脚を貼り付ける。外面は施釉するが内面は露胎である。肥前系と考えられる。124は皿である。高台は断面三角形状で低く、底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延び、口縁端部は丸味をもつ。内面には菖蒲に扇文、底部内面は蛇の目状に釉ハギしコンニャク印判で五弁花文を施文する。外面には唐草文を描く。肥前系波佐見産のくらわんか手で18世紀後半代。

SX03出土遺物（図版28）

125は小碗である。高台は断面三角形状で低い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。外面には斜め方向に交差する草花文を描く。内面は無文である。煎茶碗と考えられる。

SX07出土遺物（図版28）

126・127は碗である。126は高台が断面台形状で比較的高く、底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。外面は雪輪文を描き、内面は無文である。肥前系波佐見産のくらわんか手碗で18世紀後半代の製品である。127は高台が断面台形状で底部の器壁は非常に厚い。外面は牡丹唐草文を描き、底部内面にはコンニャク印判で文字文を施文する。肥前系波佐見産のくらわんか手碗で18世紀後半代に比定される。128は杯である。体部は直立し口縁端部は丸味をもつ。外面はやや濃い呉須で松竹梅文を、内面は四方襷文を描く。肥前系で19世紀前半代に比定される。

SX09出土遺物（図版28）

129は陶胎染付の筒形椀である。高台は断面台形状で比較的低く、平底で体部は直立する。外面には呉須で簡易な草花文を描く。内面は無文である。肥前系で18世紀代に比定される。130は施釉陶器鉢である。高台は断面台形状で低く、平底で体部は直立する。体部外面に鉄絵で松葉状文を施文した後、内外面とも透明釉を施釉する。外面の高台脇以下は露胎である。高台裏に「□□長七」の墨書が見られる。131～134は碗である。131・132はいずれも割筆で外面に二重網目文を施文する。内面は無文である。肥前系で18世紀代に比定される。133・134は肥前系波佐見産のくらわんか手碗である。いずれも外面に雪輪文を描き、内面は無文である。135・136は杯である。135は高台は幅が狭く低い。体部は直立する。外面に草花文、内面には四方襷文、底部内面は五弁花文をコンニャク印判で施文する。136も同タイプで外面に草花文、内面に四方襷文を描く。いずれも肥前系で19世紀前半代に比定される。

堀出土遺物（図版28）

137～143は碗である。137は高台が比較的細く高く、底部の器壁は比較的厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。外面には蓮弁文を施文し、体部内面は無文で、底部内面に草花文を施文する。138は体部がほぼ直立するほかは137と同形で外面には草花文を描き、内面は無文である。いずれも肥前

系初期伊万里で17世紀前半代に比定される。139・140は体部がほぼ直立するもので、139は外面に唐草文を、140は外面に草花文を施文する。いずれも肥前系と考えられる。141は高台は断面台形状で底部の器壁は比較的厚い。外面は灰被りのため文様は不鮮明であるが、内面は無文である。肥前系波佐見産のくらわんか手碗で18世紀後半代の所産である。142は体部が僅かに内彎気味に外上方に延び、口縁端部は尖り気味に収める。外面は唐草文を施文し、内面には太い界線が１条巡る。瀬戸･美濃系と考えられ、19世紀前半以降の年代が与えられる。143は筒形碗である。平底で体部はほぼ直立する。外面には梅花文を描き、内面は無文である。肥前系で19世紀前半代に比定される。144は小杯である。体部は直線的に外上方に延び、口縁部は外方にひらく。外面は草花文を描き、内面は無文である。肥前系で19世紀前半代に比定される。145は小杯の底部である。高台は断面台形状で小さく低い。体部は直線的に外上方に延びる。外面は草花文を描く。肥前系と考えられる。146～149は皿である。146は高台が断面台形状で低く、体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。内面は龍文を描き、外面は無文である。肥前系初期伊万里で17世紀前半代に比定される。147は高台は断面台形状で、体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。内面には簡易な草花文を描き、底部内面は蛇の目状に釉ハギする。外面は無文で体部下半以下は露胎である。肥前系波佐見産の粗製の染付皿で18世紀前半代に比定される。148は高台が断面台形状で低く、平底で体部は内彎気味に外上方に延びる。外面は界線２条、内面は草花文を施文する。肥前系と考えられる。149は高台が断面台形状で底部の器壁は比較的厚い。体部は直線的に外上方に延びる。内面には草花文を描き、外面は無文である。肥前系で18世紀代の製品と考えられる。

第４節　金属製品・石製品

金属製品（図版29・写真図版31）

M1・M2は西地区出土。M1は図左側を先端とした場合、尖った先端をわずかに欠損する。ただし、先端部とは逆方向に反る基端面が鍛打されてつぶれているが、当初から端面としてつぶすことが意図されていたとするには対象面が狭く不自然な感がある。M2は北宋銭で、熙寧元寶（初鋳年1068）である。M3～M23 は東地区出土。M3は刀剣の破片か。M4は唐鍬の鋤先か。先端部を欠いた片側の根元で、ソケット部分を折り返す。M5は不明鉄片。片側が尖る刃部状を呈し、鎌の破片とすれば図上側が先細る端部となろう。M6は釘か。木質が残存しており複数個体が癒着している。M7は釘状の断面形だが、図正面上半に段がつく。M9～M22は和釘で頭部の残存するM11～M18は頭巻釘である。M20・M21は正面では一見頭部がＴ字状に見えるが側面から見て頭巻釘である。M23は煽り留状の金具。

石製品（図版30・写真図版30）

S1は硬砂岩製の砥石である。表裏及び両側面の４面が研磨され平滑であり、両端面にもわずかながら研磨が及ぶ。積極的な根拠には乏しいが、定角式磨製石斧の可能性も残される。S2は凝灰質砂岩製の柱状の砥石で、層理に沿って剥落している。図正面側が凹面を呈し最もよく使用されているが、両側面とも使用されている。本来砥面は残存するこの３面であるが、剥離した裏面も研磨が及び砥面として利用されている。表面は白く風化しているが、剥離した面は淡緑色を呈する。S3は頁岩に近い極細流砂岩を用いた硯であり、層理が水平方向に走りひび割れている。横断面形は逆台形を呈し、海部は縦断面形V字状に底部が屈曲する。表面の剥落が激しいが、残存する海部や陸部には墨痕を留める箇所も観察される。裏面に粗い研磨痕が残存している。

第５章　まとめ

東西両地区の調査を経て、平安時代末～鎌倉時代、室町時代、江戸時代の三時期の遺構を確認した。

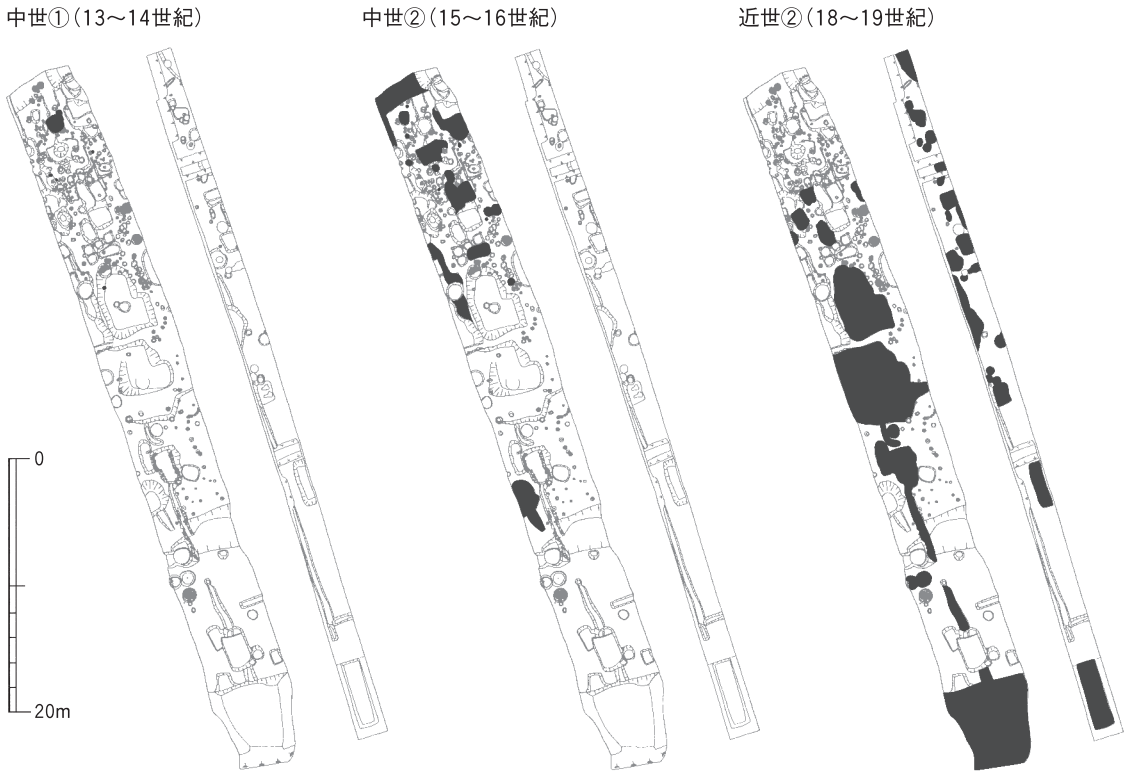
平安時代末から鎌倉時代の遺構は、土坑、柱穴を確認した。多数の柱穴の存在から、掘立柱建物で構成される集落が想定され、室町時代にも継続している。遺構の分布の中心は西地区北半で、わずかに東地区にも及んでいる可能性がある。

室町時代の遺構は、柱穴、土坑、落ち込み、溝を確認した。柱穴から想定される掘立柱建物とともに、礎石建物も確認されており、集落構造に変化が認められる。やはり西地区北半に集中が認められる。

江戸時代では炉跡、井戸、埋甕や埋桶、落ち込み、溝、堀状遺構を確認した。東西両地区全域に遺構の分布範囲が拡大する。建物自体は検出されなかったものの、埋甕や埋桶といった生活遺構から本来建物が存在していた可能性が考えられる。また、井戸・水溜め・排水溝といった共同の水利施設が設けられている。一方、炉跡は円形と方形のものが確認された。焚き口を持ち、竈と考えられるものの、鍛冶炉の可能性が考えられ、共同作業場であったことが想定される。これらの遺構の形成は18世紀後半以降、特に19世紀代に最盛期を迎えていることが出土遺物よりうかがわれる。

さて、調査区南端には堀状遺構が台地縁辺部に沿って大規模に掘削されている。幅は5.5m以上、深さは3.6m以上あり、北側の立ち上がりはほぼ垂直である。埋土内の遺物から、江戸期を通じ埋没しながらも排水施設として利用され続けた蓋然性が指摘される。検出底部付近では17世紀代の遺物が含まれることから、掘削はそれ以前の時期である可能性も推定される。中世伊丹氏の支城である昆陽城推定地も近接しており、想像をたくましくすればその堀が排水施設として再利用された可能性も想起される。

なお、調査区北側を通る西国街道については、残念ながら関連遺構を確認することはできなかった。



第３図　南辻遺跡の遺構の変遷

表３　出土土器・陶磁器観察表

報告No	図版	写真図版	出土地区	出土遺構	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
1	21	28	西地区	SK01	無釉陶器	擂鉢	—	—	—	口縁部は上下に拡張して縁帯を形成。口縁部の一部を捻って片口を作り出す。	内外面とも回転ナデ調整。	焼成　堅緻。色調　にぶい赤褐色。備前焼Ⅳ期。15世紀代。
2	21	25	西地区	SK09	土師器	皿	8.05	1.55	—	非ロクロ成形。器壁は全体に薄い。平底。やや上げ底気味。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面ともヨコナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。16世紀代。
3	21	29	西地区	SK09	青磁	碗	(14.65)	(4.10)	—	体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は外方にひらく。体部内面に沈線1条。	内外面とも青磁釉施釉。淡緑灰色に発色。内外面とも灰被り。部分的に釉が白濁する。	龍泉窯系青磁無文碗。16世紀代。
4	21	—	西地区	SK12	土師器	皿	(7.10)	1.50	—	非ロクロ成形。器面は摩滅が著しい。底部はヘソ皿風に突出する。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。京都系か？
5	21	29	西地区	SK12	無釉陶器	甕	(34.20)	(10.80)	—	体部は内彎。口縁部は直立。口縁部は断面楕円形状に肥厚する。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。	外面　胡麻状に灰被り。焼成　堅緻。色調　灰赤色。備前焼Ⅳ期。15世紀代。
6	21	29	西地区	SK12	無釉陶器	甕	(25.70)	(30.90)	(20.30)	平底。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部は外方に水平に折り曲げる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整、体部内面に指頭圧痕が残る。	体部外面上位　胡麻状に灰被り。焼成　堅緻。色調　灰褐色。丹波焼。16世紀代。
7	21	—	西地区	SK18	土師器	火舎	—	(6.50)	(13.90)	高台は細く高く、「ハ」の字状に外方にひらく。平底。体部は直線的に外上方に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。
8	21	27	西地区	SK20	施釉陶器	皿	(11.40)	2.70	(6.60)	高台は断面台形状で低い。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	底部内面に草花文をヘラ描きで施文。内外面とも灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。	器面に細かい貫入。瀬戸・美濃系灰釉陶器。黄瀬戸皿。16世紀代。
9	21	27	西地区	SD02最南部SK28	瓦器	碗	(10.40)	(2.80)	—	器形は若干歪む。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部～体部外面　ヨコナデ調整。体部内面　ミガキ調整。平行暗文が残る。	焼成　良好。色調　暗灰色。
10	21	—	西地区	SK32BSK31	土師器	皿	(9.80)	2.25	—	器形はかなり歪む。非ロクロ成形。器壁は全体に薄い。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。	焼成　良好。色調　浅黄色。京都系。
11	21	25	西地区	SX03	土師器	皿	(7.30)	(1.35)	—	ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。底部外面　不調整。糸切痕が残る。	焼成　良好。色調　にぶい橙色。
12	21	29	西地区	SX03	無釉陶器	壺	—	(7.60)	(9.10)	平底。体部は内彎気味にほぼ直上に延びる。	体部内外面　回転ナデ調整。底部外面　板ナデ調整。	焼成　堅緻。色調　暗赤褐色。備前焼。
13	21	29	西地区	SX03	無釉陶器	徳利	—	(11.20)	—	体部は上に向かって内傾する。	内外面とも回転ナデ調整。	外面　胡麻状に灰被り。焼成　堅緻。色調　暗褐色。備前焼。16世紀代。
14	21	27	西地区	SX03	施釉陶器	碗	(11.00)	(5.10)	—	体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。内外面とも灰釉施釉。オリーブ黄色に発色。	器面に貫入。瀬戸・美濃系灰釉陶器丸碗。16世紀代。
15	21	27	西地区	SX03	施釉陶器	皿	(9.70)	(1.60)	—	体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は水平に外方に折り曲げる。	内面　ヘラ状工具で菊花文施文。内外面とも灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。	器面に貫入。瀬戸・美濃系灰釉陶器皿。黄瀬戸菊皿。16世紀代。
16	21	29	西地区	SX03	青磁	鉢	(10.90)	(4.10)	(3.60)	高台は幅が広く低い。体部は内彎して外上方に延びる。口縁部は屈曲して若干外方にひらく。	内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。器面に粗い貫入。高台は露胎。	龍泉窯系青磁。16世紀代。
17	21	—	西地区	SK02ASX05	土師器	皿	(7.70)	(1.70)	—	非ロクロ成形。器壁は全体に薄い。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面ヨコナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。京都系　16世紀代。
18	21	25	西地区	SD01	土師器	皿	7.65	1.60	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。内面の体部と底部の界に凹部をもつ。	内外面ともヨコナデ調整。	焼成　ややあまい。色調　灰白色。京都系。
19	21	—	西地区	SD02	土師器	皿	(6.60)	(1.35)	—	非ロクロ成形。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。	焼成　良好。色調　浅黄橙色。
20	21	—	西地区	SD02	土師器	皿	6.70	1.45	—	非ロクロ成形。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも指おさえの後、ナデ調整。指頭圧痕が残る。	焼成　良好。色調　浅黄橙色。
21	21	27	西地区	SD01SD02最南部	須恵器	鉢	(26.05)	(6.60)	—	体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して小さな縁帯をもつ。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　回転ナデ調整。体部内面　板ナデ調整。	口縁部外面に重ね焼痕。焼成　あまく、酸化炎焼成。色調　にぶい黄橙色。東播系須恵器の生焼け。14世紀代。
22	21	27	西地区	P8P1	白磁	壺	—	(3.15)	(7.10)	高台は断面台形状で幅が広く、比較的低い。平底。底部の器壁は厚い。体部は直線的に外上方に延びる。	内外面とも回転ナデ調整。内面透明釉施釉。灰白色に発色。外面露胎。	華南産白磁。四耳壺か？12世紀後半。
23	21	27	西地区	P2	須恵器	甕	(34.30)	(4.00)	—	口縁部は外方にひらく。口縁端部は外方につまみ出す。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面　板ナデ調整。体部外面平行叩き目が残る。	焼成　ややあまい。色調　灰白色。東播系。12世紀後半～13世紀前半。
24	21	29	西地区	P2	青磁	香炉	(12.90)	(2.50)	—	体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部外面に浅い沈線1条。内外面とも青磁釉施釉。オリーブ灰色に発色。	龍泉窯系青磁。16世紀代。
25	21	25	西地区	SX03SK08P3	瓦質土器	羽釜	—	(9.60)	腹径(27.7)	平底。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。体部外面に断面三角形状の比較的幅の広い鍔を貼り付け。	体部外面　縦・横方向の板ナデ調整。体部外面の最下部　ミガキ調整。底部外面　多方向の板ナデ調整。内面の体部～底部　回転ナデ調整。	焼成　良好。色調　暗灰色。同時期の鉄鍋を模倣。
26	21	27	西地区	P10P4	須恵器	鉢	(25.50)	(2.50)	—	体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は若干玉縁状に肥厚する。	内外面とも強い回転ナデ調整。	焼成　良好。色調　灰色。東播系。13世紀代。
27	22	—	西地区	井戸1	土師器	皿	(8.50)	(1.85)	—	非ロクロ成形。平底。体部は若干外反気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。	焼成　良好。色調　淡橙色。京都系。

報告No	図版	写真図版	出土地区	出土遺構	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
28	22	27	西地区	井戸1	瓦質土器	鍋	(18.45)	(8.65)	—	平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は外方にひらく。口縁端部は上方につまみ上げる。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　縦方向のハケ目調整。体部内面　横方向のハケ目調整。	焼成　ややあまい。色調　黄灰色。
29	22	28	西地区	井戸1	無釉陶器	擂鉢	長 (9.55)	幅 (8.0)	厚 (1.1)	体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯をもつ。口縁部外面に凹線2条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面　櫛描きの擂目施文。	口縁部外面に胡麻状の灰被り。焼成　堅緻。色調　明赤褐色。備前焼V期。16世紀代。
30	22	25	西地区	井戸2	土師器	焙烙	(29.60)	(6.25)	—	型作り成形。平底。体部は直線的にやや内傾して上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。。	口縁部～体部内外面　ヨコナデ調整。底部内外面　多方向の板ナデ調整。	底部外面に煤附着。焼成　良好。色調　橙色。
31	22	—	西地区	埋甕2	土師器	火舎	—	(8.00)	(20.00)	脚部は若干外方にひらき、比較的細く高い。脚部の接地面に浅い抉りを入れる。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。	体部内面　ナデ調整。体部外面　板ナデ調整。脚部内外面　回転ナデ調整。	焼成　良好。色調　橙色。東山焼　弥七焜炉。19世紀前半以降。
32	22	25	西地区	埋甕2	施釉陶器	甕	17.40	27.60	13.50	平底。体部は僅かに内彎気味にほぼ直上に延びる。口縁部は横方向に拡張して、上面に端面をもつ。	内外面とも鉄釉施釉。外面　灰釉を柄杓掛け。底部内面に砂目跡。底部外面　露胎。	焼成　良好。色調　暗赤褐色。丹波焼。19世紀前半。
33	22	—	西地区	埋桶4	白磁	壺	—	(3.90)	4.30	高台は比較的幅が広く、低い。平底。体部は内彎して外上方に延びる。	外面　透明釉施釉。灰白色に発色。内面　露胎。	畳付に砂附着。肥前系。くらわんか手。油壺。18世紀代。
34	22	30	西地区	埋桶6	施釉陶器	御神酒徳利	1.70	(8.00)	3.15	高台は欠失。体部は内彎。頸部は直立。口縁部は僅かに外方にひらく。	外面　緑釉施釉。暗緑灰色に発色。	京焼系。19世紀前半。
35	22	27	西地区	SK25	土製品	さな	長 (9.4)	幅 (5.0)	厚 2.1	焜炉のロストル。型作り。内部に円形他の穿孔。	上面はナデ調整。	焼成　軟質。色調　灰白色。
36	22	30	西地区	SK32	無釉陶器	火入れ	—	(5.60)	(8.70)	平底。やや上げ底気味。体部はやや外反気味にほぼ直上に延びる。体部外面に把手を貼り付け。	内外面とも強い回転ナデ調整。内面に部分的に灰釉附着。	焼成　堅緻。色調　にぶい赤褐色。丹波焼。
37	22	25	西地区	SK32	無釉陶器	擂鉢	—	(7.45)	13.80	平底。体部は直線的に外上方に延びる。	体部外面　回転ナデ調整。体部内面　6条1単位の櫛描きの擂目施文。底部内面　同心円状及び×印状に櫛描きの擂目施文。	焼成　軟質。色調　灰褐色。丹波焼　18世紀代。
38	22	28	西地区	SX06	無釉陶器	鉢	(28.20)	(21.80)	(18.40)	平底。体部はほぼ直立。口縁端部は横方向に若干拡張。	口縁部上面　凹線2条。体部外面全面に凹線施文。内外面とも回転ナデ調整。内外面とも赤土部塗布。にぶい赤褐色に発色。	焼成　ややあまい。色調　にぶい赤褐色。丹波焼。
39	22	28	西地区	SX07	無釉陶器	擂鉢	(24.30)	(6.30)	—	体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を作る。口縁部外面　凹線2条。	内外面とも回転ナデ調整。体部内面に櫛描きの擂目施文。	焼成　堅緻。色調　暗赤灰色。備前焼V期。16世紀代。
40	22	25	西地区	SX08～SX10	土師器	皿	(10.80)	1.90	—	ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。底部外面　不調整。口縁端部に部分的に煤附着。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。
41	22	25	西地区	SX14	無釉陶器	壺	(13.80)	(8.00)	—	体部は大きく内彎。頸部は短く、口縁部は若干外方にひらく。口縁部内面に蓋受けをもつ。	口縁部内外面　回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。体部外面　赤土部塗布。にぶい黄褐色に発色。内面　露胎。	胎土中に砂粒を多く含む。丹波焼 or 信楽焼か？
42	22	26	西地区	SX14	白磁	皿	9.60	2.90	3.80	高台は断面台形状で比較的高い。底部の器壁は非常に厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも透明釉施釉。灰黄色に発色。底部内面　蛇の目状釉ハギ。外面の高台脇以下　露胎。	肥前系　波佐見産。粗製の白磁皿。18世紀前半。
43	22	29	西地区	SX14	白磁	油壺	(33.90)	(6.90)	—	口縁部は上下に拡張して縁帯をもつ。口縁部外面　凹線2条。口縁部内面　凹線2条。	内外面とも強い回転ナデ調整。体部内面　7条1単位の櫛描きの擂目施文。	焼成　良好。色調　灰褐色。堺・明石産。18世紀代。
44	22	28	西地区	SD05	無釉陶器	擂鉢	(29.20)	(6.70)	—	体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を作る。口縁部外面　凹線2条。口縁部内面　凹線2条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　回転ナデ調整。体部内面　10条1単位の櫛描きの擂目を施文。内外面とも赤土部塗布。。	色調　黒褐色。焼成良好。堺・明石産。18世紀後半。
45	23	28	西地区	遺構面検出中	無釉陶器	擂鉢	(33.90)	(6.90)	—	口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部外面に凹線2条。口縁部内面　凹線2条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面に7条1単位の櫛描きの擂目施文。	焼成　堅緻。色調　灰褐色。堺・明石産。
46	23	28	西地区	SK17･18遺構検出面精査中	無釉陶器	擂鉢	(37.80)	(10.20)	—	体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部外面に凹線2条。口縁部内面　凹線2条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　回転ヘラケズリ調整。体部内面　7条1単位の櫛描きの擂目施文。	焼成　良好。色調　赤褐色。堺・明石産。18世紀後半。
47	23	—	西地区	遺構面検出中	施釉陶器	鉢	(15.80)	6.90	(9.40)	平底。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は玉縁状に内側に肥厚する。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。内面灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。外面　露胎。	色調　露胎部　灰色。焼成　堅緻。丹波焼。18世紀代。
48	23	26	西地区	P-10・SX01	無釉陶器	甕	71.60	(81.10)	(31.50)	平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は大きく外方にひらく。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。外面上部塗布。暗赤褐色に発色。底部外面　露胎。	焼成　良好。丹波焼。
49	24	26	東地区6・7区	埋甕1（SI01）	無釉陶器	甕	28.40	61.30	25.20	平底。やや上げ底気味。体部は大きく内彎し、肩部は丸味をもつ。頸部は短く直立し、口縁部は断面楕円形状に肥厚する。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面上位　横斜め方向の強いナデ調整。体部外面中位　横方向のナデと縦方向の板ナデ。体部外面下位縦方向の板ナデ。体部内面　板ナデ調整。底部外面　多方向の板ナデ調整。	焼成　良好。色調　暗赤褐色。備前焼Ⅳ期。15世紀代。
50	24	—	東地区6区	炉1	土師器	皿	(7.60)	1.15	—	非ロクロ成形。平底。ヘソ皿状に上げ底にする。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ヨコナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。京都系。
51	24	27	東地区6区	炉1	土師器	皿	(9.80)	1.30	—	非ロクロ成形。器壁は全体に薄い。平底。やや上げ底気味。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　指おさえの後、ヨコナデ調整。指頭圧痕が残る。	内外面とも全面に煤附着。焼成　良好。色調　褐灰色。
52	24	27	東地区6区	炉1	土師器	皿	(11.50)	(1.75)	—	非ロクロ成形。器壁は全体に薄い。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。内面の底部と体部の界　強いヨコナデ調整。	焼成　あまい。色調　灰白色。京都系。
53	24	27	東地区6区	炉1	土師器	皿	7.60	1.90	—	非ロクロ成形。平底。体部と底部の界は不明瞭。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ヨコナデ調整。指頭圧痕が残る。体部内面　ヨコナデ調整。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。

報告No	図版	写真図版	出土地区	出土遺構	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
54	24	27	東地区6区	炉1	土師器	鉢	(25.40)	(6.30)	—	体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　ヘラケズリ調整。体部内面　横方向の細かいハケ目調整。	焼成　普通。色調　灰色。
55	24	30	東地区3区	炉1－A 炉1－b	瓦	軒平瓦	長 (7.0)	—	厚 (4.6)	唐草文軒平瓦。	タテ・ヨコ方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　暗灰色。
56	24	—	東地区5・6区	SK01	施釉陶器	皿	(10.60)	(2.15)	(3.90)	高台は断面台形状で低い。平底。体部は底部との界で大きく屈曲して直線的に外上方に延びる。口縁部は外方にひらき、端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。底部外面　板ナデ調整。内面～口縁部外面　灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。灰被りで部分的に白濁する。外面の口縁部以下　露胎。	焼成　良好。色調　露胎部　灰白色。瀬戸・美濃系灰釉陶器。黄瀬戸。16世紀代。
57	24	—	東地区5・6区	SK01	施釉陶器	皿	—	(0.90)	5.10	高台は断面三角形状で低い。平底。体部は緩やかに外上方に立ち上がる。	底部内面　印花でかたばみ文施文。内外面とも灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。底部外面　露胎。	焼成　良好。色調　灰白色。瀬戸・美濃系。黄瀬戸。16世紀代。
58	24	—	東地区5区	SK02	施釉陶器	皿	(8.50)	(2.55)	(4.30)	平底。底部の器壁は比較的厚い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は内側に引き出す。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。底部外面　不調整。糸切痕が残る。内面～口縁部外面　灰釉施釉。淡緑灰色に発色。外面　露胎。	焼成　良好。色調　露胎部　灰白色。瀬戸・美濃系灰釉陶器。黄瀬戸。16世紀代。
59	24	—	東地区5区	SK02	青磁	皿	(12.40)	3.55	(7.25)	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内外面とも青磁釉施釉。灰オリーブ色に発色。底部内面　蛇の目状釉ハギ。高台裏　露胎。	肥前系。
60	25	—	東地区4・5区	SK04	土師器	焙烙	(37.40)	(5.60)	—	丸底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は断面三角形状に肥厚する。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面　回転ナデ調整。体部外面　ヘラケズリ調整。	外面に煤附着。焼成良好。色調　橙色。
61	25	—	東地区4・5区	SX04 SK04	土師器	風炉	(13.00)	(10.00)	(15.80)	器壁は比較的厚い。体部は内彎気味にやや内傾する。口縁部内面に突起状の受部を貼り付ける。体部外面中央に花弁状の透かしを入れる。	外面　ヘラミガキ調整。内面　回転ナデ調整。	焼成　良好。色調　橙色。
62	25	27	東地区4・5区	SX04 SK04	土師器	三方?	(22×22)	4.00	—	方形の三方か?。型作り成形。平底。体部は短く直立。	体部内外面　ヨコ方向の板ナデ調整。底部内外面　多方向の板ナデ調整。	底部に若干煤附着。焼成　良好。色調　にぶい橙色。
63	25	28	東地区5区	SK04	無釉陶器	擂鉢	(31.60)	(12.20)	—	体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して、縁帯を形成する。口縁部外面に凹線2条。口縁部内面に凹線2条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　板ナデ調整。体部内面　8条1単位の櫛描きの擂目施文。	焼成　堅緻。色調　暗赤色。堺・明石産。
64	25	30	東地区4・5区	SK04	施釉陶器	蓋	(7.00)	1.60	(4.10)	平底。体部は直線的に短く外上方に延びる。口縁端部は断面楕円形状に肥厚する。上面に環状の把手を貼り付ける。	外面　鉄釉施釉の後、灰釉施釉。灰黄褐色に発色。内面　露胎。	焼成　良好。壺蓋。丹波焼?
65	25	—	東地区5区	SK04	施釉陶器	壺	—	—	(12.40)	平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。	体部内外面　回転ナデ調整。底部外面　板ナデ調整。内面　全面に灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。	丹波焼。
66	25	—	東地区4・5区	SK04	白磁	紅皿	(4.40)	1.60	1.10	型作り成形。高台は小さく低い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は上面に端面をもつ。	外面に型押しで放射状に沈線施文。内面～口縁部外面　透明釉施釉。灰白色に発色。外面の口縁部以下露胎。	肥前系。19世紀前半。
67	25	29	東地区5区	SK04	白磁	紅皿	4.60	1.55	1.30	型作り成形。高台は断面三角形状で低い。外面に型押しで菊花状に縦線を施文。口縁端部は上面に端面をもつ。	内面　透明釉施釉。白色に発色。外面　露胎。	焼成　良好。色調　露胎部　灰白色。肥前系。19世紀前半。
68	25	30	東地区4・5区	SK04	瓦	軒丸瓦	径 15.1	幅 (2.3)	—	三ツ巴文軒丸瓦。珠文数　15	背面　多方向のナデ調整。	焼成　良好。色調　暗灰色。
69	25	—	東地区5区	SX03	土師器	焙烙	(36.50)	(3.40)	—	口縁部は断面三角形状に肥厚する。	内外面とも強い回転ナデ調整。	外面に煤附着。焼成良好。色調　橙色。
70	25	28	東地区5区	SX03	無釉陶器	擂鉢	(31.40)	(5.80)	—	体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部外面に凹線2条。口縁部内面に凹線及び凹部がそれぞれ1条巡る。口縁部の一部を浅く捻って片口を作る。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　回転ナデ調整。体部内面　9条1単位の櫛描きの擂目を施文。	焼成　堅緻。色調　灰茶褐色。堺・明石産。
71	25	26	東地区5区	SX03	施釉陶器	鉢	—	(13.35)	(14.20)	高台は幅が広く比較的低い。平底。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。	内面　全面に白濁釉施釉の後、灰釉と緑釉を施釉。外面　高台脇以上　白濁釉を刷毛塗りした後、灰釉、緑釉施釉。高台脇以下　鉄釉施釉。畳付　露胎。	焼成　良好。三彩唐津。17世紀後半～18世紀前半。
72	25	—	東地区5区	SX03	白磁	碗	(11.05)	5.80	(3.90)	高台は断面台形状。平底。底部の器壁は非常に厚い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。	肥前系?
73	25	—	東地区5区	SX03	青磁	皿	—	(0.95)	(3.60)	底部片。平底。	底部内面　櫛描きで雷光文、ヘラ描きで草花文をそれぞれ描く。内面　青磁釉施釉。暗緑灰色に発色。外面　露胎。	同安窯系青磁。12世紀後半～13世紀前半。
74	25	27	東地区5区	SX04 ト層	土師器	皿	9.20	1.80	—	ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。底部外面　不調整。糸切痕が残る。	焼成　良好。色調　浅黄橙色。
75	25	27	東地区5区	SX04	土師器	灯明皿	6.30	1.20	—	ロクロ成形。平底。体部は緩やかに外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。底部外面　不調整。糸切痕が残る。内面　透明釉を施釉するが、ほとんど剥落。	口縁部に煤附着。焼成ややあまい。色調　黄褐色。いわゆる柿釉の灯明皿。
76	25	27	東地区5区	SX04 ト層	土師器	皿	6.20	1.20	—	ロクロ成形。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。底部内面に凸帯が1条巡る。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。底部外面　不調整。糸切痕が残る。内面～口縁部外面にかけて部分的に透明釉が掛かる。	焼成　良好。色調　赤褐色。いわゆる柿釉の灯明皿。19世紀前半。
77	26	28	東地区4区	SX07	無釉陶器	擂鉢	(35.50)	(3.90)	—	口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部外面に凹線2条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内面　9条1単位の櫛描きの擂目施文。	焼成　堅緻。色調　にぶい赤褐色。堺・明石産。
78	26	—	東地区4区	SX07	施釉陶器	皿	(12.50)	(2.70)	(7.60)	高台は断面台形状で低い。平底。底部の器壁は比較的厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。外面の体部下半以下　露胎。底部内面　鉄釉の摺絵で草花文施文。	焼成　良好。色調　灰白色。瀬戸・美濃系。

報告No	図版	写真図版	出土地区	出土遺構	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
79	26	—	東地区4区	SX07	施釉陶器	鉢	(22.30)	(7.55)	—	体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は断面三角形状に内側に肥厚。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。内面　灰釉施釉。外面　露胎。	焼成　堅緻。色調　にぶい赤褐色。丹波焼。
80	26	27	東地区4区	SX08	須恵器	甕	—	—	—	須恵器甕の体部片。	粘土紐巻き上げ成形。外面に綾杉状の叩目が残る。	焼成　不良。色調　暗褐色。東播系須恵器。
81	26	—	東地区4区	SX08	瓦質土器	羽釜	(16.00)	(5.10)	—	体部～口縁部はほぼ直立。口縁端部は斜め上方につまみ上げる。口縁部外面に断面三角形状の比較的短い鍔を貼り付ける。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　ヨコおよび斜め方向の板ナデ調整。体部内面　回転ナデの後、多方向の仕上げナデ調整。	焼成　良好。色調　黄灰色。
82	26	26	東地区4区	SX08	無釉陶器	植木鉢	(39.60)	(21.10)	(19.50)	平底。やや上げ底気味。体部外面の最下部に三角形状の脚を貼り付け。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は外方に水平に折り曲げる形。	体部外面下位に凸帯を貼り付け。体部外面上位に雷文帯貼り付け。口縁部側面に沈線8条。口縁部上面に12条以上の波状文施文。	焼成　堅緻。色調　灰黄褐色。丹波焼。19世紀前半。
83	26	28	東地区4区	SX08	無釉陶器	擂鉢	長(4.25)	—	—	口縁部は上下に拡張して薄い板状の縁帯を形成する。口縁部外面に凹線2条。	内外面とも強い回転ナデ調整。	焼成　堅緻。色調　灰褐色。備前焼Ⅴ期。16世紀代。
84	26	—	東地区4区	SX08	施釉陶器	皿	(10.60)	(2.50)	(4.05)	高台は幅が広く低い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部は若干外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面　灰釉施釉。外面　口縁部のみ灰釉施釉。淡緑灰色に発色。以下露胎。	器面に細かい貫入。瀬戸・美濃系灰釉陶器皿。黄瀬戸皿。16世紀後半。
85	26	—	東地区4区	SX08	施釉陶器	皿	(13.75)	(3.90)	(4.10)	高台は断面台形状。平底。体部は内彎して外上方に延びる。口縁部は外方にひらき、口縁部内面に凹線が1条巡る。	内外面とも灰釉施釉。灰オリーブ色に発色。畳付の釉はかきとり。畳付に砂が若干附着。	器面に火ぶくれが見られる。肥前系。唐津溝縁皿。17世紀前半～中頃。
86	26	28	東地区2・3区	SX09	無釉陶器	擂鉢	(32.10)	(6.05)	—	体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して縁帯を形成する。口縁部外面に凹線2条。口縁部内面　凸帯1条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　板ナデ調整。体部内面9条1単位の擂目施文。	焼成　良好。色調　にぶい赤褐色。堺・明石産。
87	26	30	東地区2・3区	SX09	土製品	人形	長(6.85)	幅4.3	厚3.05	型作り成形。両型作り。	外面　ナデ調整。彩色は全て剥落。	焼成　良好。色調　橙色。花魁と禿
88	26	27	東地区1区	堀	土師器	皿	(9.85)	(2.00)	—	非ロクロ成形。平底。底部と体部の界は不明瞭。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	器面の摩滅が著しい。口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部外面　指おさえの後、ヨコナデ調整。指頭圧痕が残る。	焼成　良好。色調　浅黄橙色。
89	26	28	東地区1区	堀	無釉陶器	擂鉢	(32.90)	(9.40)	—	体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は上下に拡張して断面三角形状の縁帯を作る。口縁部外面に凹線2条。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　回転ナデ調整。体部内面　7条1単位の櫛描きの擂目施文。内外面とも赤土部塗布。にぶい赤褐色に発色。	焼成　良好。丹波焼。17世紀後半。
90	26	28	東地区1区	堀	無釉陶器	壺	(11.40)	12.10	(12.40)	平底。体部は内彎して上方に延びる。頸部は短く直立。口縁部は大きく外方にひらく。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部外面　板ナデ調整。体部内面回転ナデ調整。底部外面　板ナデ調整。	口縁部～体部外面上半自然釉附着。底部内面自然釉附着。色調　褐色。丹波焼。
91	26	—	東地区1区	堀	無釉陶器	火入れ	11.60	6.50	9.40	平底。体部は外反気味に直上に延びる。口縁部上面に端面をもつ。体部外面に縦方向の把手を貼り付け。	口縁部内外面　強い回転ナデ調整。体部内外面　回転ナデ調整。底部内面　回転ナデ調整。底部外面不調整。指頭圧痕が残る。	口縁部に多数の歪打痕。内外面とも灰被り。焼成　堅緻。色調　灰褐色。丹波焼。
92	26	30	東地区1区	堀	施釉陶器	碗	(9.25)	7.00	4.10	高台は断面台形状で比較的高い。底部の器壁は比較的厚い。体部はほぼ直立。口縁端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。浅黄色に発色。畳付の釉はかきとる。	広義の京焼系陶器。
93	26	—	東地区1区	堀	白磁	皿	(8.45)	1.95	3.85	高台は断面三角形状で低い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。白色に発色。畳付に砂附着。	焼成　良好。肥前系か？
94	26	29	東地区1区	堀	青磁	碗	(10.80)	(5.40)	—	体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも青磁釉施釉。淡青緑色に発色。	肥前系。
95	26	29	東地区1区	堀	青磁	碗	—	(4.90)	(5.00)	高台は断面台形状で比較的高い。平底。体部は直線的に外上方に立ち上がる。	内外面とも青磁釉施釉。明オリーブ灰色に発色。高台畳付の釉かきとり。	三田青磁。19世紀前半。
96	26	29	東地区1区	堀	青磁	皿	(13.20)	(2.60)	—	体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁部は屈曲して外方にひらく。口縁端部はまるみをもつ。	内外面とも青磁釉施釉。明オリーブ灰色に発色。底部内面　蛇の目状釉ハギ。外面の体部下半以下　露胎。	肥前系。波佐見産の粗製の染付磁器。18世紀前半。
97	26	29	東地区1区	堀	青磁	香炉	—	(2.45)	(7.55)	体部外面最下部に脚を貼り付け。平底。	内面　剃花文施文。内外面とも青磁釉施釉。淡青緑色に発色。底部外面　蛇の目状釉ハギ。	肥前系。18世紀代。
98	27	—	西地区	井戸3	染付磁器	鉢	(16.10)	4.80	(7.90)	蛇の目凹形高台。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は大きく外方にひらく。口縁端部は丸味をもつ。	内面　銅版転写で牡丹唐草文。外面　銅版転写で鳳凰文施文。酸化コバルト。	近代以降。
99	27	—	西地区	SK23	陶胎染付	水滴	—	(2.60)	2.85	平底。体部は算盤玉状に大きく内彎。頸部は欠失。	外面　簡易な草花文施文。外面の体部下半以下　露胎。	京焼系。19世紀前半以降。
100	27	—	西地区	SX01	染付磁器	碗	11.80	5.55	4.10	高台は断面台形状で低い。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。	外面　梅花文　界線1・2条。内面　無文。底部内面　蛇の目状釉ハギ。	肥前系　波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
101	27	—	西地区	SX01	染付磁器	皿	(16.05)	2.90	(8.50)	高台は断面三角形状で比較的低い。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面　牡丹唐草文　界線2条　五弁花文。外面　唐草文　界線1・2条。底部外面　界線1条　「□年製」銘。	肥前系。18世紀代。
102	27	—	西地区	SX08～SX10	染付磁器	碗	(11.00)	5.50	(3.30)	器壁は全体に薄い。高台は比較的細く、高い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも一重網目文施文。呉須の発色は良い。色調　白色。	肥前系。19世紀前半。
103	27	—	西地区	SX08～SX10	色絵磁器	蓋	(15.70)	(2.80)	—	体部は内彎。口縁端部は内側に引き出す。	外面　呉須で窓を描き鉄釉、緑釉、黄釉で草花文施文。内面　無文。	上絵付けのため、色絵の部分は剥落が著しい。
104	27	—	西地区	SX08～SX10	染付磁器	皿	(13.70)	2.20	(7.80)	高台は断面台形状で低い。平底。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面　「壽」字と翼を広げた鳥文。外面　界線1・2条。	外面は全面に灰被りを受け、文様が不鮮明。産地不明。
105	27	—	西地区	SX08～SX10	染付青磁	鉢	—	—	—	体部～口縁部が部分的に残る。体部はほぼ直立。口縁部は若干外方にひらく。	内面　口縁部と底部は呉須で施文。体部は無文。外面　無文。	肥前系。18世紀代。
106	27	—	西地区	SX14	染付磁器	碗	(12.80)	(3.60)	—	体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面　宝尽くし文。内面　界線2条。	肥前系。18世紀後半。
107	27	—	西地区	SX14	染付磁器	碗	(11.00)	6.30	(4.40)	高台は比較的細く高い。底部の器壁は比較的厚い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　界線1条　牡丹文　界線2条。内面　無文。畳付の釉は丁寧に拭き取り。	肥前系。18世紀後半～19世紀前半。
108	27	—	西地区	SX14	染付磁器	皿	(12.10)	(2.50)	(6.70)	高台は断面台形状で比較的低い。平底。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は若干外方につまみ出す。	底部内面　淡い呉須で桐文施文。体部外面　界線2条。口縁部に鉄釉施釉。口縁。	肥前系。19世紀前半。

報告No	図版	写真図版	出土地区	出土遺構	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
109	27	—	西地区	SX14	染付磁器	壺	—	(4.30)	(3.50)	高台は比較的高い。体部は内彎気味に外上方に延びる。	外面　鳥瞰文？　界線1条。内面無文。	肥前系　波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
110	27	—	西地区	SX14	染付磁器	仏具碗	—	(5.90)	—	平底。脚部は比較的短く、ほぼ直立。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。底部外面　蛇の目に削り出し。	外面　簡易な蓮弁文。界線1・2条。内面　無文。底部外面　蛇の目状に釉をかきとる。	肥前系　くらわんか手。18世紀代。
111	27	—	西地区	SK14	染付磁器	仏具碗	—	(5.95)	4.05	平底。底部外面は蛇の目凹形高台状に浅く削りだす。脚部は短く直立。体部は内彎気味に外上方に延びる。	外面　半裁菊花文　界線2条。内面　無文。底部外面　露胎。	肥前系　波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
112	27	—	西地区	SD05	染付磁器	碗	(11.80)	(4.90)	—	器壁は全体に薄い。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	口縁部内面　四方襷文。底部内面界線2条。体部外面　牡丹唐草文施文。	肥前系。19世紀前半。
113	27	—	西地区	SD05	染付磁器	碗	(10.50)	5.60	(3.70)	高台は細く比較的高い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は若干外方にひらく。	内外面ともやや濃い呉須で井桁文などの線描きの文様を施文。	産地不明の端反碗。近代以降。
114	27	—	西地区	SD05	染付磁器	碗	(11.40)	4.90	(4.00)	器壁は全体に薄い。高台は細く高い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　丸に樹木・唐子文をプリント。内面　無文。	近代以降。
115	27	—	西地区	包含層	青花磁器	皿	(9.90)	2.10	(6.10)	平底。高台は断面三角形状で細く比較的高い。体部は短く直線的に外上方に延びる。口縁部は外方にひらき、端部は尖り気味。	外面　太い界線1条　細かい草花文　界線1・1条。内面　界線1条界線2条。底部内面　草花文。	16世紀代の明青花磁器。
116	27	—	東地区5区	SK04	染付青磁	碗	(10.00)	(5.65)	—	体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　青磁釉施釉。明オリーブ灰色に発色。内面　四方襷文・界線2条。	肥前系。18世紀代。
117	27	—	東地区4・5区	SK04	染付磁器	碗	(11.80)	5.80	(4.60)	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面　界線1条・丸文・界線1.2条。底部外面　文字文。内面　四方襷文・界線2条・コンニャク印判で五弁花文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
118	27	—	東地区4・5区	SK04	染付磁器	碗	—	(3.00)	6.20	高台は細く高い。平底。体部は直線的に外上方に立ち上がる。	内面　松に鶴文？底部外面　文字文。	肥前系。広東碗。19世紀前半。
119	27	—	東地区4・5区	SK04	染付磁器	杯	(6.80)	(4.50)	—	体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	外面　格子目文と菊花文。内面界線2条。	肥前系　19世紀前半。
120	27	—	東地区4・5区	SK04 SX07	染付磁器	蓋	(10.45)	(3.30)	—	つまみは若干外方にひらく。端部は丸味をもつ。体部は内彎。口縁端部は尖り気味。	外面　丸に壽字文・草花文。内面菱形文・界線2条・丸に壽字文。	肥前系。線描き文。
121	27	—	東地区5区	SK04	染付磁器	蓋	11.35	3.75	—	かえりをもつ蓋。体部は内彎。かえりは内傾して、端部は尖り気味。上面に棒状のつまみを貼り付け。	上面　同心円状文を施文。内面無文。身との接触部は露胎。	鉢の蓋。産地不明。19世紀前半以降か？
122	27	—	東地区5区	SK04	染付磁器	皿	(13.00)	3.50	4.45	高台は断面台形状。底部の器壁は厚い。体部は僅かに内彎気味に緩やかに外上方に延びる。	内面　二重線の斜格子文・界線2条。底部内面　蛇の目状釉ハギ。外面　無文。畳付に砂粒着。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
123	27	29	東地区4・5区	SK04	染付磁器	香炉	—	(2.45)	4.05	高台は平高台を円錐状に削る。体部外面最下位に国子状の脚を貼り付ける。体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。	外面　施釉。内面　露胎。	肥前系？
124	28	—	東地区4・5区	SK04	染付磁器	皿	19.80	3.85	11.00	高台は断面三角形状で低い。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	内面　菖蒲に扇文・界線2条。底部内面　コンニャク印判で五弁花文。底部内面　蛇の目状釉ハギ。外面　唐草文。	肥前系　波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
125	28	—	東地区5区	SX03	染付磁器	碗	(7.45)	3.95	(3.90)	高台は断面三角形状で低い。平底。体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　斜めに交差する草花文。界線2条。内面　無文。	産地　不明。19世紀前半以降。煎茶碗。
126	28	—	東地区4区	SX07	染付磁器	碗	(9.60)	(5.30)	(4.40)	高台は断面台形状で比較的高い。底部の器壁は厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　雪輪文・界線1・1条。内面　無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
127	28	—	東地区4区	SX07	染付磁器	碗	—	(4.65)	4.05	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。	外面　牡丹唐草文・界線1・2条。内面　界線1条。コンニャク印判。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
128	28	—	東地区4区	SX07	染付磁器	杯	(7.75)	(5.50)	—	体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	外面　やや濃い呉須で、松竹梅文・界線1・1条。内面　四方襷文・界線2条。	肥前系。19世紀前半。
129	28	—	東地区2・3区	SX09	陶胎染付	碗	(8.75)	(6.70)	(4.20)	高台は断面台形状で比較的低い。平底。体部はほぼ直立。口縁端部は尖り気味。	外面　呉須　簡易な草花文。内面無文。	肥前系。陶胎染付。18世紀代。
130	28	—	東地区2・3区	SX09	施釉陶器	鉢	—	(4.80)	(6.00)	高台は断面台形状で低い。平底。体部は直立。	体部外面に鉄絵で松葉状文施文の後、内外面とも透明釉施釉。外面の高台脇以下露胎。高台裏に墨書「□□長七」か。	京・信楽系？19世紀前半。
131	28	—	東地区2・3区	SX09	染付磁器	碗	8.65	4.55	3.05	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　割筆で二重網目文施文。内面　無文。	肥前系　18世紀代。
132	28	—	東地区2・3区	SX09	染付磁器	碗	(10.10)	(5.25)	4.10	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　割筆で二重網目文施文。内面　無文。	肥前系　18世紀代。
133	28	—	東地区2・3区	SX09	染付磁器	碗	7.35	4.20	(3.00)	高台は断面三角形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。	外面　雪輪文・界線1・1条。内面　無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
134	28	—	東地区2・3区	SX09	染付磁器	碗	(9.90)	(5.10)	3.60	高台は断面台形状。底部の器壁は非常に厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。	外面　雪輪文・界線1・1条。内面　無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
135	28	—	東地区2・3区	SX09	染付磁器	杯	7.95	6.15	3.75	高台は断面台形状で幅が狭く、低い。平底。体部は直立。口縁端部は丸味をもつ。	外面　界線1条・草花文・界線1条。内面　四方襷文・界線2条。底部内面　五弁花文。	肥前系。19世紀前半。
136	28	—	東地区2・3区	SX09	染付磁器	杯	(8.10)	(5.90)	—	体部は直立。口縁部は上面に端面をもつ。	外面　界線1条・草花文・界線1条。内面　四方襷文・界線2条。	肥前系　19世紀前半。
137	28	—	東地区1区	堀	染付磁器	碗	(10.50)	6.25	(4.45)	高台は細く高い。底部の器壁は比較的厚い。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　蓮弁文・界線2条。内面無文。底部内面　界線2条・草花文。	肥前系　初期伊万里。17世紀前半。
138	28	—	東地区1区	堀	染付磁器	碗	(9.55)	6.90	3.95	高台は断面台形状で比較的高い。底部の器壁は比較的厚い。体部はほぼ直立。口縁端部は尖り気味。	外面　草花文。内面　無文。畳付に砂粒着。	肥前系。初期伊万里。17世紀前半。

報告No	図版	写真図版	出土地区	出土遺構	種別	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	形態・成形技法の特徴	文様・調整技法の特徴	備考
139	28	—	東地区1区	堀	染付磁器	碗	(9.30)	(5.30)	—	体部はほぼ直立。口縁端部は尖り気味。	外面　界線1条・唐草文・界線1条。内面　無文。	肥前系。
140	28	—	東地区1区	堀	染付磁器	碗	(8.80)	(5.85)	—	体部はほぼ直線的に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	外面　界線2条　草花文　界線1条。内面　無文。	肥前系。18世紀後半。
141	28	29	東地区1区	堀	染付磁器	碗	—	(2.45)	(3.70)	高台は断面台形状。底部の器壁は比較的厚い。体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。	外面　灰被りで文様は不鮮明。内面　無文。	肥前系。波佐見産。くらわんか手。18世紀後半。
142	28	—	東地区1区	堀	染付磁器	碗	(12.30)	(4.15)	—	体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　界線2条。唐草文。内面　太い界線1条。	瀬戸・美濃系。19世紀前半。
143	28	—	東地区1区	堀	染付磁器	碗	(8.60)	6.20	(4.80)	高台は断面台形状。平底。体部はほぼ直立。口縁端部は尖り気味。	外面　界線2条・梅花文・界線1・2条。内面　無文。	肥前系。19世紀前半。
144	28	—	東地区1区	堀	染付磁器	杯	(5.90)	(2.65)	—	体部は直線的に外上方に延びる。口縁部は外方にひらく。	外面　界線2条。草花文。内面　無文。	肥前系。京焼風磁器。19世紀前半。
145	28	29	東地区1区	堀	染付磁器	杯	—	(2.25)	(2.35)	高台は断面台形状で小さく低い。体部は直線的に外上方に延びる。	外面　草花文。太い界線1条。内面　無文。	肥前系。
146	28	—	東地区1区	堀	染付磁器	皿	—	(2.10)	(5.00)	高台は断面台形状で低い。体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。	内面　界線2条。龍文？外面　無文。畳付に砂粒着。	肥前系　初期伊万里。17世紀前半。
147	28	29	東地区1区	堀	染付磁器	皿	(12.90)	3.45	(4.40)	高台は断面台形状。平底。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面　簡易な草花文。底部内面　蛇の目状釉ハギ。外面　無文。体部下半以下　露胎。	肥前系。波佐見産の粗製の染付磁器。18世紀前半。
148	28	—	東地区1区	堀	染付磁器	皿	(13.75)	3.00	(8.40)	高台は断面台形状。平底。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	外面　界線2条。底部外面　界線1条。内面　草花文か？。	肥前系？
149	28	—	東地区1区	堀	染付磁器	皿	(14.00)	2.90	(6.50)	高台は断面台形状。平底。底部の器壁は比較的厚い。体部は直線的に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面　草花文・界線2条・扇文。外面　無文。	肥前系。18世紀代？
150	—	27	東地区6区	炉1	土師器	皿	—	—	—	非ロクロ成形。平底。やや上げ底気味。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味に収める。	口縁部内外面　強いヨコナデ調整。体部内外面　ヨコナデ調整。底部内面　不定方向のナデ調整。体部外面に指頭圧痕が残る。	焼成　良好。色調　にぶい黄橙色。
151	—	29	東地区4・5区	SK04	白磁	皿	—	—	—	器壁は全体に比較的厚い。高台は浅く削りだす。体部は僅かに内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内外面とも透明釉施釉。灰白色に発色。底部内面　蛇の目状釉ハギ。外面の体部下半以下　露胎。	肥前系　波佐見産。粗製の白磁皿。18世紀前半。
152	—	29	東地区2・3区	SX09	染付磁器	碗	—	—	—	器壁は全体に厚い。高台は断面台形状。体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は丸味をもつ。	体部外面　コンニャク印判で崩れた桐文施文。内面　無文。	肥前系　波佐見産。くらわんか手碗。18世紀前半。
153	—	29	東地区4・5区	SK04	染付磁器	碗	—	—	—	高台は細く高い。体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。	外面　呉須　芭蕉文？内面　草花文。高台裏　文字文施文。	肥前系　広東碗。18世紀後半～19世紀前半。
154	—	29	東地区1区	堀	染付磁器	皿	—	—	—	体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は尖り気味。	内面　界線1条。	肥前系。18世紀代。
155	—	30	東地区4・5区	SK04	瓦	軒丸瓦	—	—	—	巴文軒丸瓦。型作り成形。巴の尾は比較的長い。珠文数　12～13。	内外面ともナデ調整。	焼成　良好。色調　暗灰色。瓶し瓦。

表４　出土金属器一覧表

報告番号	図版番号	写真図版	出土地区	出土遺構	種　別	器　種	法量(cm) 長さ	幅	厚さ	備　考
M1	29	31	西地区	井戸3	鉄製品	不明	(24.2)	(1.7)	(1.1)	先端部欠損？
M2	29	31	西地区	SK08	銅製品	銭貨	2.4	2.4	0.1	熙寧元寶
M3	29	31	東地区	SX09	鉄製品	刀剣	(1.35)	(2.65)	(0.45)	両側欠損
M4	29	31	東地区	SX09	鉄製品	鋤先	(5.7)	(4.15)	(0.6)	先端部欠損
M5	29	31	東地区	炉跡2-a	鉄製品	不明	(3.85)	(2.3)	(0.55)	鎌片か？
M6	29	31	東地区	炉跡2-b	鉄製品	釘	(3.3)	1.45	0.65	木質付着
M7	29	31	東地区	SX07	鉄製品	不明	(4.6)	0.45	0.45	先端部欠損
M8	29	31	東地区	SX08	鉄製品	不明	(8.7)	3.0	1.75	
M9	29	31	東地区	炉跡3	鉄製品	釘	(2.1)	(0.45)	(0.45)	両端部欠損
M10	29	31	東地区	炉跡3	鉄製品	釘	(2.7)	(1.45)	(0.4)	両端部欠損
M11	29	31	東地区	炉跡3	鉄製品	釘	(2.8)	1.1	0.9	先端部欠損
M12	29	31	東地区	炉跡3	鉄製品	釘	1.15	(1.6)	0.3	先端部欠損
M13	29	31	東地区	炉跡3	鉄製品	釘	1.2	0.45	(0.55)	先端部欠損
M14	29	31	東地区	炉跡3	鉄製品	釘	(2.7)	0.5	0.35	
M15	29	31	東地区	炉跡3	鉄製品	釘	4.45	0.8	0.5	
M16	29	31	東地区	炉跡3	鉄製品	釘	4.25	0.6	0.45	
M17	29	31	東地区	炉跡3	鉄製品	釘	4.5	0.45	0.55	
M18	29	31	東地区	炉跡3	鉄製品	釘	3.5	0.45	0.4	
M19	29	31	東地区	炉跡3	鉄製品	釘	(4.6)	0.45	0.4	頭部欠損
M20	29	31	東地区	炉跡3	鉄製品	釘	7.2	1.7	0.65	
M21	29	31	東地区	炉跡3	鉄製品	釘	3.9	3.0	0.65	
M22	29	31	東地区	SX04	鉄製品	釘	(3.2)	0.5	0.5	
M23	29	31	東地区	SX04埋桶内	鉄製品	鳶り留状	8.0	3.25	0.45	

表５　出土石製品一覧表

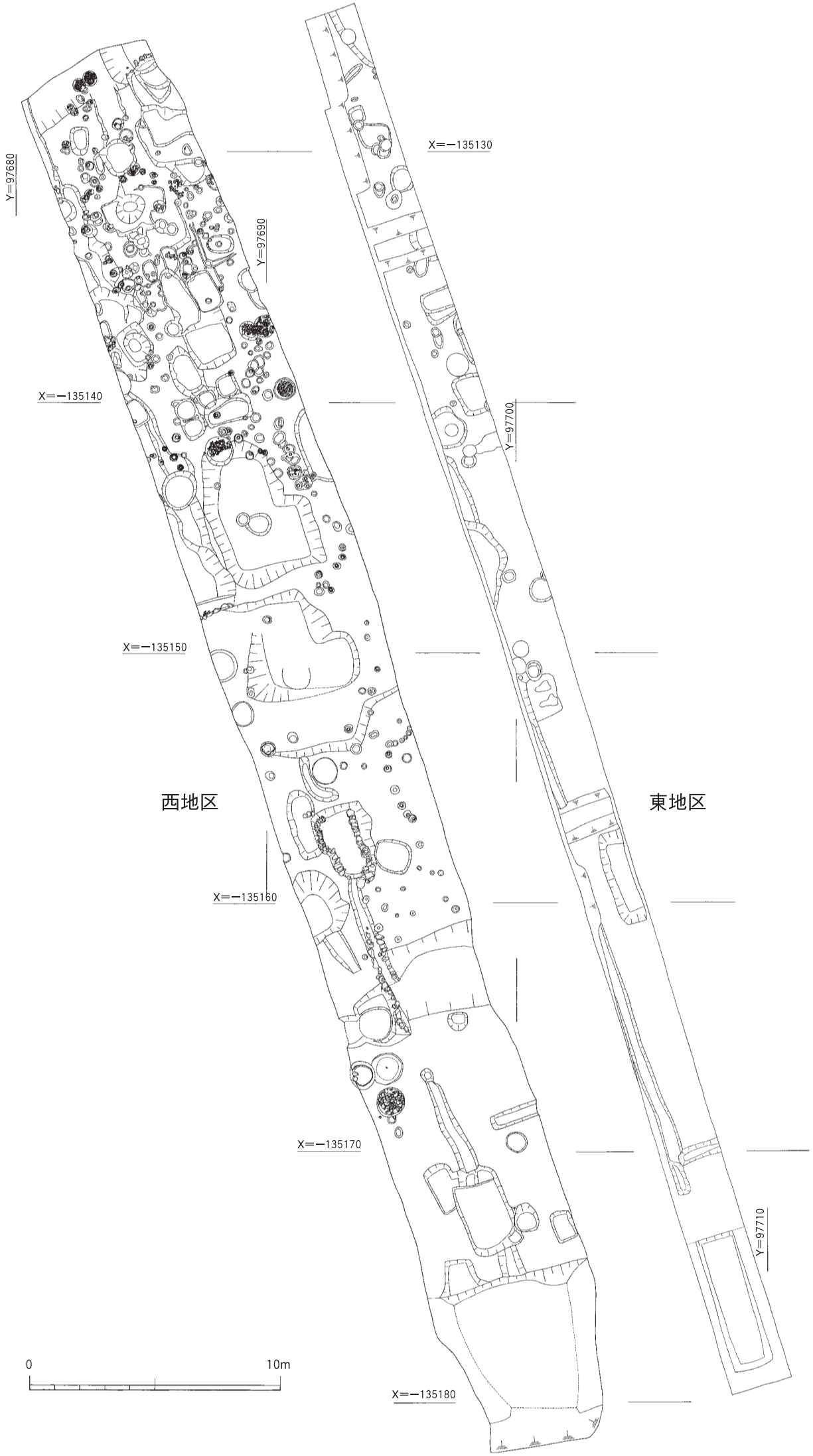
報告番号	図版番号	写真図版	出土遺構	種　別	器　種	石　材	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備　考
S1	30	30	包含層	石製品	砥石	硬砂岩	8.4	5.7	2.1	155.1	
S2	30	30	包含層	石製品	砥石	凝灰質砂岩	(8.3)	4.3	(1.5)	70.5	層理に沿って剥落した分を欠損
S3	30	30	SK04上層	石製品	硯	極細粒砂岩	9.0	(5.3)	(1.1)	(94.0)	層理に沿って剥落した分を欠損

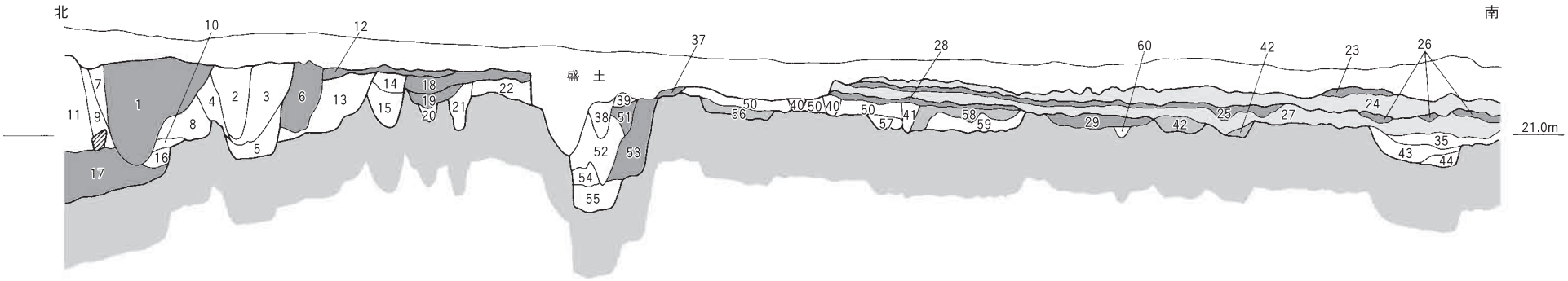
図版

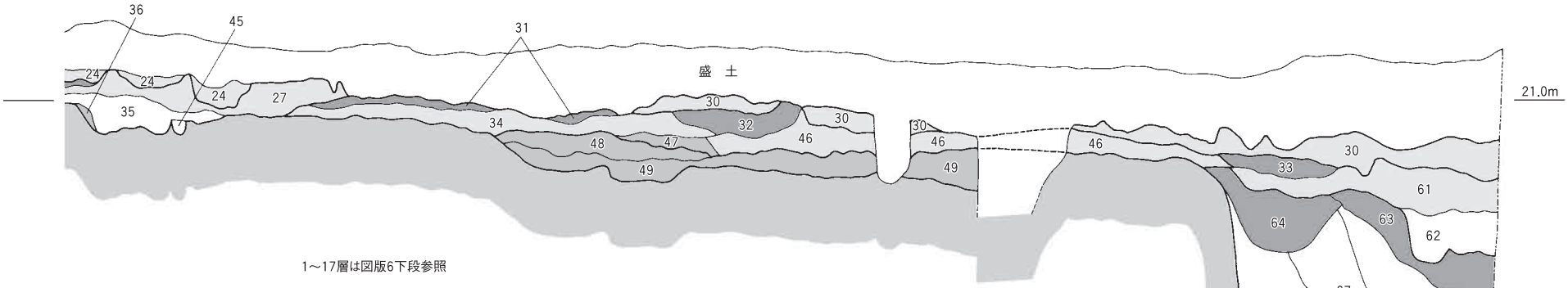
図版1　調査区周辺の地形

（S=1/5,000）

図版2　調査区平面図


Y=97680
Y=97690
X=−135130
X=−135140
Y=97700
X=−135150
西地区
東地区
X=−135160
X=−135170
Y=97710
0
10m
X=−135180





1～17層は図版6下段参照

18. 10YR6/1 褐灰 シルト
10Y6/6 明黄褐シルトをブロック状に含む
19. 10YR6/2 灰 シルト
7.5YR6/6 橙シルトをブロック状に含む
20. 5YR6/6 橙 シルト
21. 10YR6/2 灰黄褐 シルト
22. 10YR6/2 灰黄褐 シルト
23. 7.5YR6/6 橙 シルト
24. 10YR2/1 黒 細砂～粗砂混じりシルト
25. 5YR6/6 橙 シルト
26. 5YR6/8 橙 礫混じりシルト
27. 10YR5/2 灰黄褐 礫混じりシルト 炭を含む
28. 10YR8/2 灰白 シルト
29. 10YR7/6 明黄褐 シルト
30. 10YR2/1 黒 シルト
31. 5YR6/8 橙 礫混じりシルト
32. 10YR5/2 灰黄褐 シルト～極細砂
10YR7/6 黄橙シルトをブロック状に含む
33. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト～極細砂
10YR7/6 黄橙シルトをブロック状に含む
34. 10YR5/2 灰黄褐 細砂混じりシルト
35. 10YR4/2 灰黄褐 粗砂混じりシルト
36. 2.5YR5/8 明赤褐 シルト
37. 10YR7/8 黄褐 シルト
38. 10YR5/1 褐灰 シルト
39. 10YR4/1 褐灰 シルト
40. 10YR6/2 灰黄褐 シルト
10YR7/6 黄橙シルトをブロック状に含む
41. 10YR5/2 灰黄褐 シルト 炭を含む
42. 5YR4/6 にぶい橙 シルト
43. 10YR5/2 灰黄褐 礫混じりシルト
44. 10YR7/2 にぶい黄橙 粗砂混じりシルト

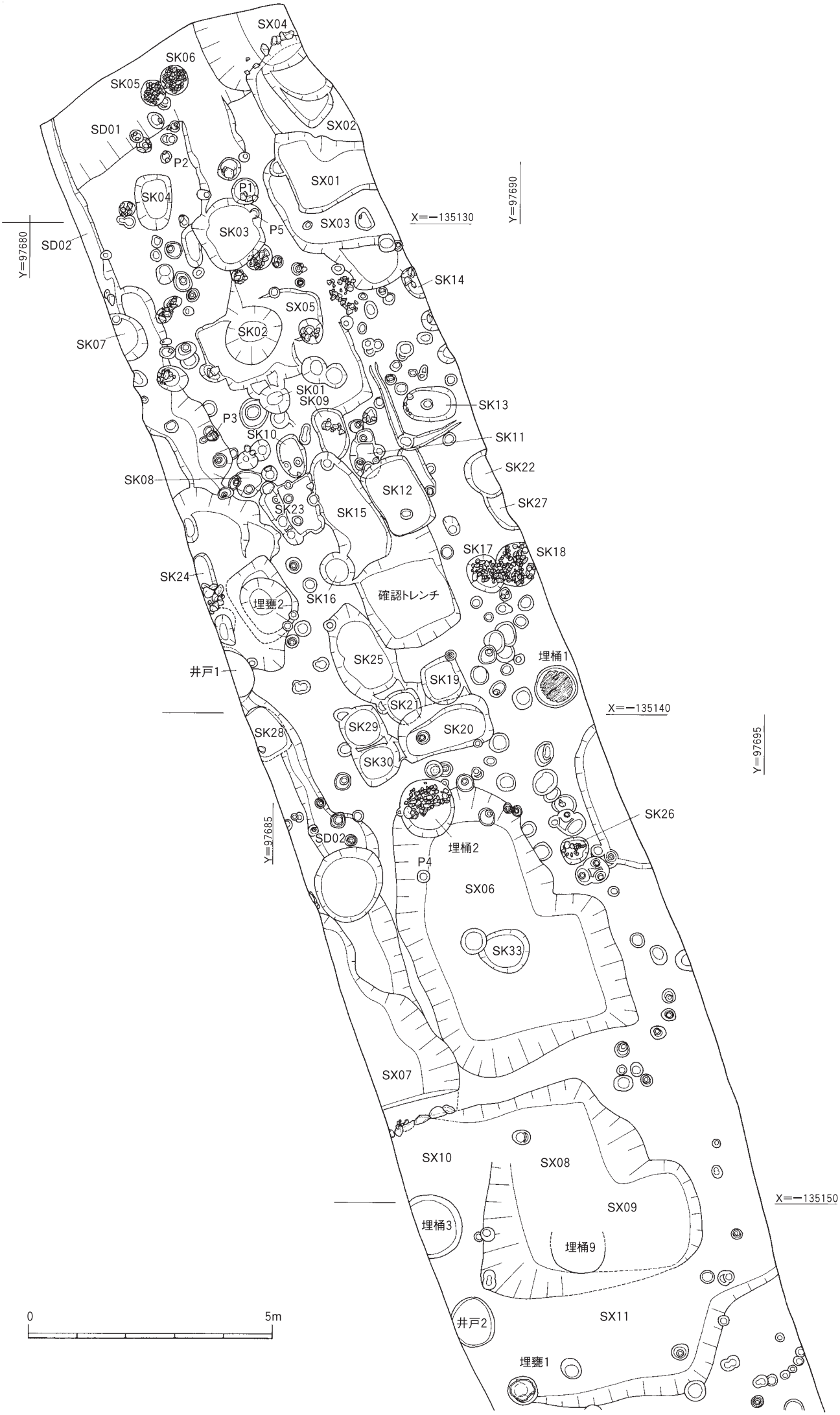
45. 10YR5/4 にぶい黄褐 礫混じりシルト
46. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト
47. 10YR6/4 にぶい黄橙 粗砂～礫混じりシルト
48. 10YR6/4 にぶい黄橙 礫混じりシルト 炭を含む
49. 5YR6/4 にぶい橙 中～粗砂混じりシルト
50. 10YR6/3 にぶい黄橙
51. 10YR6/2 灰黄褐 シルト
7.5YR6/6 橙シルトをブロック状に含む
52. 10YR7/1 灰白 礫混じりシルト
53. 10YR6/1 褐灰 シルト
10YR7/8 黄橙シルトをブロック状に含む
54. 10YR2/1 黒 シルト
55. 10YR5/2 灰黄褐 礫混じりシルト
56. 5YR6/6 橙 シルト
57. 10YR6/3 にぶい黄橙 シルト
5YR6/8 橙シルトをブロック状に含む
58. 10YR6/2 灰黄褐 細砂～中砂混じりシルト
59. 7.5YR6/4 にぶい橙 シルト
60. 5YR4/6 にぶい橙 シルト
61. 2.5Y4/2 暗灰黄 シルト
62. 2.5Y5/2 暗灰黄 礫混じり細砂～中砂
63. 2.5Y7/6 明黄褐 シルト
64. 2.5Y5/6 黄褐 シルト
65. 2.5Y5/4 黄褐 粗砂混じりシルト
66. 2.5Y4/1 黄灰 シルト
67. 2.5Y6/2 灰黄 粗砂～中礫
68. 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂～中礫
69. 2.5Y5/6 黄褐 シルト～細砂
70. 2.5Y5/2 暗灰黄 粗砂～中礫混じり細砂
71. 2.5Y3/1 黒褐 シルト 炭を含む
72. 2.5Y3/1 黒褐 シルト 炭を含む
73. N5/ 灰 粘質シルト
74. N4/ 暗灰 粘質シルト

1m
0 5m

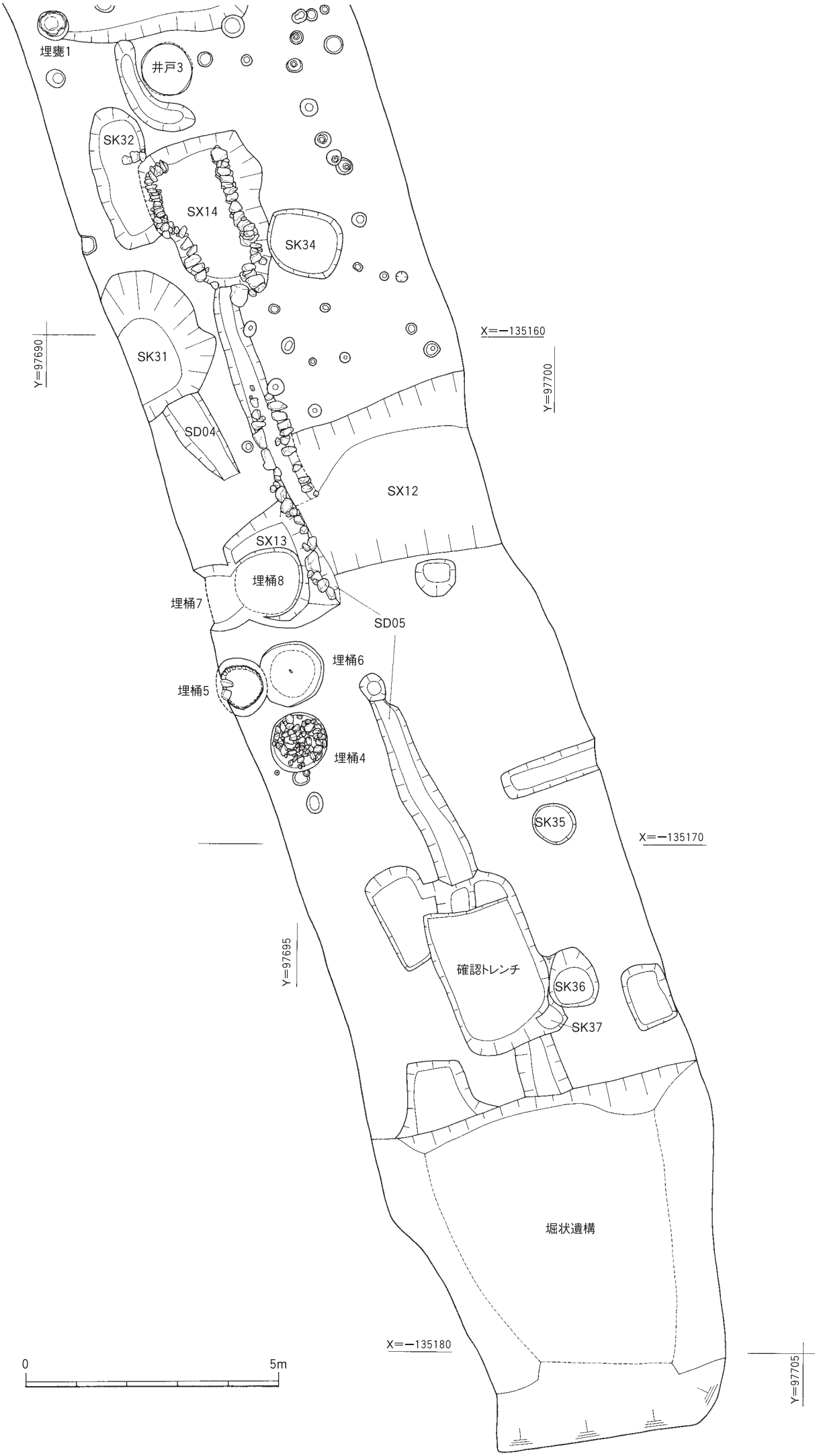
旧耕作土
整地土（地山土十旧耕土ブロック）
中世包含層

図版3 調査区土層断面図（西地区東壁）

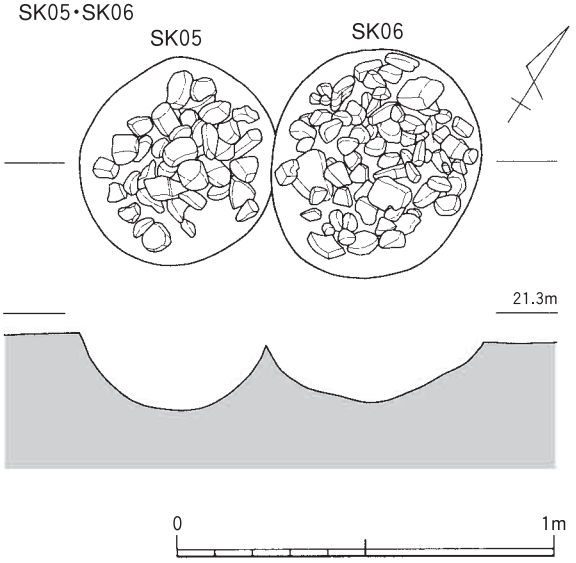
図版4　西地区平面図北半



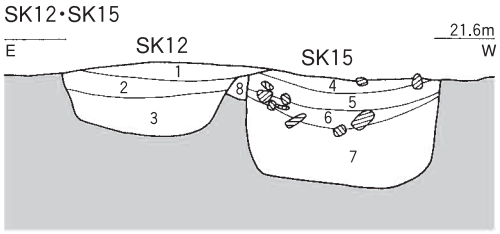
図版5　西地区平面図南半



SK05・SK06

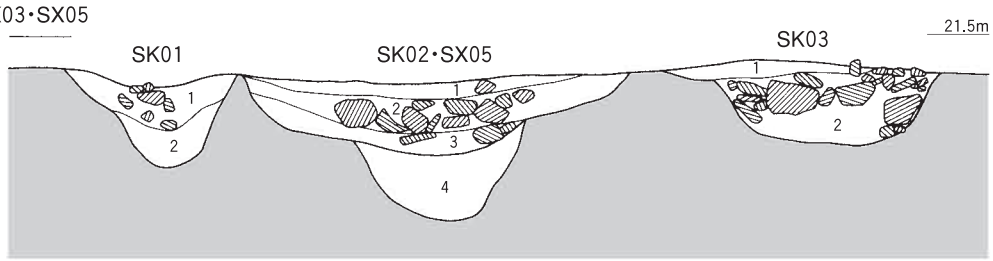


SK12・SK15



1. 10YR6/6　明黄褐　　極細砂～細砂
   炭・焼土を顕著に含む。
2. 10YR5/3　にぶい黄褐　粘質シルト～極細砂
   炭はわずか。細かい焼土をよく含む。
3. 10YR4/2　灰黄褐　　極細砂～細砂
   ベース土をブロック状に含む。
4. 10YR5/2　灰黄褐　　粗砂混じり極細砂～細砂
5. 10YR4/1　褐灰　　シルト～極細砂
6. N5/　　灰　　粘質シルト
   直径4～10㎝大の礫を30%程度含む。
7. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト混じり粗砂～小礫
8. 10YR5/3　にぶい黄褐　極細砂～細砂

SK01～SK03・SX05

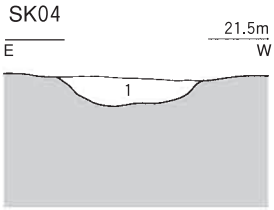


1. 10YR6/4　にぶい黄橙　シルト
   直径3～10㎝の礫を含む。
2. 10YR4/1　褐灰　　シルト
   焼土・炭を含む。

1. 10YR6/4　にぶい黄橙　粗砂混じりシルト
2. 10YR7/2　にぶい黄橙　シルト
   直径10～25㎝大の花崗岩大礫を10%程度含む。
3. 10YR6/1　褐灰　　シルト
   10YR7/6　明黄褐シルトブロックを含む。
4. 10YR6/1　褐灰　　シルト
   10YR6/6　明黄褐シルト（炭混じり）をブロック状に含む。

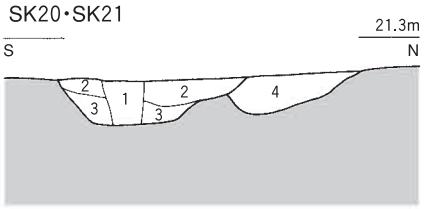
1. 10YR6/2　灰黄褐　　シルト
2. 7.5YR6/3　にぶい褐　粗砂～小礫混じり粘質シルト～極細砂
   直径15～35㎝大の花崗岩大礫を7%程度含む。

SK04



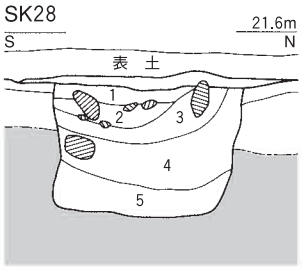
1. 10YR5/2　灰黄褐　粗砂混じりシルト～極細砂
   直径2～3㎝大の礫を2%程度含む。

SK20・SK21



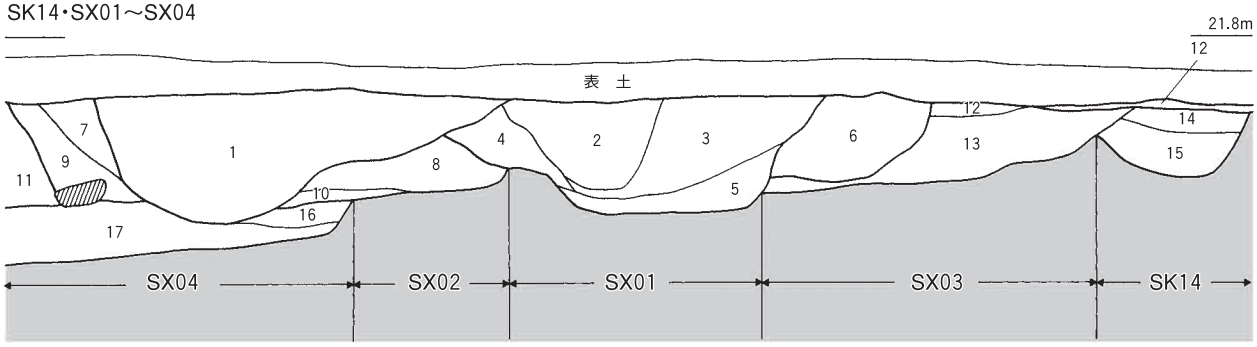
1. 2.5YR4/1　黄灰　　粘質シルト～極細砂
   しまり・粘性ともにやや強め。
2. 10YR4/1　褐灰　　シルト質極細砂～細砂
   2.5Y6/6明黄褐シルトをブロック状に含む。炭を含む。
3. 10YR4/2　灰黄褐　粗砂混じりシルト質極細砂～細砂
4. 2.5Y4/2　暗灰黄　粗砂混じりシルト質極細砂～細砂

SK28



1. 2.5Y4/2　暗灰黄　粗砂混じり粘質シルト～極細砂
2. 2.5Y5/3　黄褐　　小礫混じり粘質シルト～細砂
   直径3～15㎝大の礫を10%程度含む。
3. 2.5Y4/2　暗灰黄　粗砂混じり粘質シルト
4. 10YR4/2　灰黄褐　粗砂混じり粘質シルト～細砂
   締まりが弱く、炭・鉄分を多く含む。
5. 10YR6/2　灰黄褐　中砂～粗砂

SK14・SX01～SX04



1. 2.5Y7/8　黄橙　　シルト
2. 10YR6/6　明黄褐　粗砂混じりシルト
3. 2.5Y6/3　にぶい黄　シルト混じり中砂
4. 10YR6/1　褐灰　　中礫混じりシルト
5. 2.5Y5/1　黄灰　　シルト
6. 10YR5/1　褐灰　　シルト
   10YR6/6明黄褐シルトをブロック状に含む。

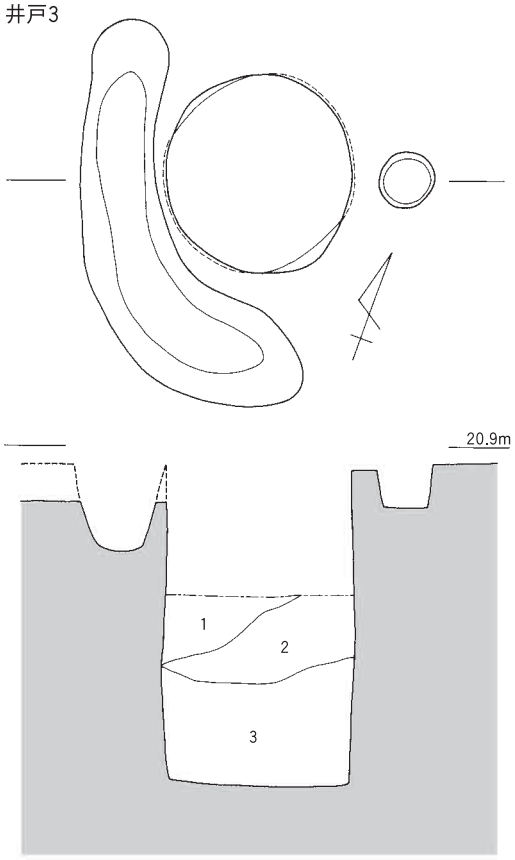
7. 2.5Y7/1　黄灰　　中～粗砂混じりシルト
8. 10YR5/4　にぶい黄褐　中礫混じりシルト
9. 2.5Y5/1　黄灰　　粗砂～小礫混じりシルト
10. 7.5YR6/4　にぶい橙　シルト
11. 2.5Y7/4　灰白　　中～粗砂混じりシルト
    2.5Y7/4浅黄シルトをブロック状に含む。
    直径10～15㎝大の花崗岩を含む。

12. 10YR7/6　明黄褐　シルト
13. 10YR6/1　褐灰　　中礫混じりシルト
14. 10YR6/2　灰黄褐　シルト
15. 10YR6/1　褐灰　　中礫混じりシルト
16. 2.5Y4/2　暗灰黄　中砂～中礫
17. 10YR7/8　黄橙　　シルト
    2.5Y6/1黄橙シルトをブロック状に含む。

0　2m

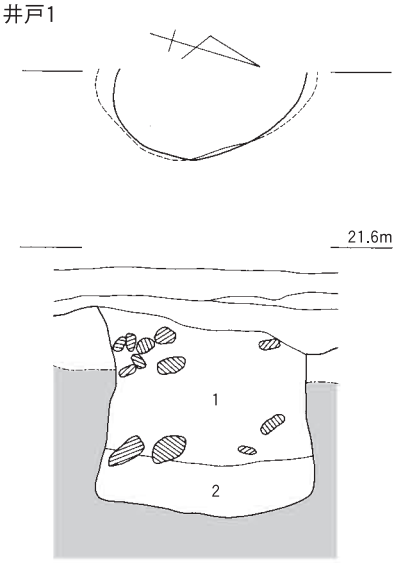
図版7　西地区近世の遺構①（井戸・埋桶）

井戸3



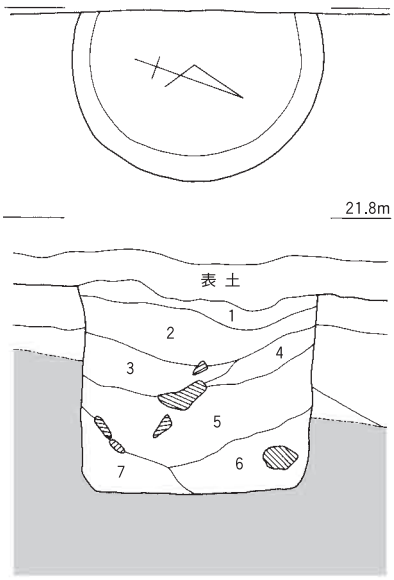
1. 5PB5/1　青灰　　粗砂～小礫混じり粘質シルト～細砂
2. 5PB4/1　暗青灰　粗砂～小礫混じり粘土～極細砂
3. 5PB3/1　暗青灰　シルト混じり細砂～小礫

井戸1



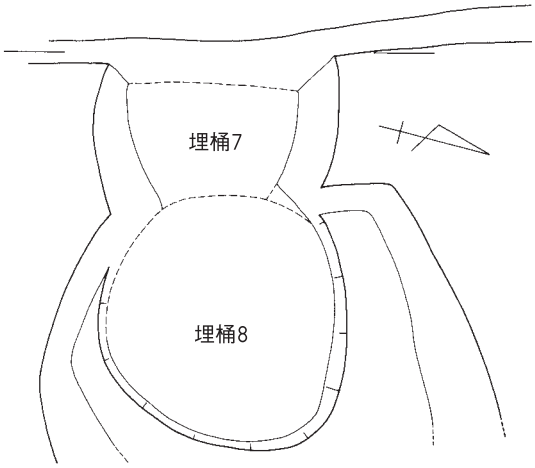
1. 10YR4/1　褐灰　　粗砂混じり粘質シルト～細砂
直径3～15cm大の礫を7%程度、鉄分含む。
2. 2.5Y5/2　暗灰黄　シルト混じり中砂～粗砂
鉄分をよく含む。

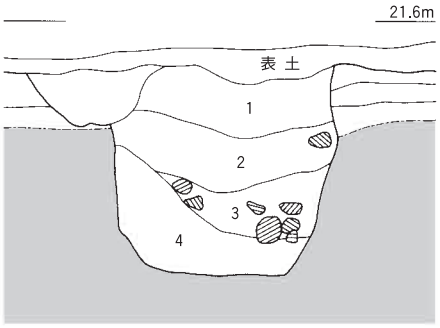
埋桶3



1. 10YR5/1　褐灰　　粗砂～小礫
2. 7.5YR6/2　灰褐　　細砂～粗砂
直径3～5cm大の礫を30%程度含む。
3. 7.5YR7/2　明黄灰　細砂～粗砂
直径3～5cm大の礫を10%程度含む。
4. 7.5YR6/1　褐灰　　細砂～粗砂
直径2～12cm大の礫を40%程度含む。
5. 7.5YR5/1　褐灰　　粗砂まじりシルト～粗砂
直径2～10cm大の礫を40%程度含む。
6. 10YR5/1　褐灰　　粗砂まじり粘質シルト
直径2～12cm大の礫を30%程度含む。
7. 10YR6/1　褐灰　　粘質シルト～細砂
直径4～10cm大の礫を10%程度含む。

埋桶7・埋桶8

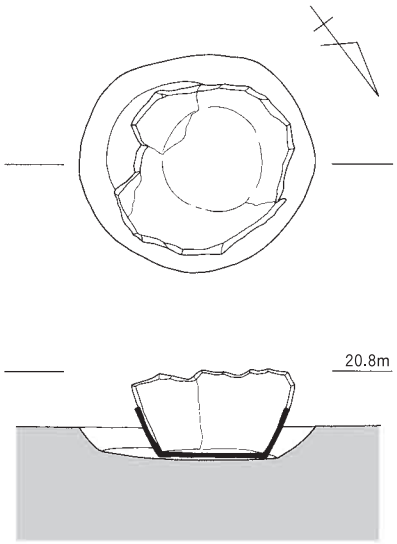




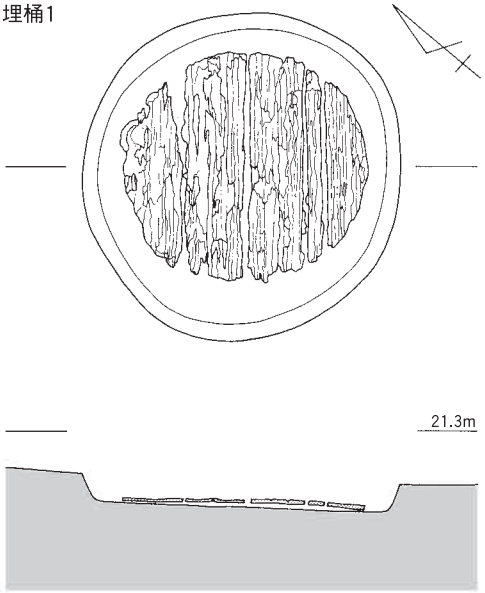
1. 7.5YR5/3　にぶい褐　中礫混じり極細砂～細砂
2. 7.5YR5/2　灰褐　　礫混じり細砂
直径3～10cm大の礫を5%程度含む。
3. 10YR5/2　灰黄褐　　粗砂～中礫
直径10cm大の礫を5%程度含む。
4. 10YR4/1　褐灰　　粗砂～中礫
直径2～3cm大の礫を40%程度含む。

図版8　西地区近世の遺構②（埋甕・埋桶）

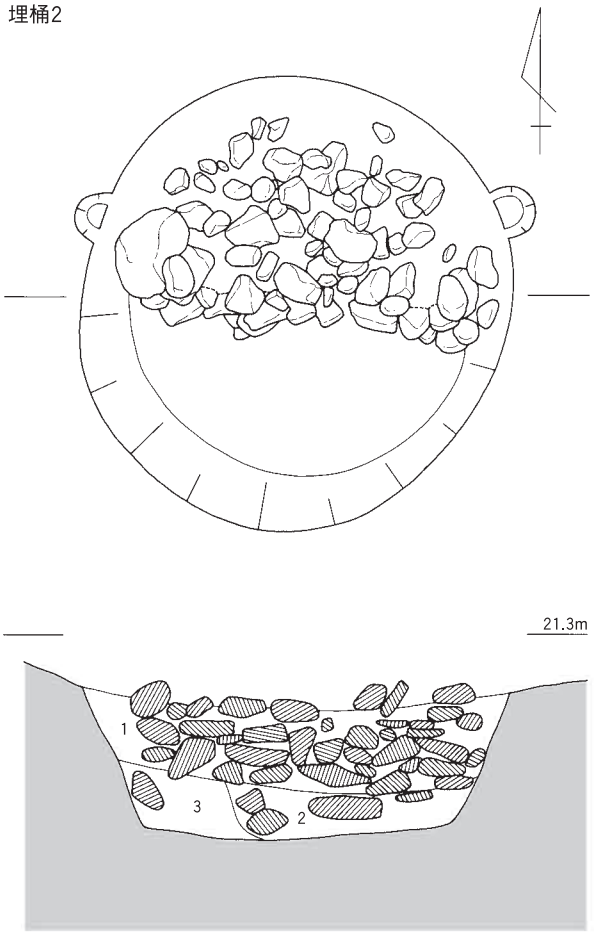
埋甕1



埋桶1

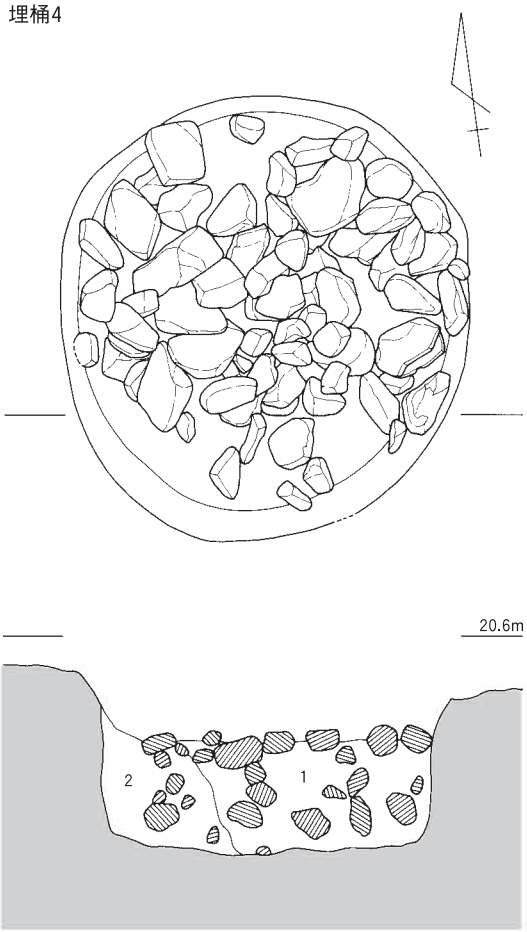


埋桶2



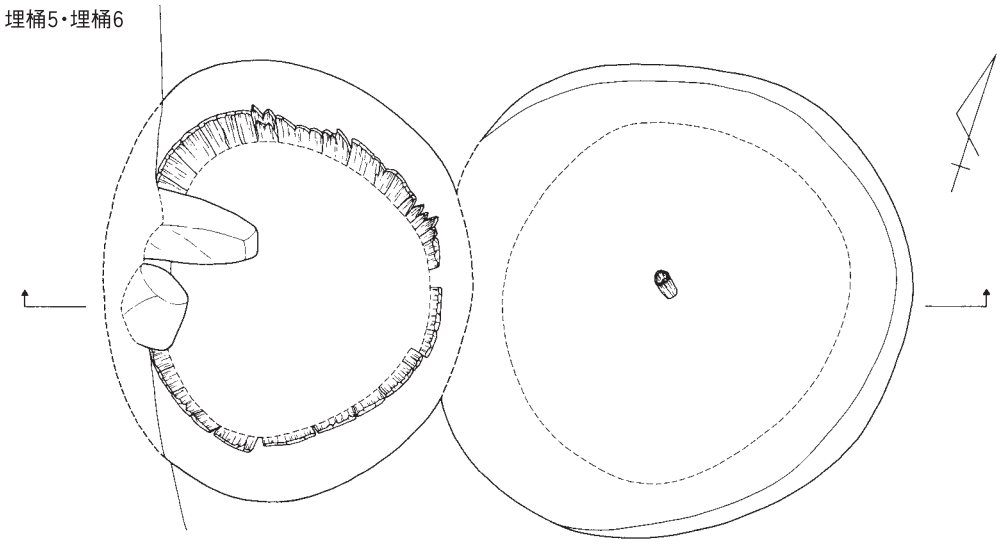
1. 10YR4/1　褐灰　　粗砂混じり粘質シルト～細砂
　直径4～12㎝大の礫を50%強含む。
2. 5PB5/1　　青灰　　粗砂混じり粘土～粘質シルト
　直径7～15㎝大の礫を7%強含む。
3. 10YR3/1　黒褐　　粗砂混じり粘質シルト～極細砂

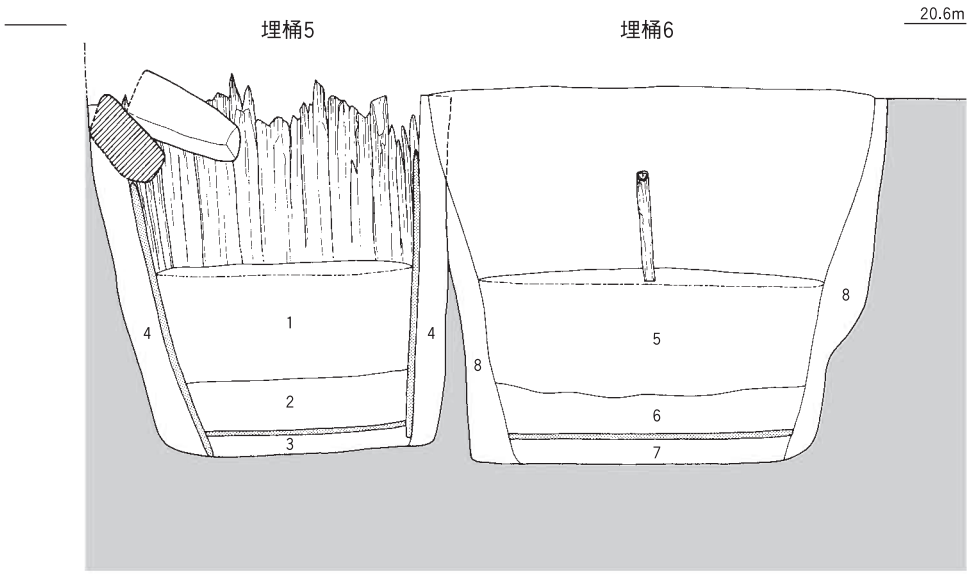
埋桶4



1. 10YR5/1　褐灰　　粗砂～小礫まじり粘土～粘質シルト
　直径5～20㎝大の礫を10%程度含む。
2. 10YR5/2　灰黄褐　粗砂～小礫まじり粘質シルト～細砂
　直径3～10㎝大の礫を2%程度含む。

0　　1m

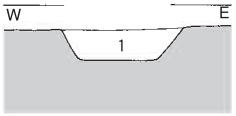




1.　10YR5/1　褐灰　中砂～粗砂混じり粘質シルト
2.　5PB2/1　青黒　粗砂混じり粘質シルト～細砂
3.　5PB5/1　青灰　粗砂混じり粘質シルト～細砂
4.　7.5YR5/1　褐灰　シルト混じり細砂～小礫
5.　2.5Y5/1　黄灰　粗砂混じり粘質シルト～極細砂
6.　5PB2/1　青黒　シルト混じり細砂～小礫
7.　5PB5/1　暗青灰　粗砂混じり粘質シルト～細砂
8.　7.5YR6/1　褐灰　シルト混じり細砂～小礫

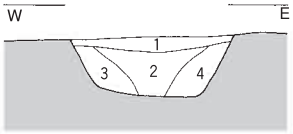
図版10　西地区近世の遺構④（土坑・落ち込み）

SK16



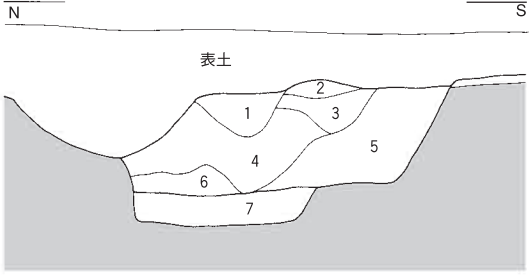
1. 10YR4/1　褐灰
　粗砂混じり粘質シルト

SK19



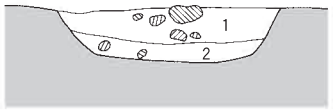
1. 2.5Y4/1　黄灰　極細砂～細砂
2. 10YR4/1　褐灰　シルト～極細砂
3. 10YR4/6　褐　シルト～細砂
　直径2㎝大のベースブロックおよび直径1～3㎝大の中礫をよく含む。
4. 10YR4/3　にぶい黄褐　粘質シルト～細砂
　直径1～3㎝大の中礫と、ベースブロックを散漫に含む。

SK22・SK27



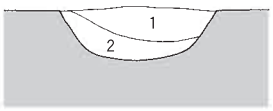
1. 10YR5/1　褐灰　シルト
2. 10YR4/1　褐灰　シルト
3. 10YR6/2　灰黄褐　シルト
　7.5Y6/6　橙　シルトをブロック状に含む。
4. 10YR7/1　灰白　礫混じりシルト
5. 10YR6/1　褐灰　シルト
　10YR7/8　黄橙　シルトをブロック状に含む。
6. 10YR2/1　黒　シルト
7. 10YR5/2　灰黄褐　シルトをブロック状に含む。

SK25



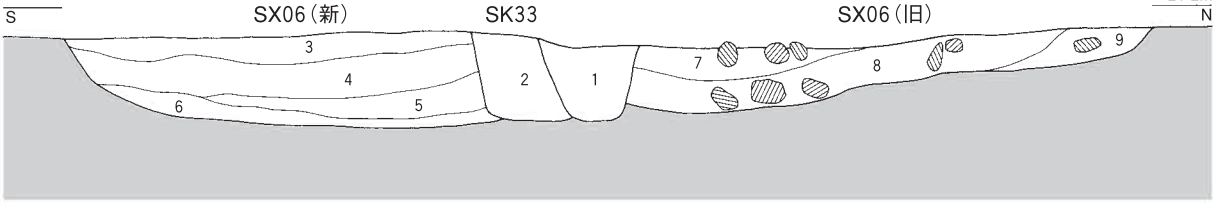
1. 10YR4/2　褐灰　粗砂混じり粘質シルト
　ベース土を散漫に含む。直径6～16㎝大の礫を5%程度含む。
2. N4/　灰　粘土～粘質シルト

SK30



1. 10YR4/2　灰黄褐　粗砂～小礫混じり粘質シルト～極細砂
2. 10YR4/1　褐灰　粗砂混じり粘質シルト
　ベース土をブロック状に含む。

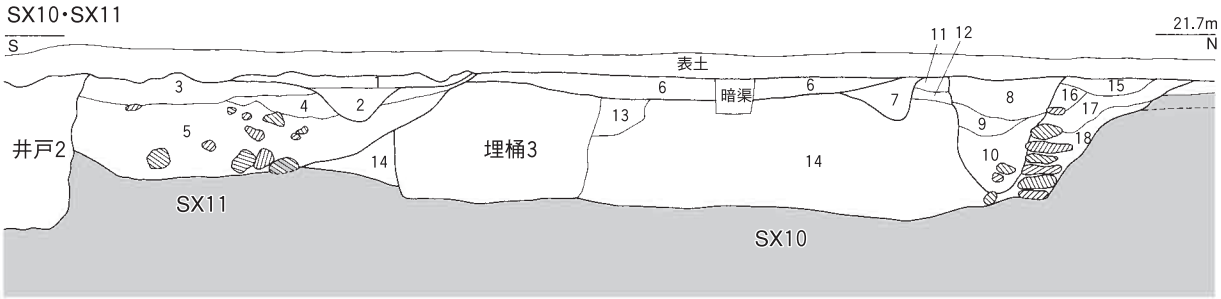
SK33・SX06・SX07



1. 10YR6/2　灰黄褐　シルト
　10YR4/1　褐灰シルトをブロック状に含む。炭を含む。
2. 10YR6/6　明黄褐　シルト～極細砂
3. 10YR5/2　灰黄褐　小礫まじりシルト～極細砂
4. 10YR5/3　にぶい黄褐　シルト質極細砂
　2.5YR5/8　明赤褐シルトをブロック状に含む。
5. 10YR6/3　にぶい黄橙　シルト質極細砂
6. 10YR4/1　褐灰シルトをブロック状に含む。
7. 5Y5/1　灰　シルト
8. 10YR4/2　灰黄褐　粗砂～小礫混じりシルト～極細砂
9. 10YR4/1　褐灰　粗砂混じり粘質シルト
　10YR5/3　にぶい黄褐　粗砂混じりシルト～極細砂

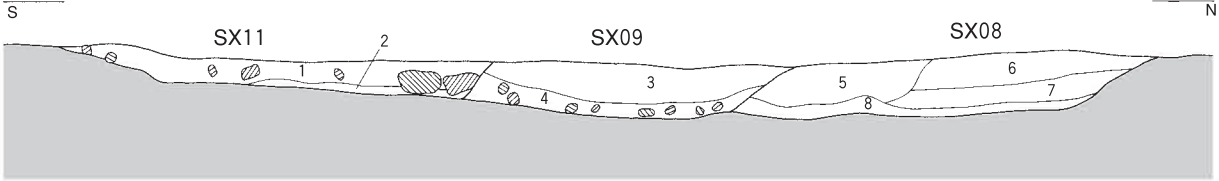
0　2m

SX10・SX11



1. 5YR5/2　灰褐　中礫混じりシルト～極細砂
2. 7.5YR5/2　灰褐　シルト～細砂
3. 10YR5/2　灰黄褐　シルト～細砂
4. 10YR5/1　褐灰　シルト～細砂
5. 7.5YR5/1　褐灰　中・大礫混じり中砂～粗砂
6. 2.5Y5/2　灰黄褐　極細砂～細砂
7. 10YR/1　褐灰　シルト～極細砂
8. 10YR5/2　灰黄褐　小・中礫混じり極細砂～細砂
9. 5PB5/1　青灰　小・中礫混じり粘質シルト～細砂
　10YR6/6　明黄褐　粘質シルトをブロック状に含む。
10. 10YR5/1　褐灰　シルト～粗砂
11. 7.5YR5/2　灰褐　極細砂～細砂
12. 7.5YR6/4　にぶい橙　細砂～粗砂
13. 10YR5/2　灰黄褐　極細砂～細砂
14. 7.5YR5/2　灰褐　粗砂～中礫混じりシルト～細砂
15. 10YR5/2　灰黄褐　粘質シルト～細砂
16. 2.5YR5/2　暗灰黄　シルト～細砂
17. 10YR6/2　灰黄褐　シルト
　10YR7/4　にぶい黄橙　シルトをブロック状に含む。
18. 2.5Y4/1　黄灰　粘質シルト

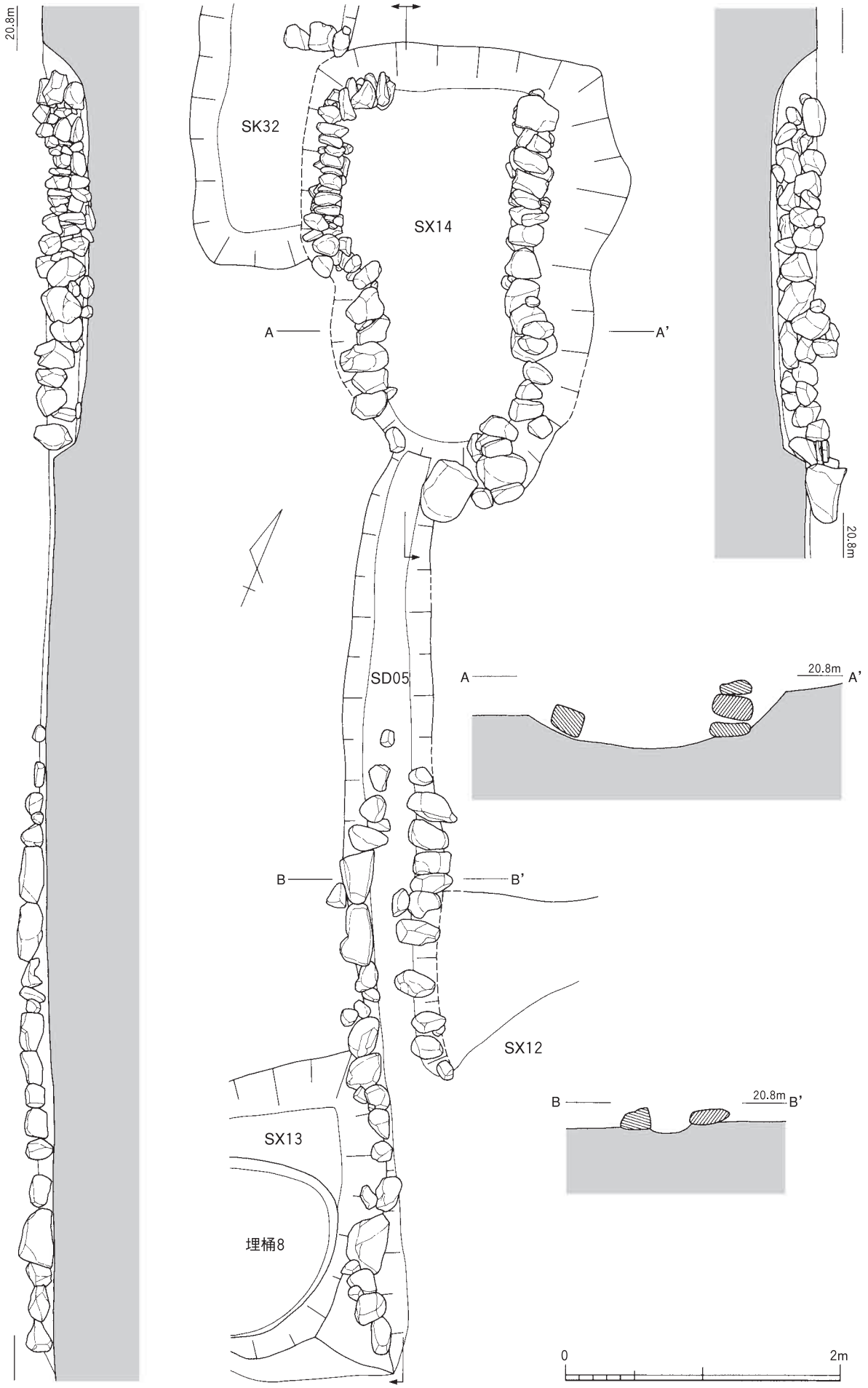
SX08・SX09・SX11



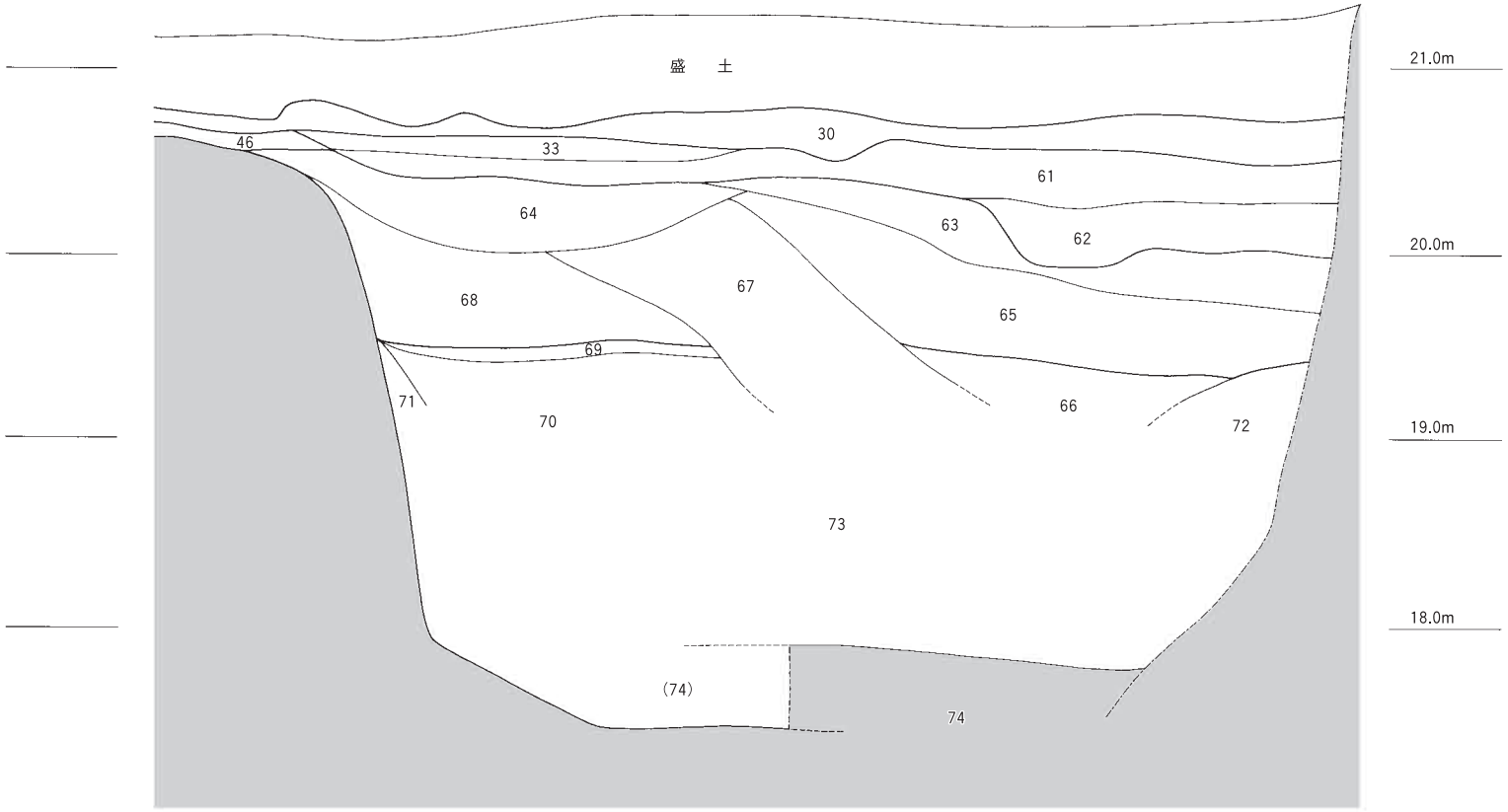
1. 10YR4/1　褐灰　粗砂混じりシルト
　直径7～15㎝大の礫を含む。
2. 5YR5/6　明赤褐　シルト
3. 7.5YR5/8　明褐　シルト
　10YR6/2　灰黄褐シルトをブロック状に含む。
4. 10YR5/1　褐灰　シルト
　直径7～12㎝大の礫を含む。
5. 10YR5/2　灰黄褐　シルト
　7.5YR6/8　明褐シルトをブロック状に含む。
6. 10YR6/2　灰黄褐　シルト混じり粗砂～中礫
7. 10YR6/1　褐灰　中砂～粗砂
8. 10YR7/1　灰白　中砂～中礫

0　2m

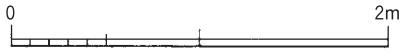
図版11　西地区近世の遺構⑤（石組遺構・溝）

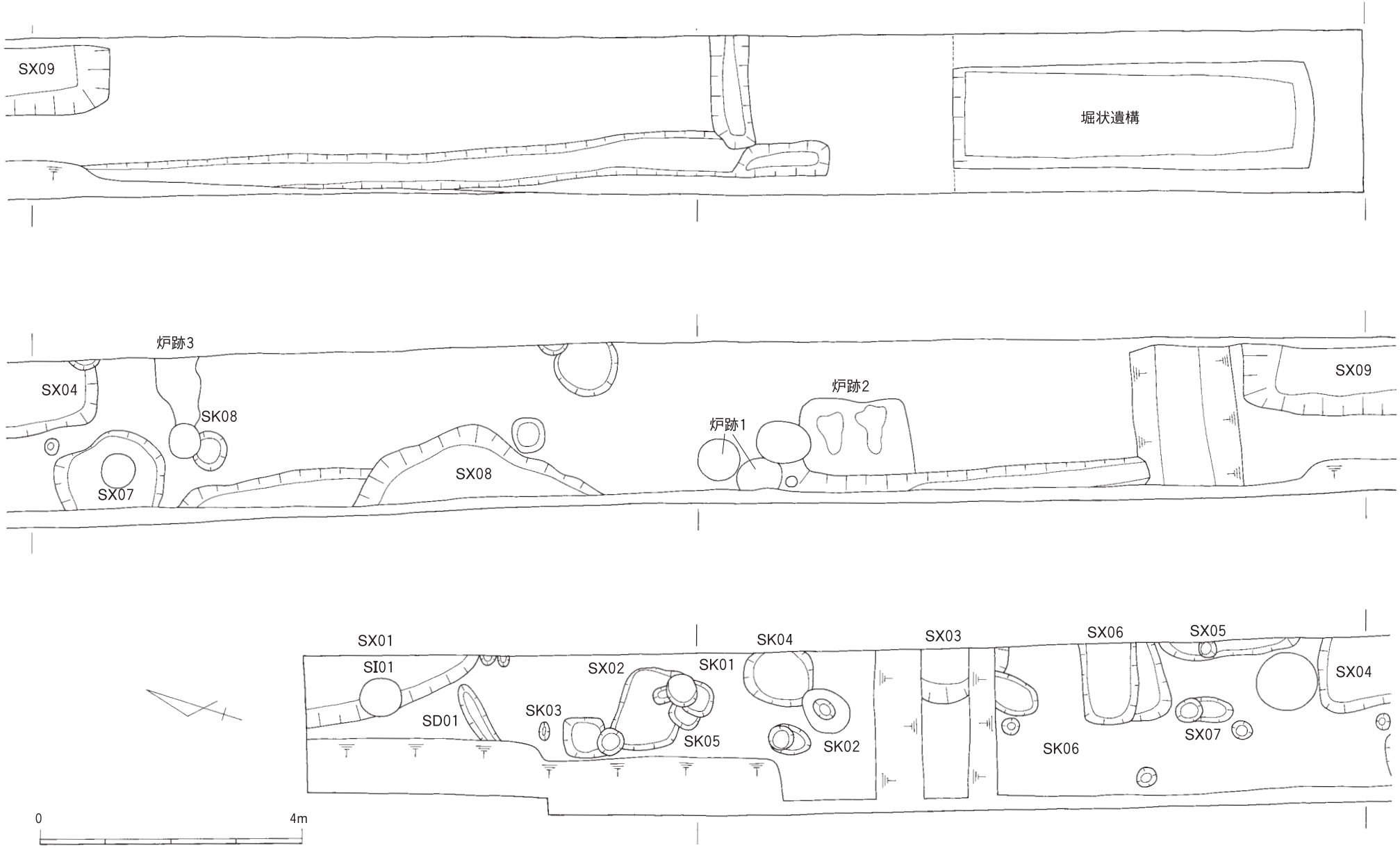


図版12　西地区近世の遺構⑥（堀状遺構）



※土層注記は図版３に対応。

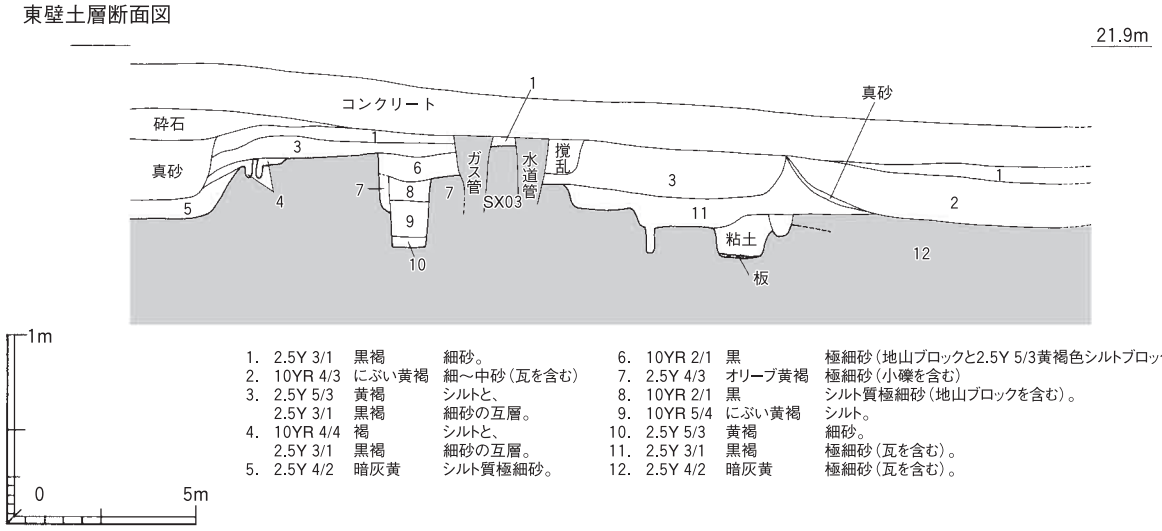



SX09
堀状遺構
炉跡3
SX04
SK08
SX07
SX08
炉跡1
炉跡2
SX09
SX01
SI01
SD01
SK03
SX02
SK01
SK05
SK04
SK02
SX03
SX06
SK06
SX05
SX07
SX04
0
4m

図版13 東地区平面図

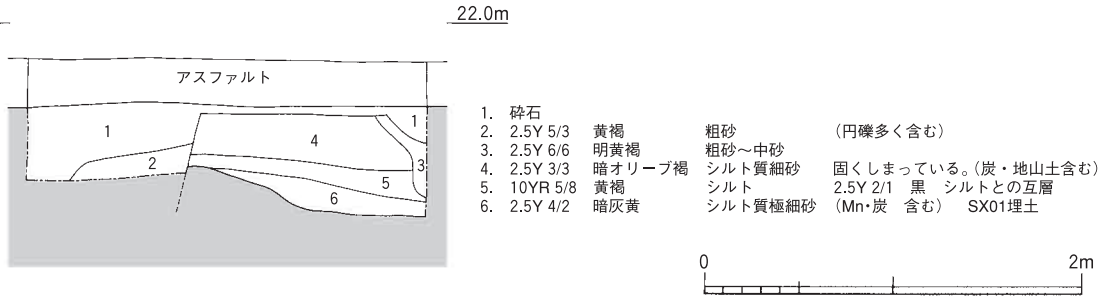
図版14　東地区近世の遺構①（東壁土層断面・落ち込み・堀状遺構）

東壁土層断面図



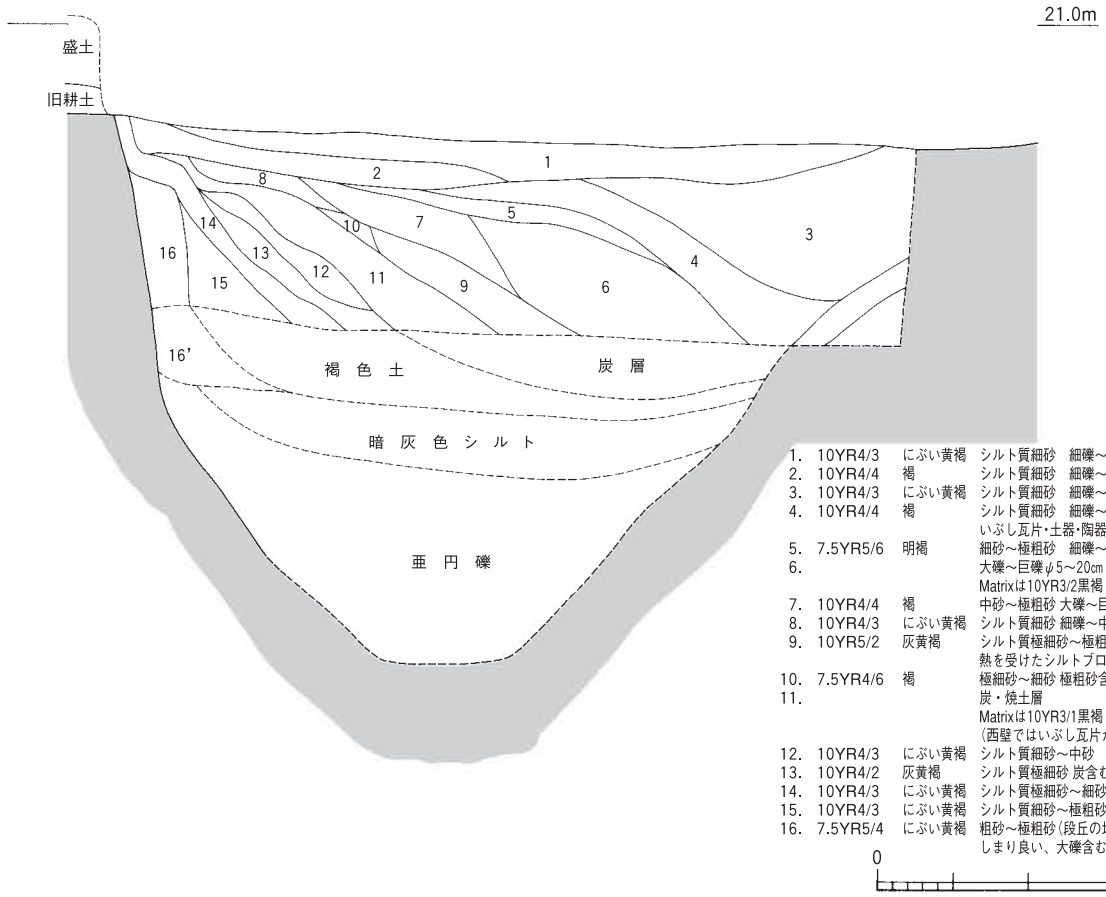
1. 2.5Y 3/1　黒褐　細砂。
2. 10YR 4/3　にぶい黄褐　細～中砂（瓦を含む）
3. 2.5Y 5/3　黄褐　シルトと、
   2.5Y 3/1　黒褐　細砂の互層。
4. 10YR 4/4　褐　シルトと、
   2.5Y 3/1　黒褐　細砂の互層。
5. 2.5Y 4/2　暗灰黄　シルト質極細砂。
6. 10YR 2/1　黒　極細砂（地山ブロックと2.5Y 5/3黄褐色シルトブロックを含む）。
7. 2.5Y 4/3　オリーブ黄褐　極細砂（小礫を含む）
8. 10YR 2/1　黒　シルト質極細砂（地山ブロックを含む）。
9. 10YR 5/4　にぶい黄褐　シルト。
10. 2.5Y 5/3　黄褐　細砂。
11. 2.5Y 3/1　黒褐　極細砂（瓦を含む）。
12. 2.5Y 4/2　暗灰黄　極細砂（瓦を含む）。

SX01　北壁



1. 砕石
2. 2.5Y 5/3　黄褐　粗砂　（円礫多く含む）
3. 2.5Y 6/6　明黄褐　粗砂～中砂
4. 2.5Y 3/3　暗オリーブ褐　シルト質細砂　固くしまっている。（炭・地山土含む）
5. 10YR 5/8　黄褐　シルト　2.5Y 2/1　黒　シルトとの互層
6. 2.5Y 4/2　暗灰黄　シルト質極細砂　（Mn・炭　含む）　SX01埋土

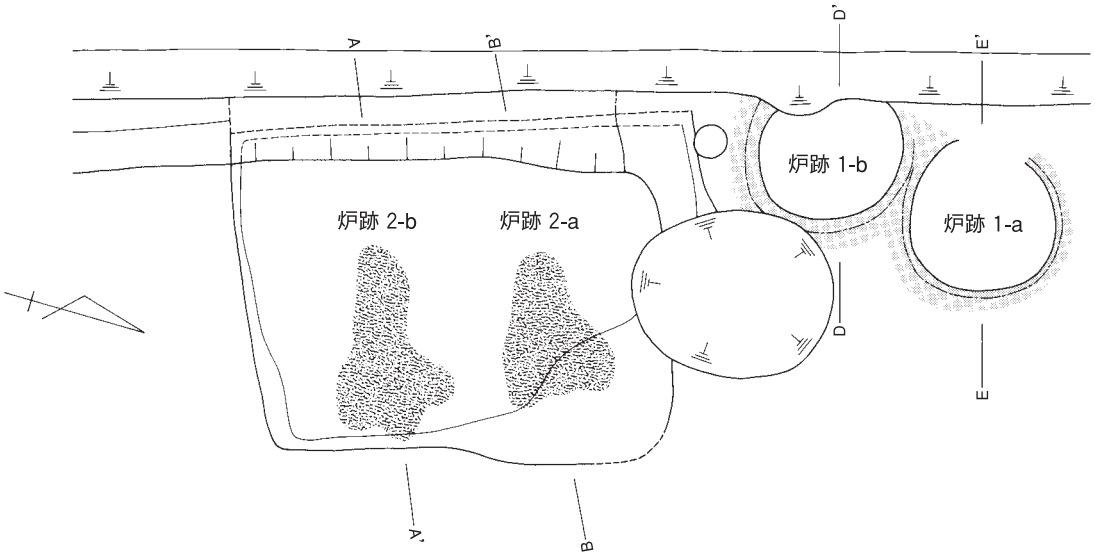
堀

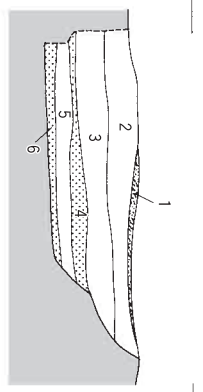


1. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質細砂　細礫～大礫含む、いぶし瓦片・陶器片・炭
2. 10YR4/4　褐　シルト質細砂　細礫～中礫含む
3. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質細砂　細礫～大礫φ5～15cm（河原石）多量、いぶし瓦片・陶器片・炭
4. 10YR4/4　褐　シルト質細砂　細礫～大礫φ5～15cm（河原石）、炭・焼土が層状に入る
   いぶし瓦片・土器・陶器片
5. 7.5YR5/6　明褐　細砂～極粗砂　細礫～大礫含む（地山土による整地）
6. 大礫～巨礫φ5～20cm（河原石）
   Matrixは10YR3/2黒褐 極細砂質シルト 炭・いぶし瓦片
7. 10YR4/4　褐　中砂～極粗砂 大礫～巨礫含む
8. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質細砂 細礫～中礫含む　炭・焼土含む
9. 10YR5/2　灰黄褐　シルト質極細砂～極粗砂 中礫～大礫含む　炭・焼土含む
   熱を受けたシルトブロックが層状に入る
10. 7.5YR4/6　褐　極細砂～細砂 極粗砂含む（焼土）
11. 炭・焼土層
    Matrixは10YR3/1黒褐 シルト質細砂　中礫・大礫含む
    （西壁ではいぶし瓦片が多量に折り重なるようにして出土）
12. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質細砂～中砂　中礫・大礫含む 炭・陶器片
13. 10YR4/2　灰黄褐　シルト質極細砂 炭含む　被熱シルトブロックが層状に入る
14. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質極細砂～細砂　極粗砂～中礫含む　炭・陶器片
15. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質細砂～極粗砂　中礫・大礫含む　炭
16. 7.5YR5/4　にぶい黄褐　粗砂～極粗砂（段丘の地山ブロック）とシルトブロックがパッチ状
    しまり良い、大礫含む

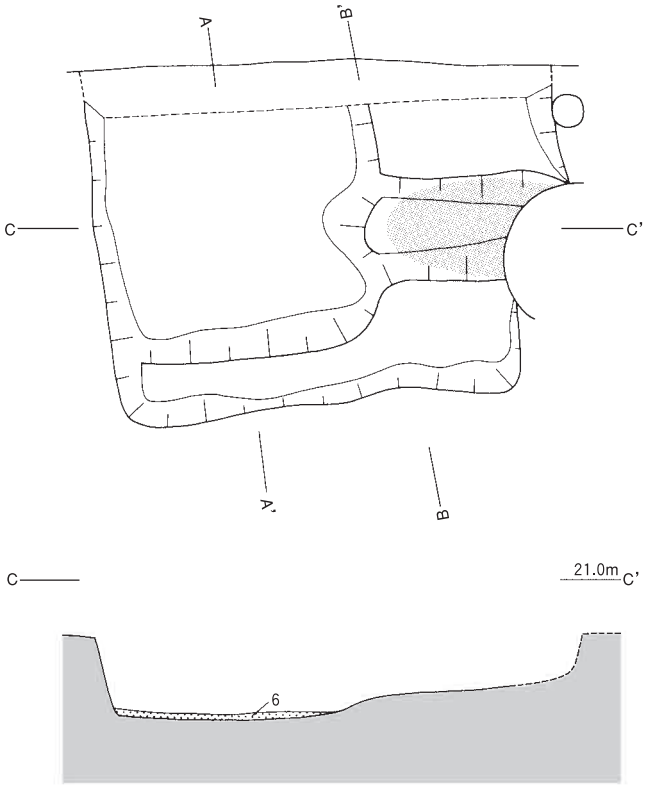
図版15　東地区近世の遺構②（炉跡）

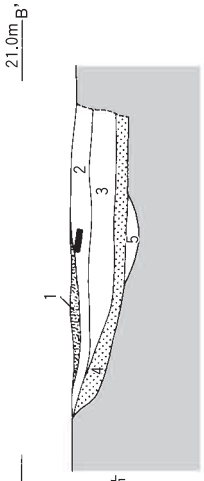
炉跡



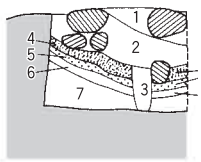


1. 炭・焼土層 細礫～中礫含む
2. 10YR4/4 褐 極細砂～細砂 細礫～大礫含む
3. 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂～細砂 極粗砂～大礫含む
4. 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質細砂 細礫～中礫含む 焼土・炭層
5. 7.5Y5/8 明褐 極細砂質シルト
6. 10YR4/2 灰黄褐 細砂質シルト質 極粗砂含む 焼土・炭層 いぶし瓦片

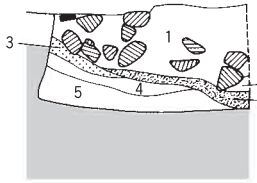




1. 炭・焼土層 粗砂～細礫含む
2. 10Y5/3 にぶい黄褐 極細砂～細砂 細礫～中礫含む いぶし瓦片
3. 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質極細砂～細砂 極粗砂～中礫含む
4. 10YR4/3 にぶい黄褐 シルト質細砂 細礫～中礫含む 焼土・炭層
5. 7.5Y5/8 明褐 極細砂質シルト



1. 2.5Y3/1　黒褐　細礫混じり細砂 中礫・大礫含む
2. 2.5Y5/3　黄褐　シルト質細砂 大礫含む 炭
3. 7.5YR4/2　灰褐　細砂質シルト 細礫含む 炭・焼土
4. 2.5Y2/1　黒　コースシルト（炭層）
5. 5YR5/6　明黄褐　焼土
6. 7.5YR3/3　暗褐　シルト質極細砂（赤変層）
7. 7.5YR4/3　にぶい黄褐　シルト質細砂～粗砂 中礫含む 炭・焼土

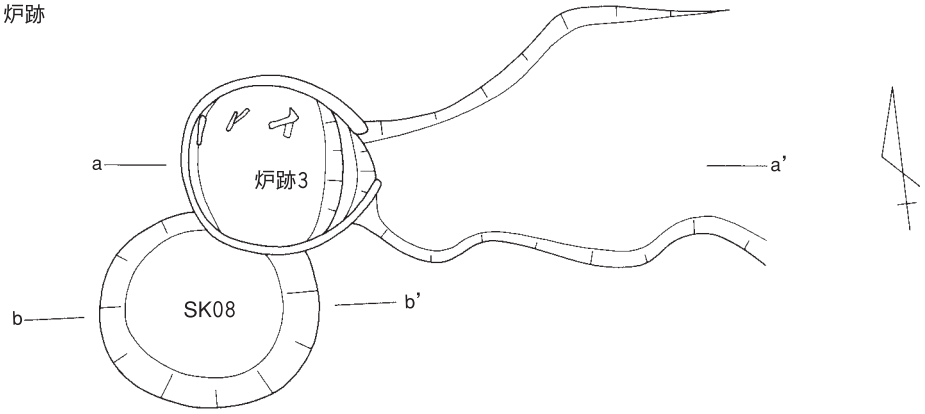


1. 10YR3/3　暗褐　細礫混じりシルト質細砂 大礫・巨礫含む 炭・焼土・瓦片
2. 2.5Y2/1　黒　コースシルト（炭層）
3. 5YR5/6　明黄褐　焼土
4. 7.5YR3/2　黒褐　シルト質極細砂 炭
5. 10YR4/3　にぶい黄褐　シルト質細砂～粗砂 中礫含む 炭・焼土
6. 2.5Y4/4　オリーブ褐　シルト質極細砂～細砂 細礫含む

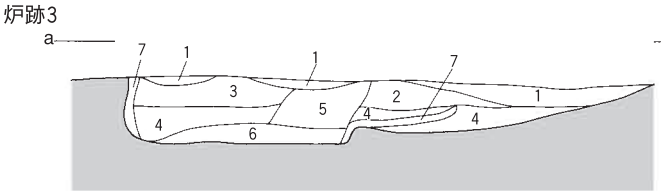
0　2m

図版16　東地区近世の遺構③（炉跡・埋甕）

炉跡

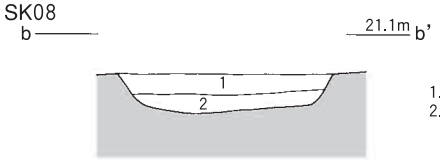


炉跡3



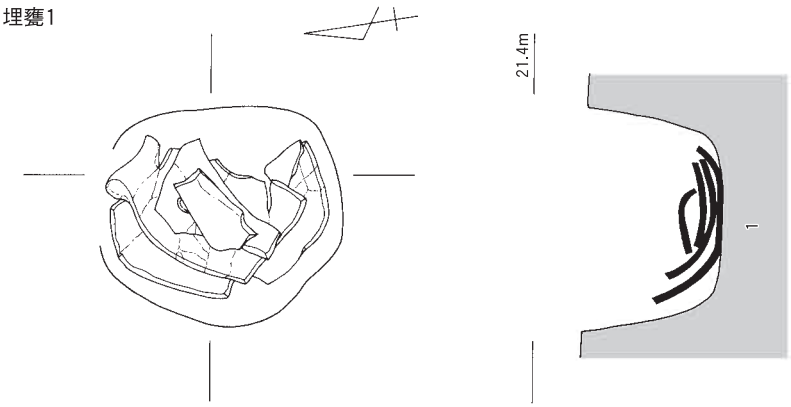
1. 7.5Y 2/2　オリーブ黒　シルト質極細砂　（瓦　含む）
2. 7.5Y 4/3　暗オリーブ　シルト
3. 2.5Y 5/3　黄褐　シルト質極細砂　（焼土　含む）
4. 炭　層
5. 10YR 4/6　褐　細砂　（焼土・炭　含む）
6. 炭層と　10YR 1.7/1　黒　シルト層の互層
7. 焼土層　（壁）

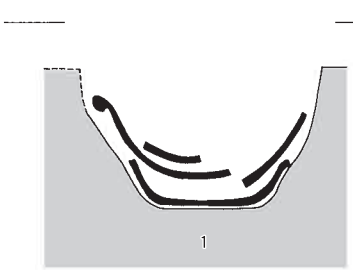
SK08



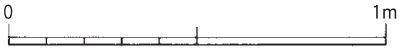
1. 7.5Y 4/3　暗オリーブ　シルト質極細砂　焼土・炭　混じり
2. 焼土・炭層

埋甕1

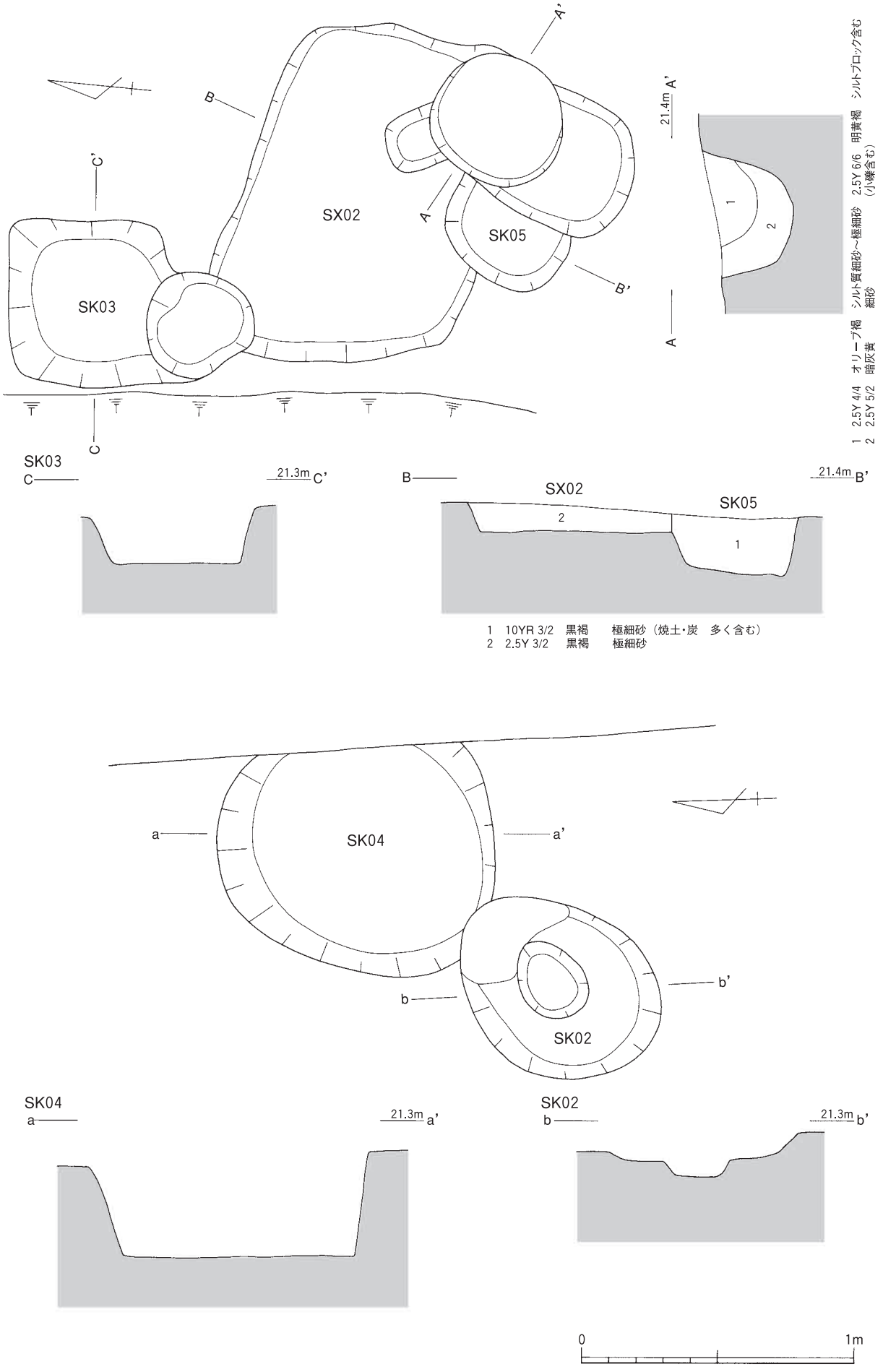




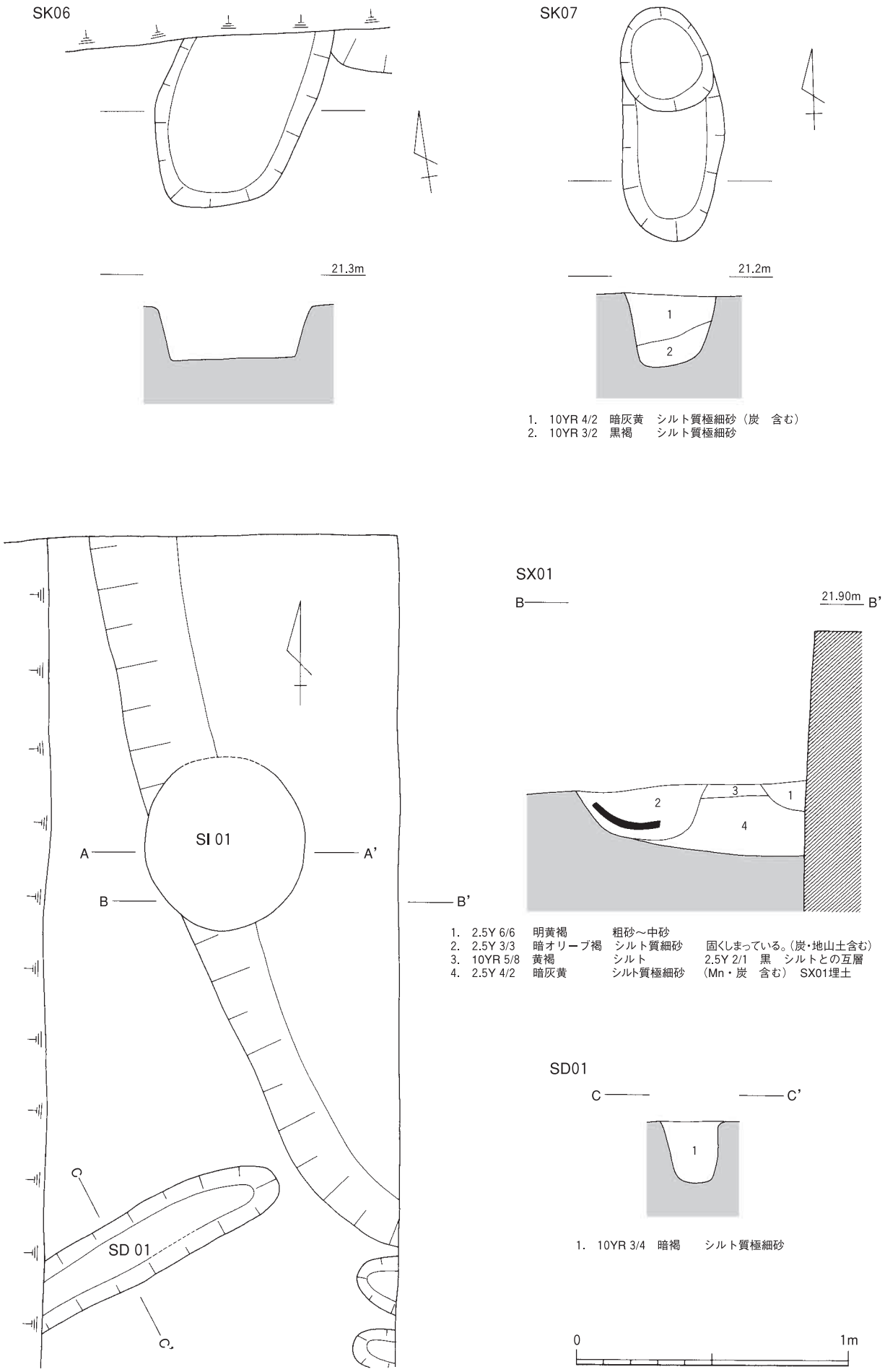
1. 2.5Y 3/3　暗オリーブ褐　シルト質極細砂



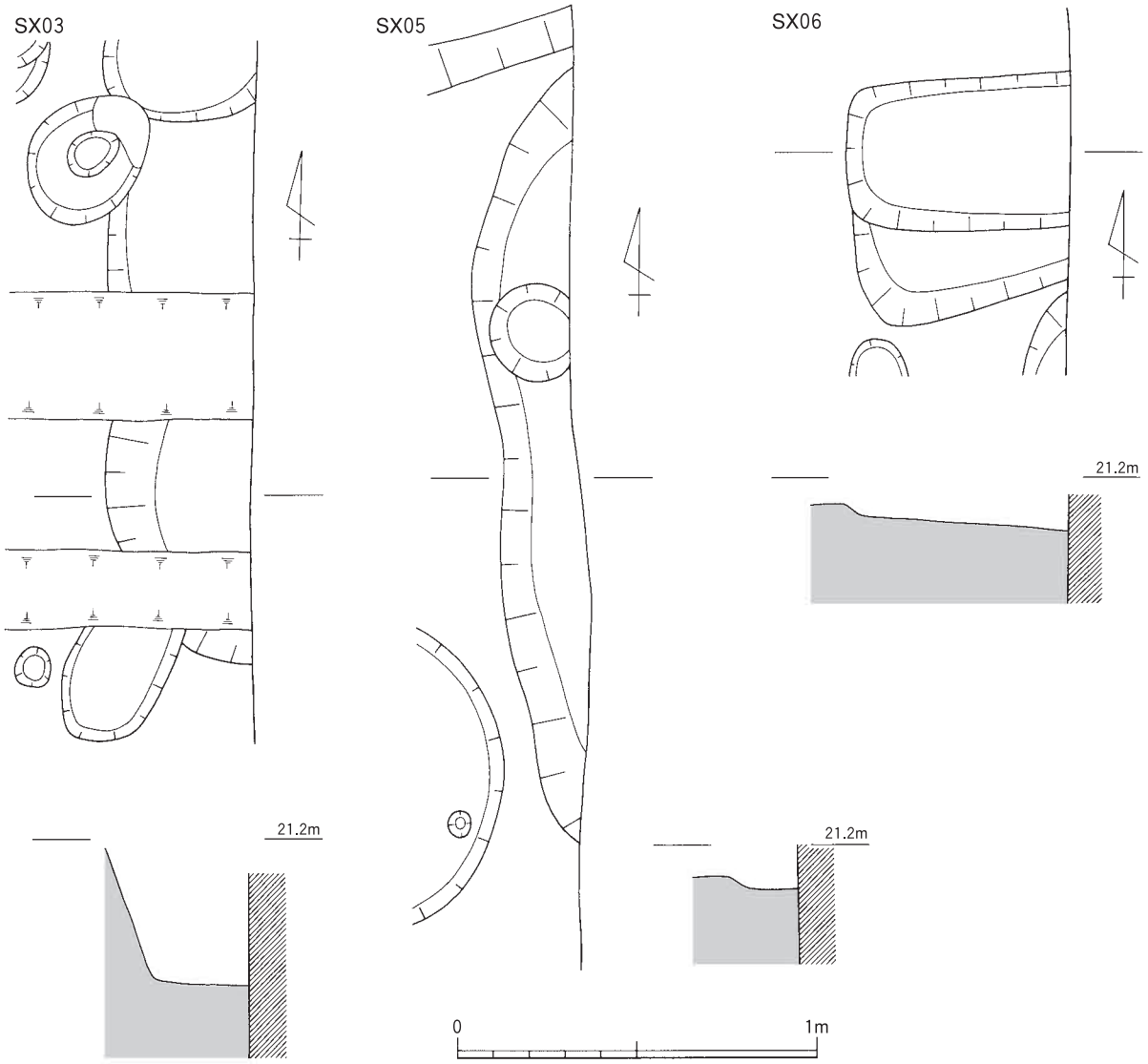
図版17　東地区近世の遺構④（土坑・落ち込み）

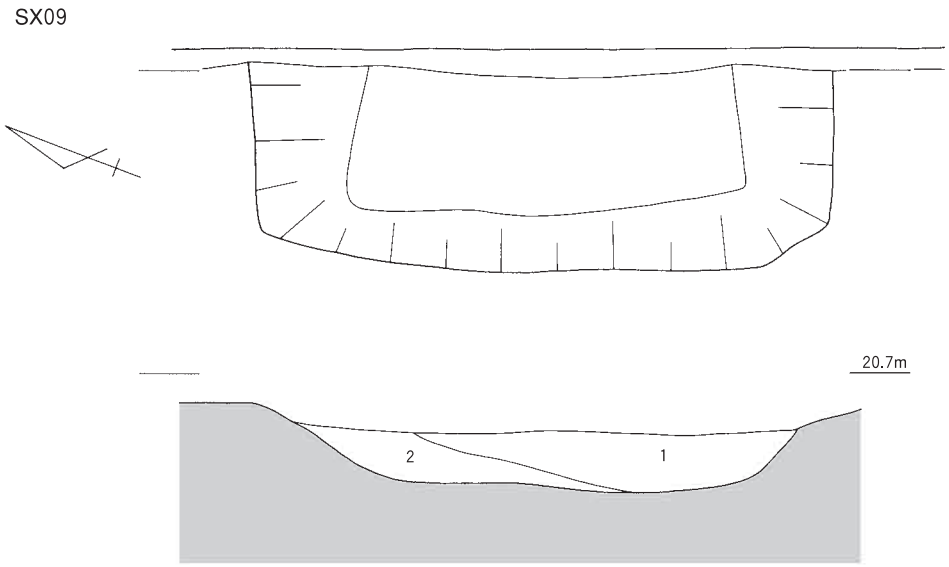


図版18　東地区近世の遺構⑤（土坑・溝・落ち込み）



図版19　東地区近世の遺構⑥（落ち込み）

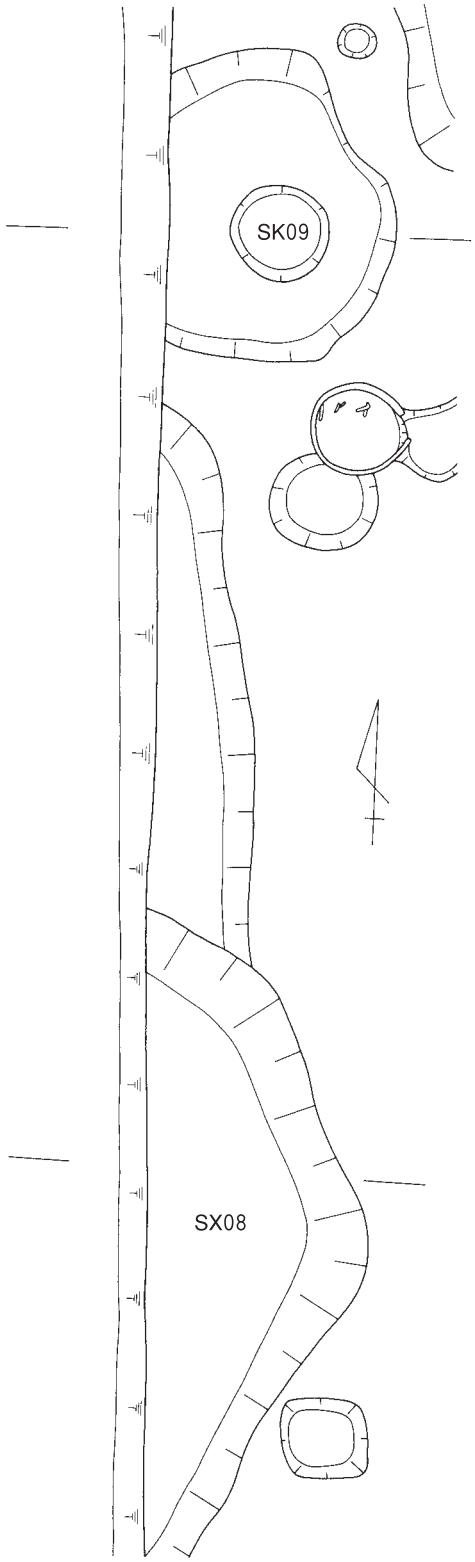




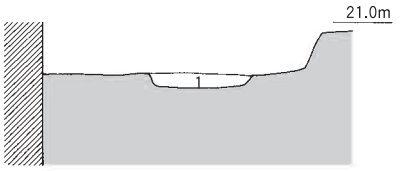
1　大礫　φ5～8㎝　密集　マトリックス　5YR 3/1　黒褐シルト　いぶし瓦片　陶器片多数　炭
2　7.5YR 7/4　にぶい橙　粗砂とシルトブロック　　炭と細礫含む

0　2m

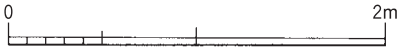
図版20　東地区近世の遺構⑦（落ち込み）

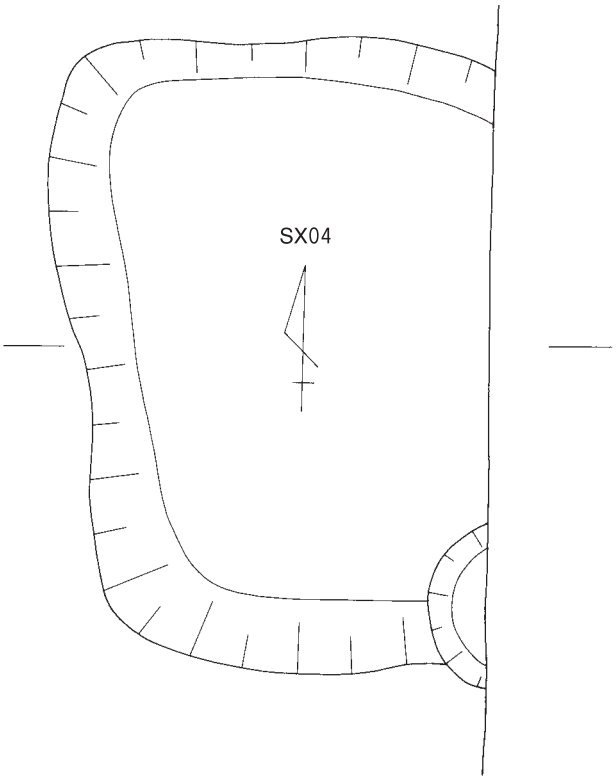


SK09

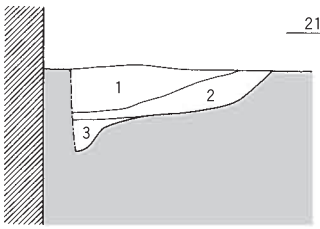


1.　10YR 3/2　黒褐　　中砂～細砂



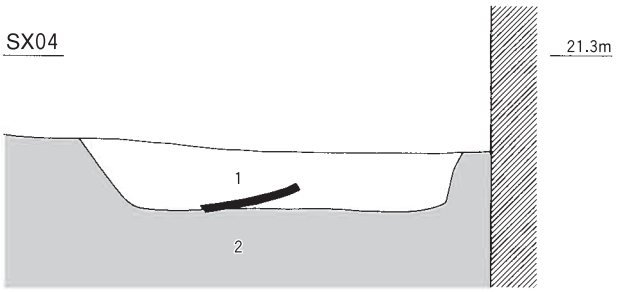


SX08

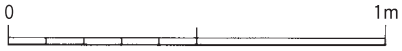


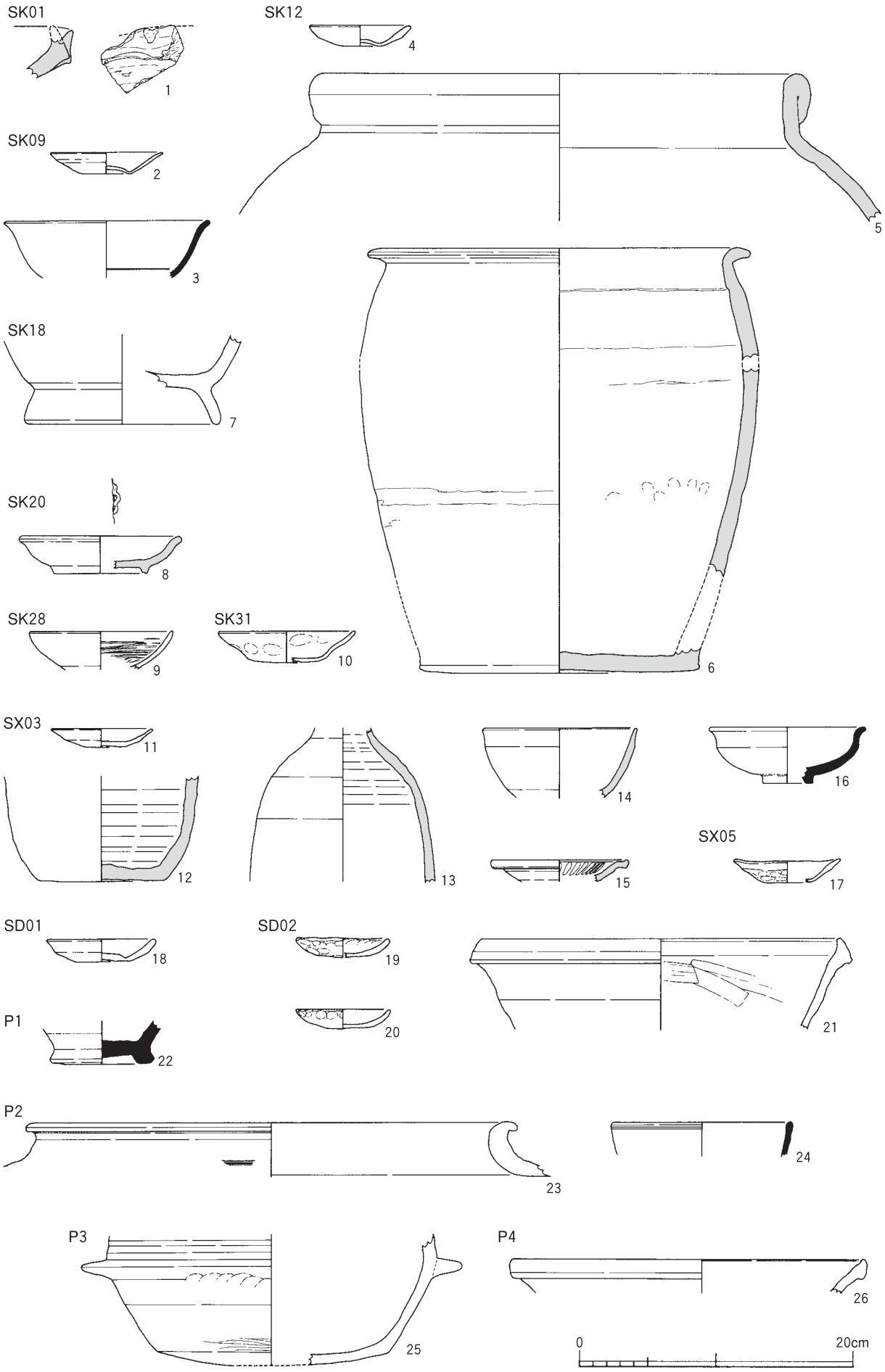
1.　2.5Y 4/2　暗灰黄　　極細砂
2.　2.5Y 3/3　暗オリーブ褐　極細砂　炭含む
3.　2.5Y 3/2　黒褐　　極細砂

SX04

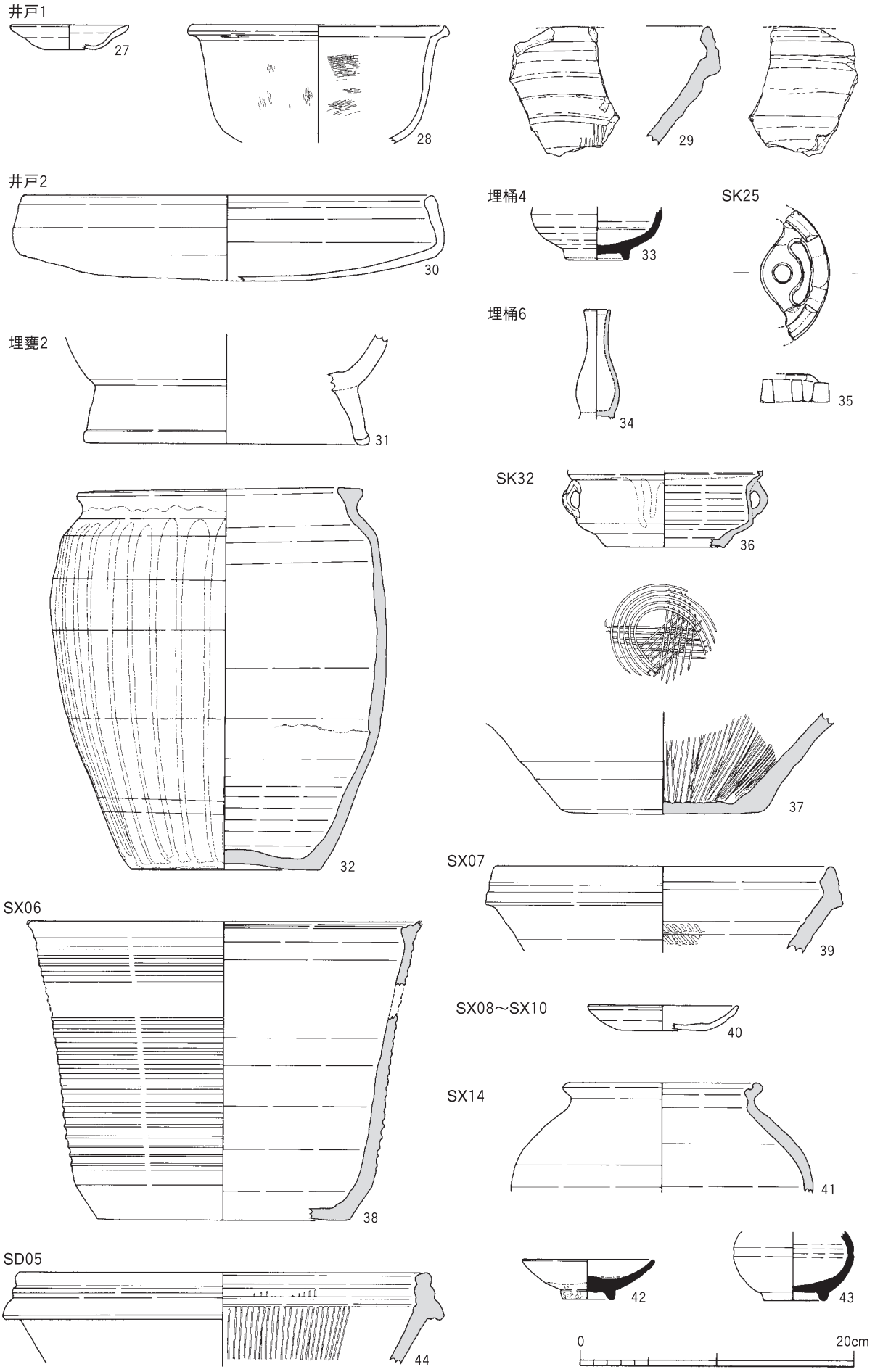


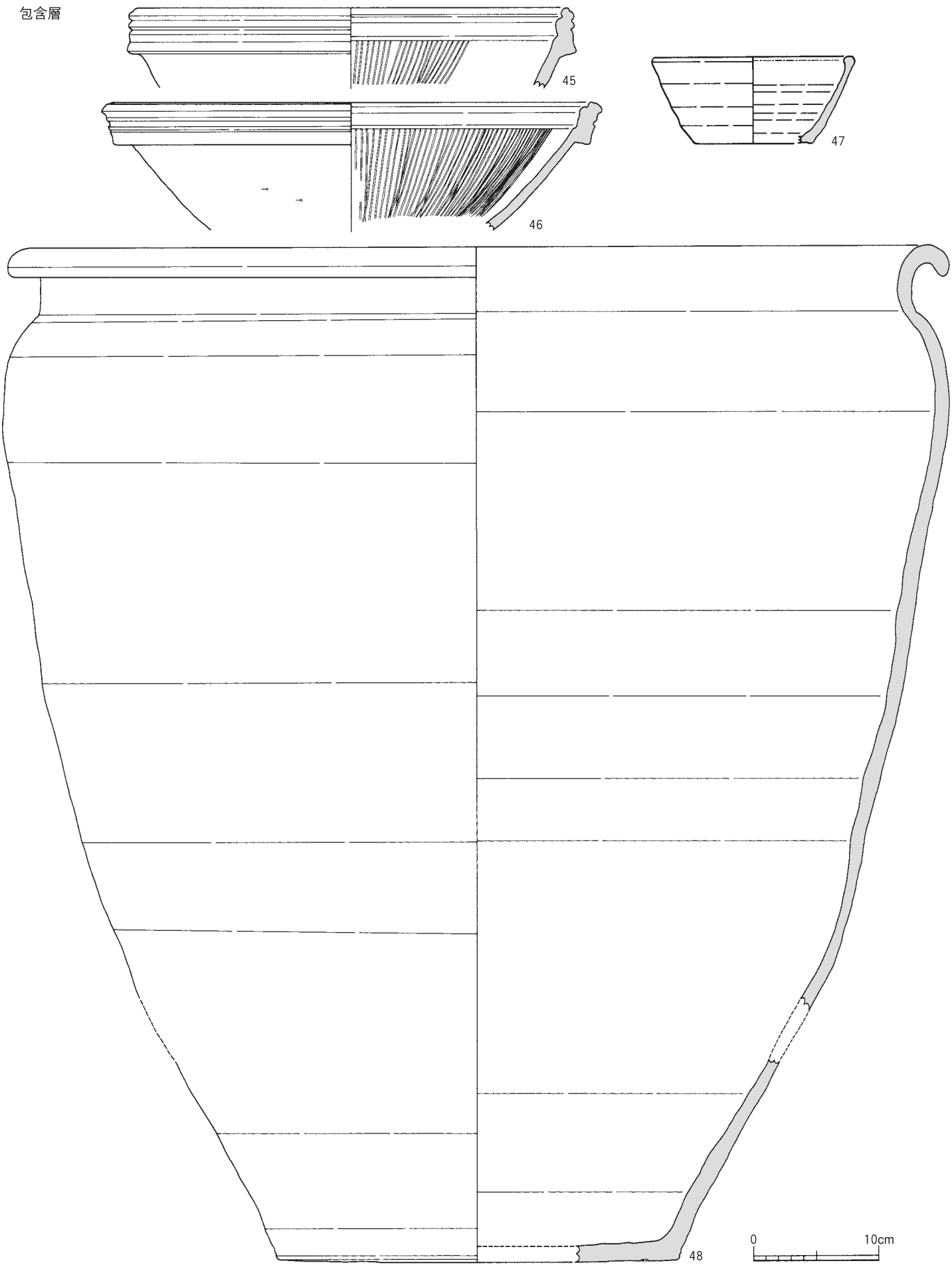
1.　10YR 3/2　黒褐　　細砂　（瓦・礫　多く含む）
2.　10YR 6/6　明黄褐　　シルト



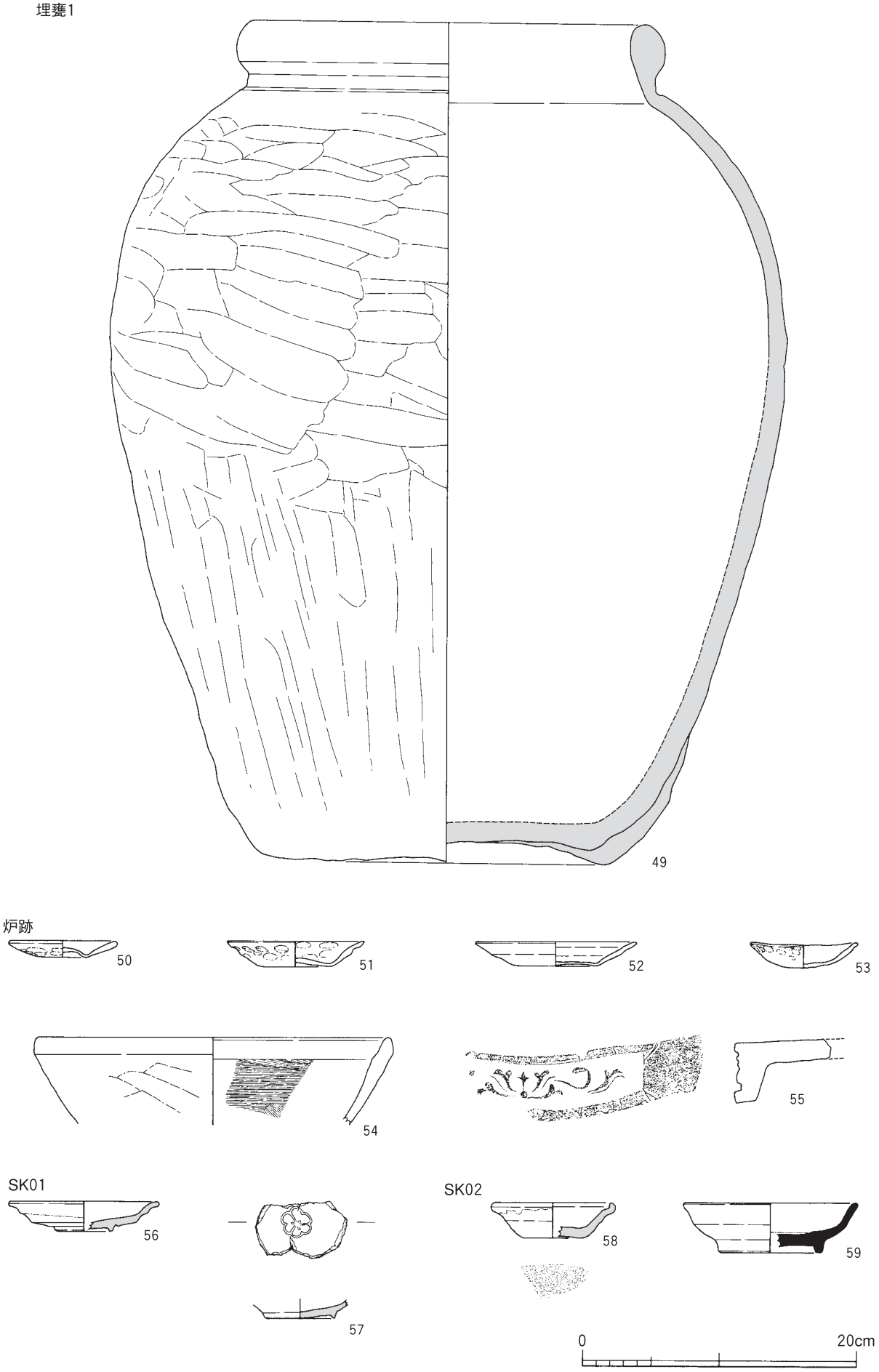

SK01
1
SK09
2
3
SK12
4
5
6
SK18
7
SK20
8
SK28
9
SK31
10
SX03
11
12
13
14
15
16
SX05
17
SD01
18
SD02
19
20
21
P1
22
P2
23
24
P3
25
P4
26
0
20cm

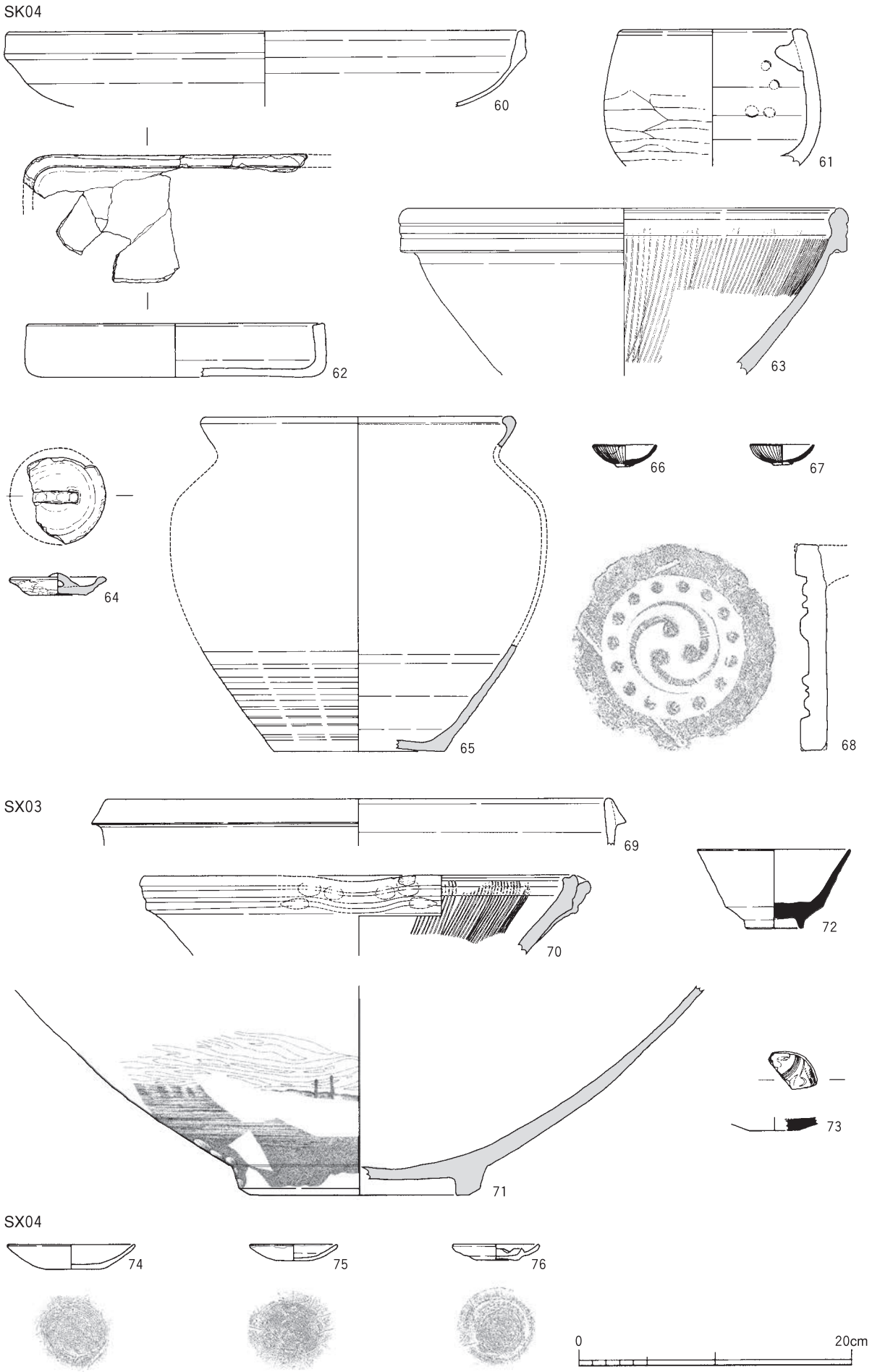
図版22　西地区近世遺構出土遺物①



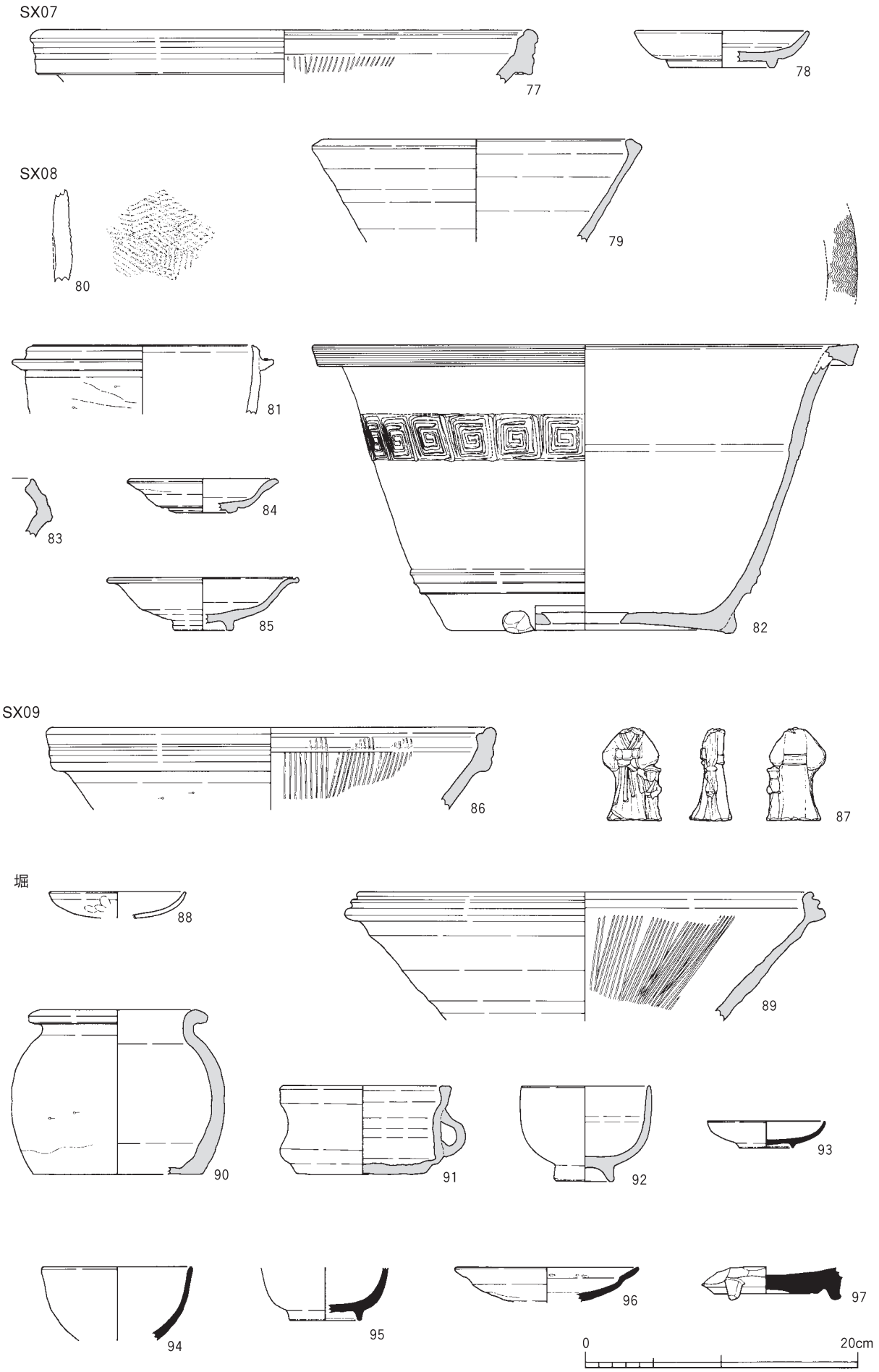

包含層
45
46
47
48
0
10cm

図版24　東地区近世遺構出土遺物①



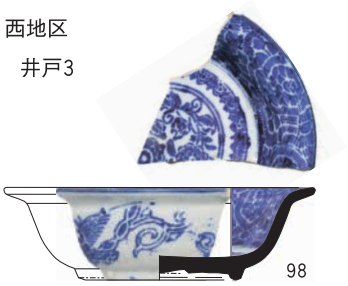

SK04
60
61
62
63
64
65
66
67
68
SX03
69
70
71
72
73
SX04
74
75
76
0
20cm

図版26 東地区近世遺構出土遺物③



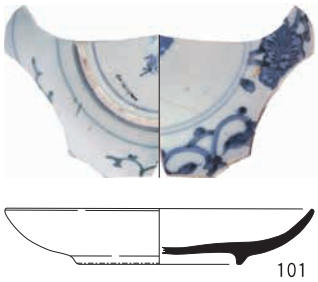
西地区

井戸3

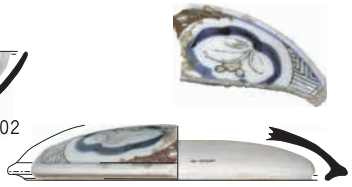


SK23

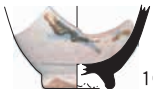
SX06

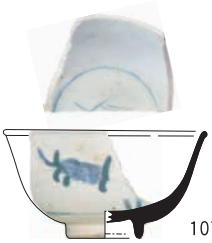


SX08～SX10

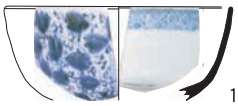


SX14

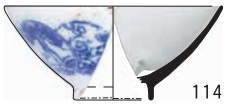


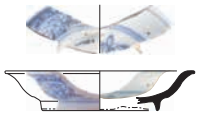


SD05



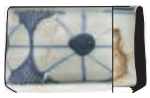
包含層

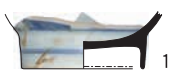


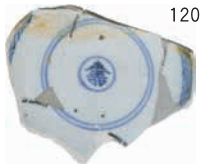


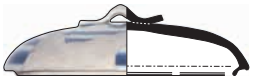
東地区

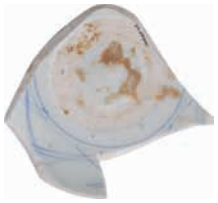
SK04





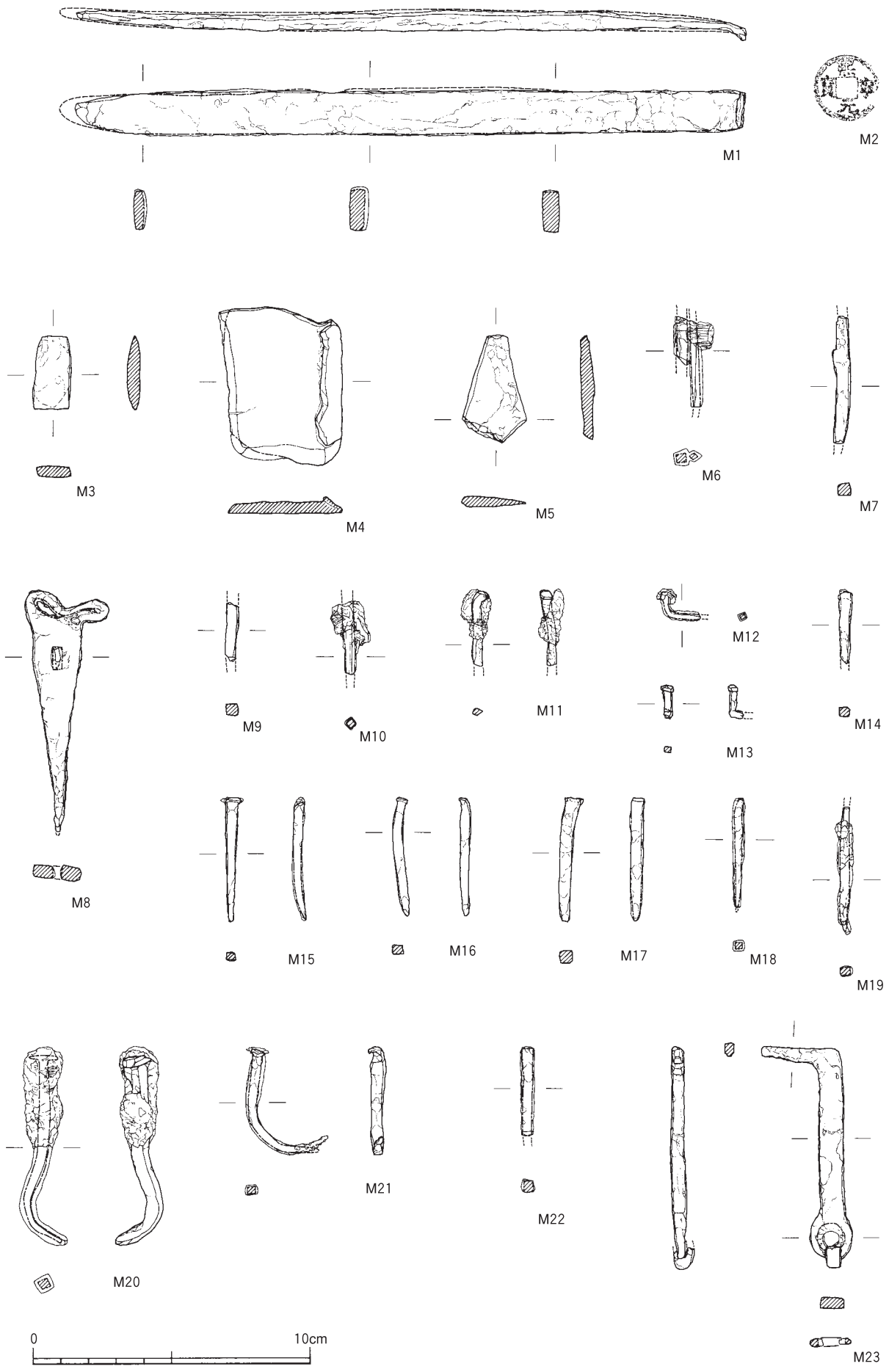




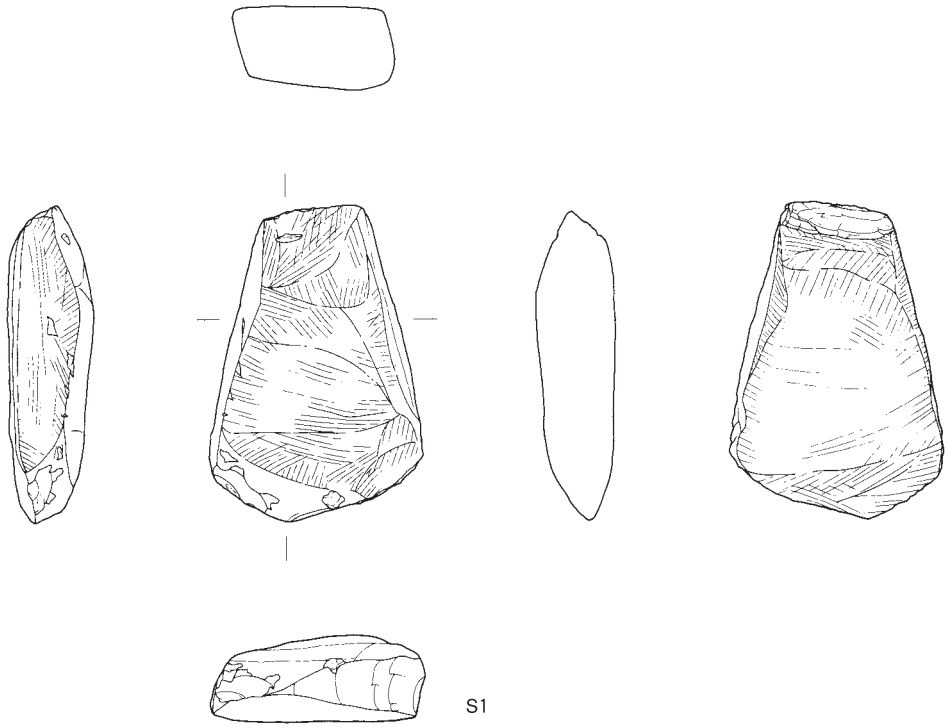


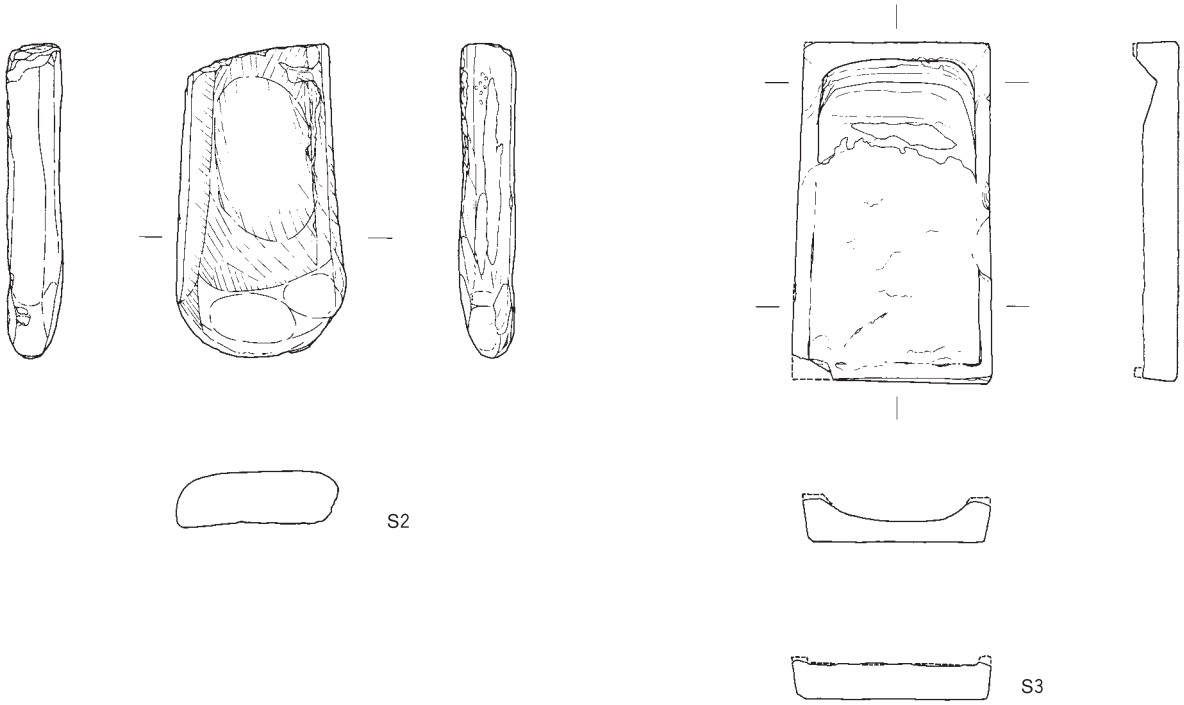
0 10cm

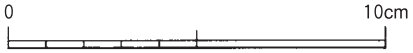
図版28 西・東地区出土染付磁器②


M1
M2
M3
M4
M5
M6
M7
M8
M9
M10
M11
M12
M13
M14
M15
M16
M17
M18
M19
M20
M21
M22
M23
0
10cm

図版30　西地区出土石製品







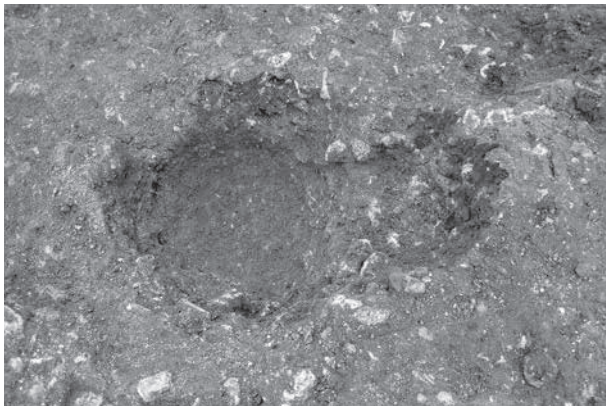
写真図版

西地区 SX14・SD05

西地区調査区全景（南から）

西地区調査区全景（北から）

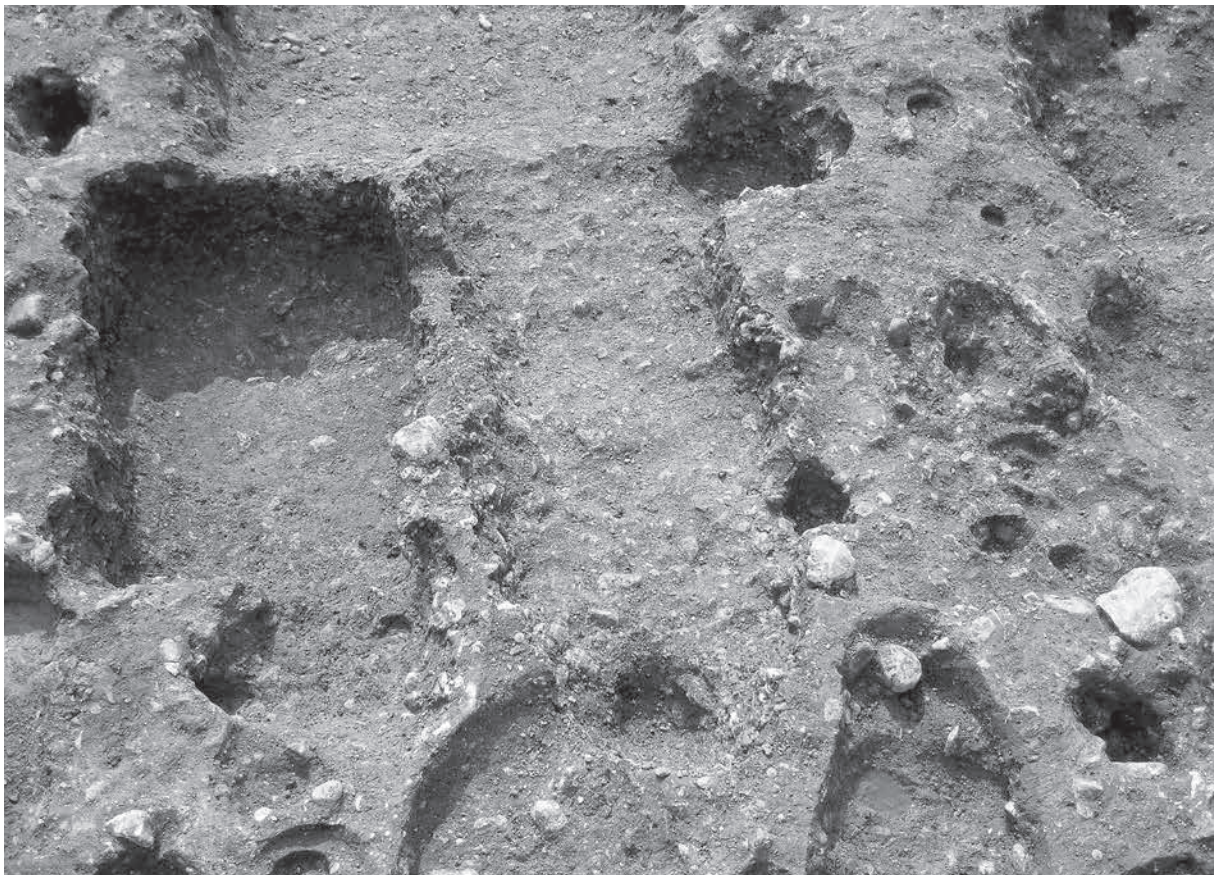
SK01～SK03土層断面（西から）



SK01（西から）

SK04土層断面（南から）

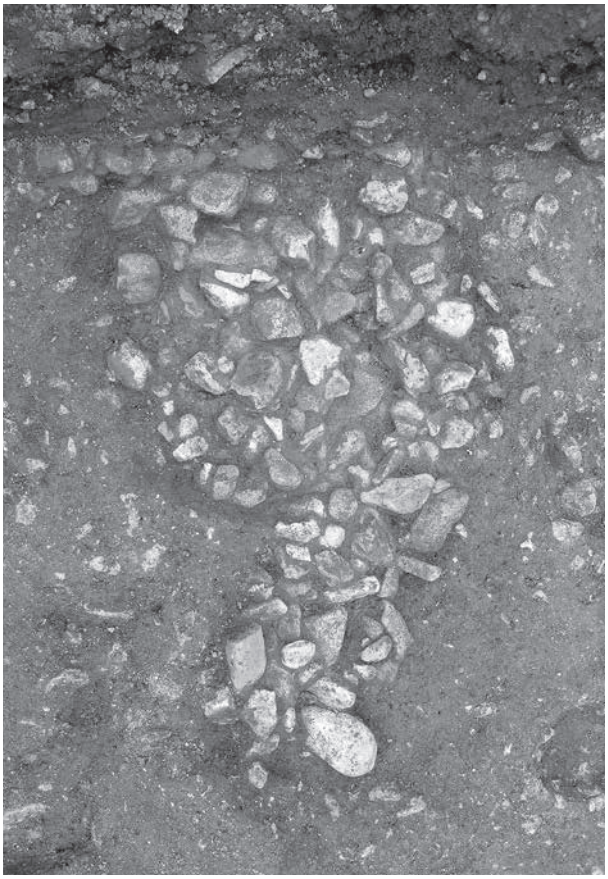
SK05・SK06（南から）



SK12・SK15（北から）

SK12・SK15土層断面（南から）

SK26（北から）

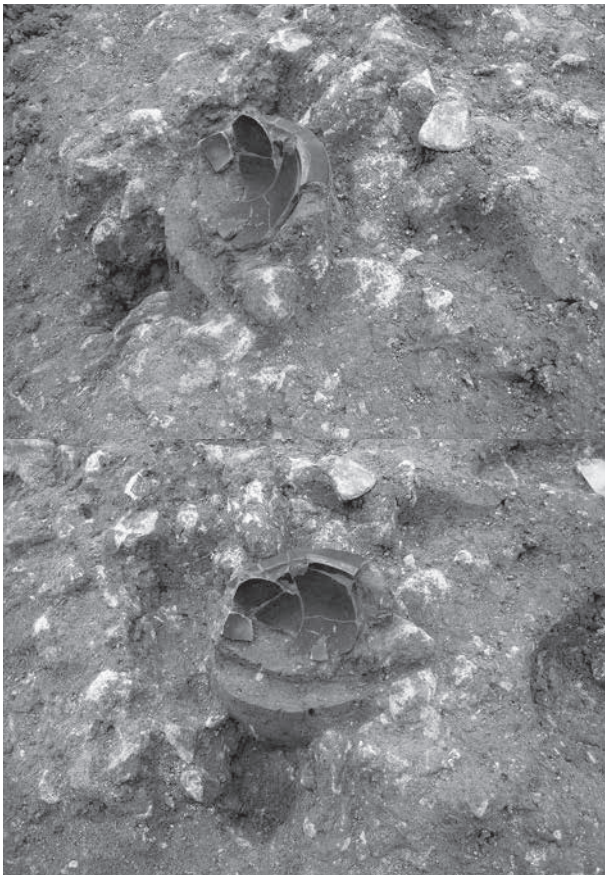


SK17・SK18（東から）

SX01～SX04（南から）

P1（北から）

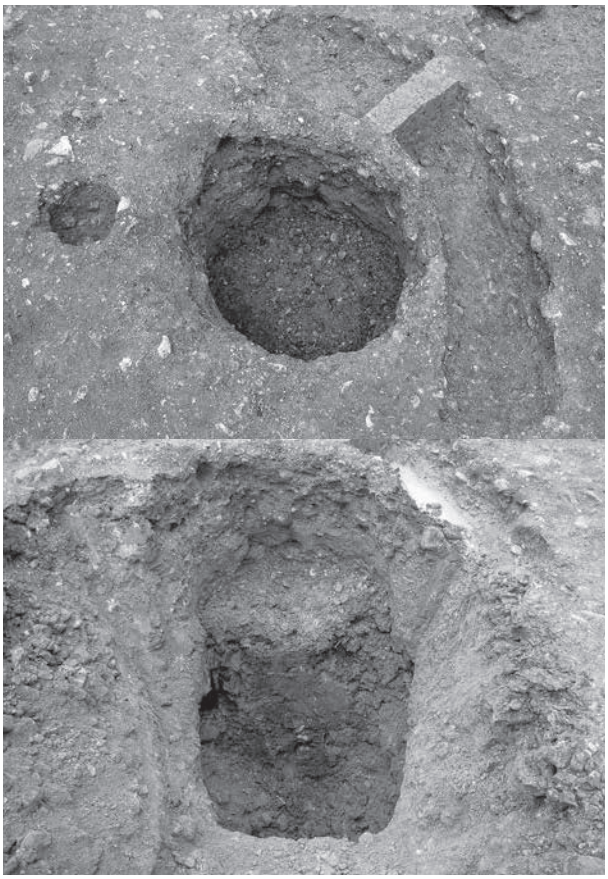
P5（北から）



P3瓦質土器出土状況（上：南から・下：西から）

井戸１（西から）

井戸２（東から）



井戸３・断ち割り状況（北から）

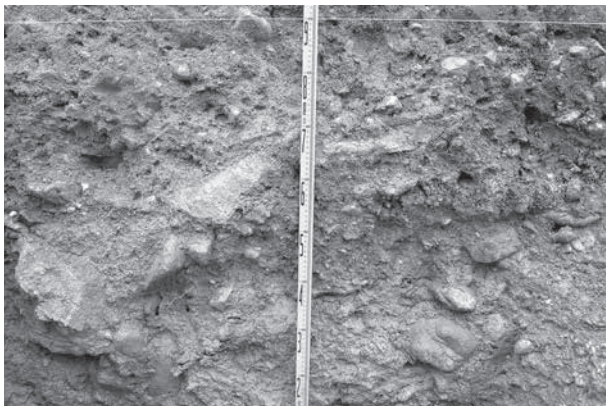
埋甕１（東から）

埋桶１底板検出状況（南西から）

埋桶２土層断面（南から）

埋桶４～埋桶６（東から）

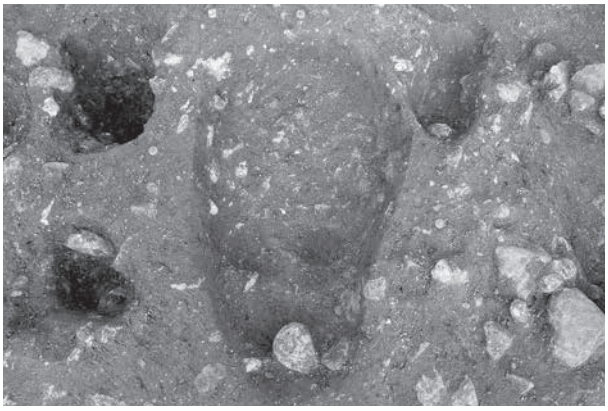
埋桶５・埋桶６断ち割り状況（南から）



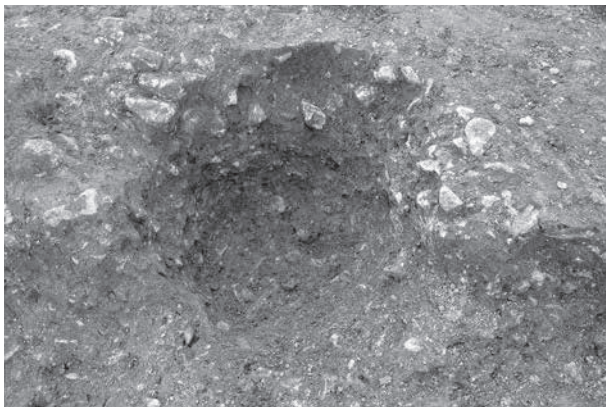
埋桶３土層断面（東から）

埋桶４断ち割り状況（南から）

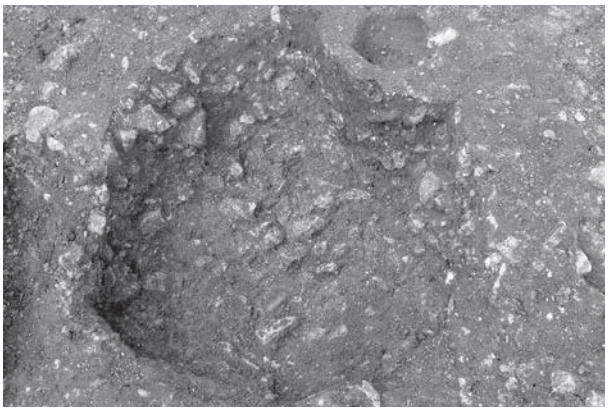
埋桶７・埋桶８（北から）



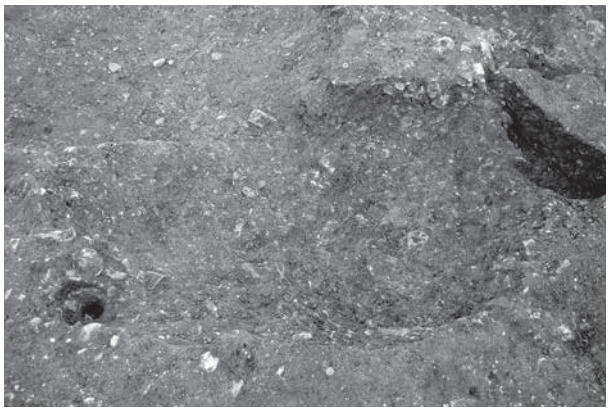
SK09（南から）



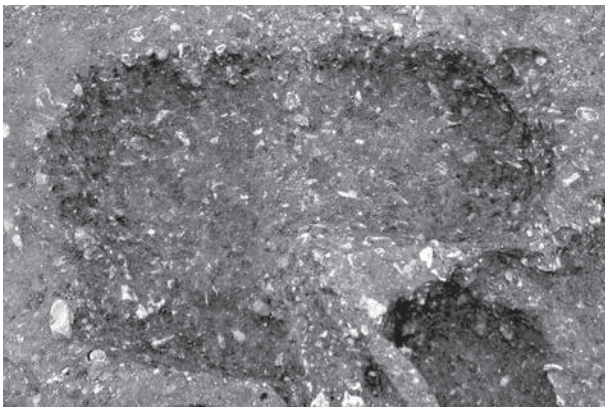
SK16（東から）



SK19（南から）



SK25（西から）



SK29・SK30（東から）

SX06・SX07（東から）

SX08・SX09（北東から）

SX14・井戸３（東から）

井戸３・SX14・SD05（北から）

SX14（西から）

SX14（東から）

SD05（南から）

堀状遺構（南から）

堀状遺構土層断面（西から）

1～3区全景（北から）

1～3区全景（南から）

炉跡１・２検出状況
（西から）

炉跡１完掘状況
（西から）

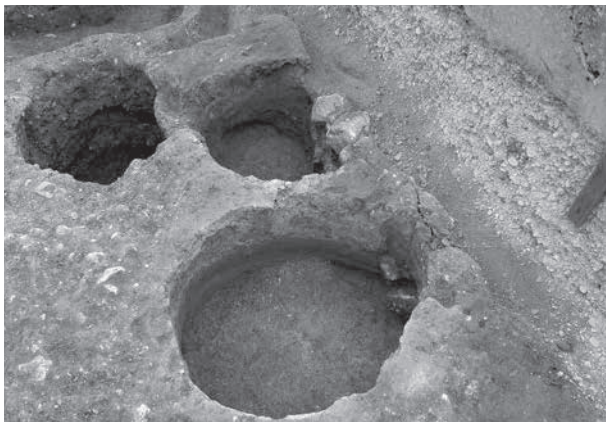
炉跡２完掘状況
（東から）

炉跡１検出状況（西から）

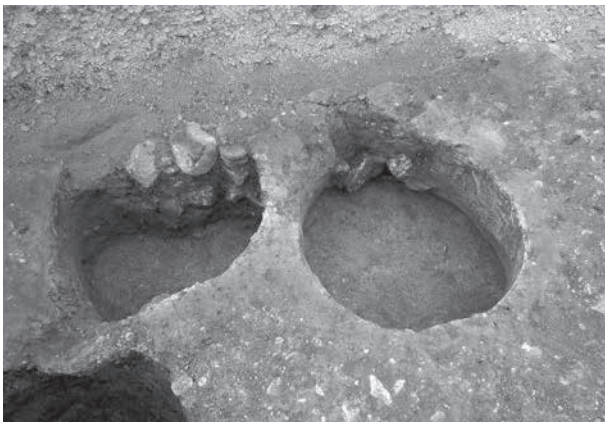
炉跡１掘削状況（東から）

炉跡1−a断面北壁（北から）

炉跡1−b断面北壁（北から）



炉跡１完掘状況（北から）



炉跡１完掘状況（東から）

炉跡1−a断ち割り断面（北から）

炉跡1−b断ち割り断面（南から）

炉跡2-a断面北壁上層（北から）

炉跡2-b断面南壁上層（南から）

炉跡2-a断面北壁焼土面中層（北から）

炉跡2-b断面南壁焼土面中層（南から）

炉跡２焼土面（南から）

炉跡２焼土面下層（東から）

炉跡2-b下層焼土断面（南東から）

炉跡２西壁断面（東から）

堀跡東壁断面（西から）

堀跡東壁断面（西から）

堀跡深掘り断面（西から）

堀跡深掘り断面（南から）

堀跡掘削状況（北から）

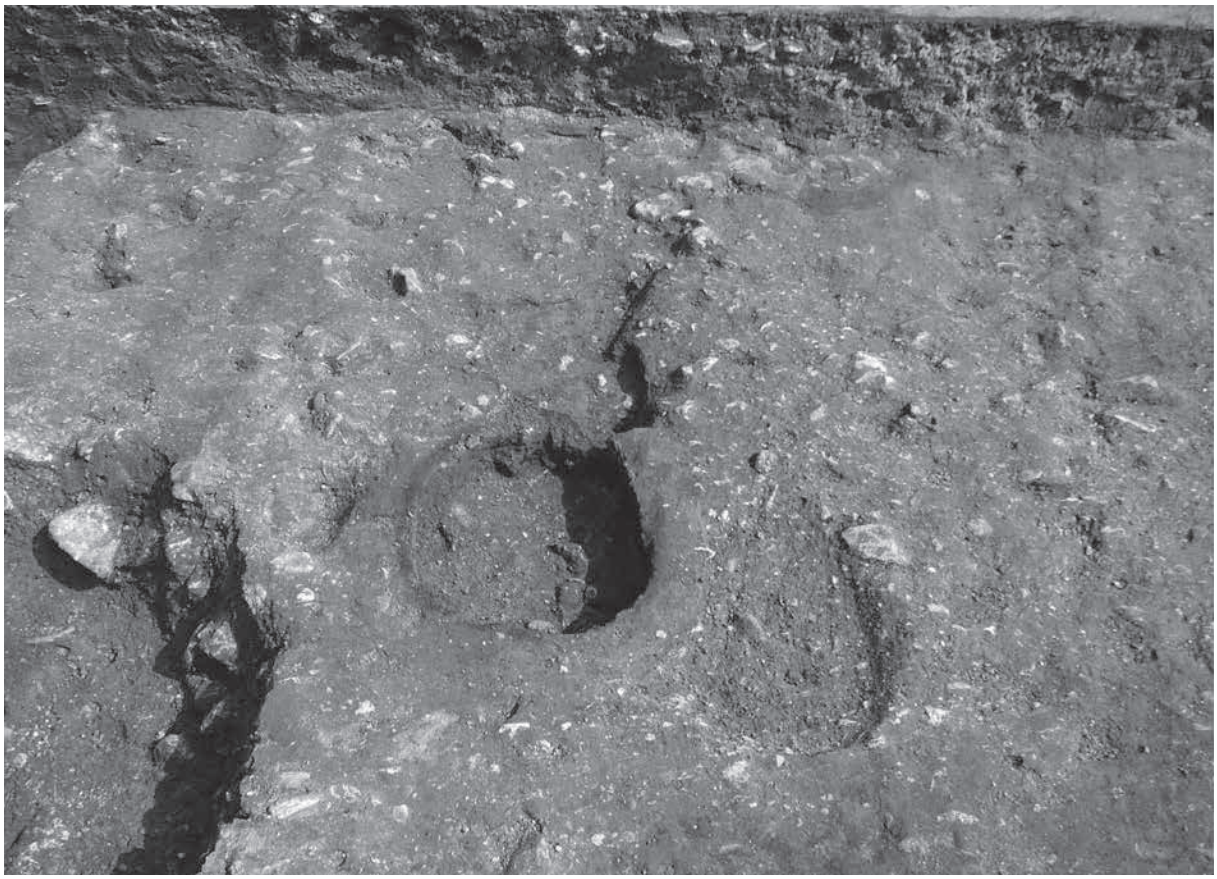
SX09断面（北西から）

遺構検出状況（北から）

機械掘削（北から）

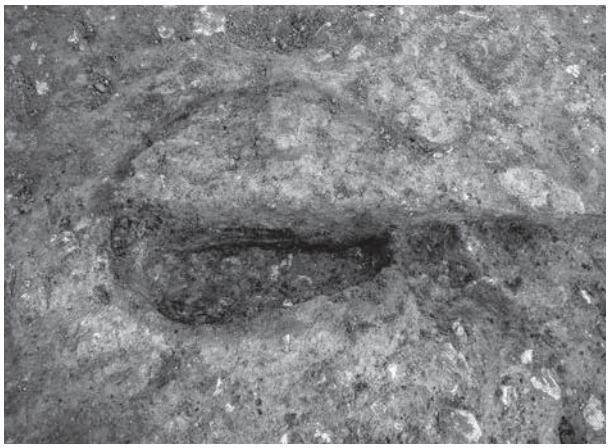
東地区４～６区全景（南から）

東地区４～６区全景（北から）

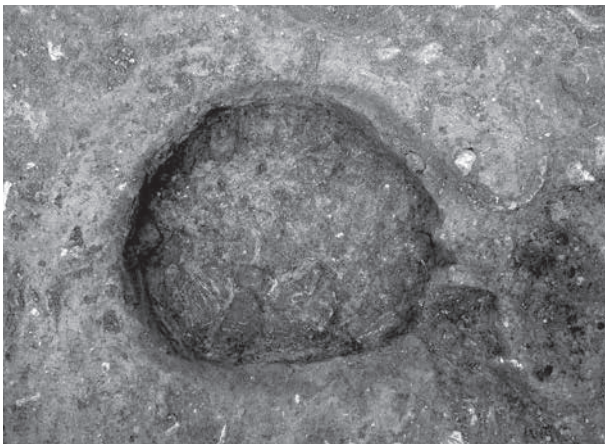


炉跡３周辺（西から）

炉跡３（南から）

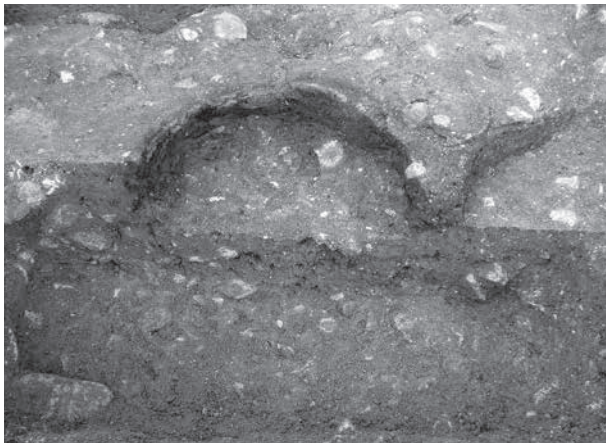


炉跡３堆積状況（南から）

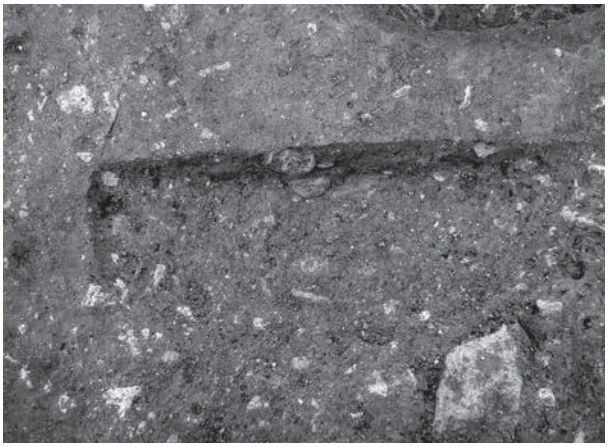


炉跡３（南から）

炉跡３（東から）

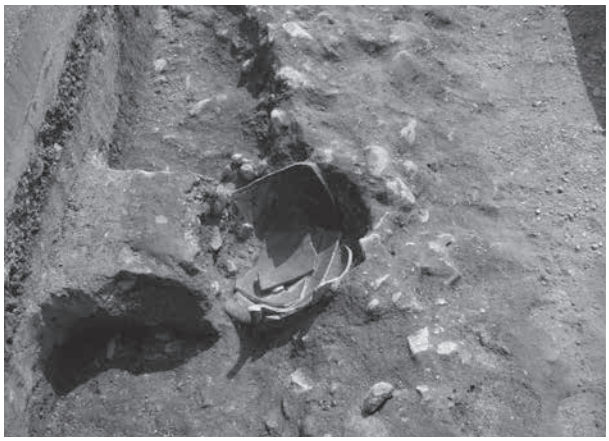


炉跡３断ち割り（南から）

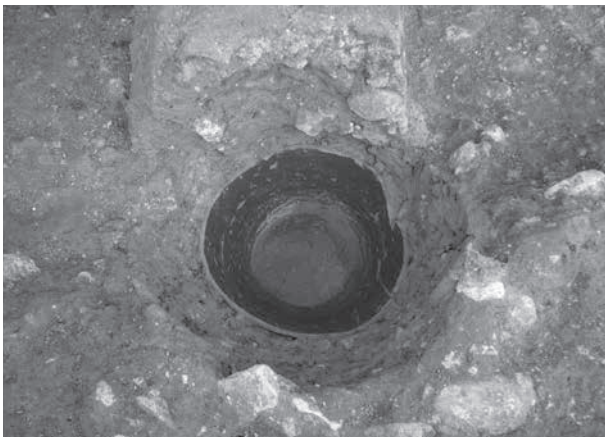


炉跡南側土坑（東から）

SX01・SI01（西から）

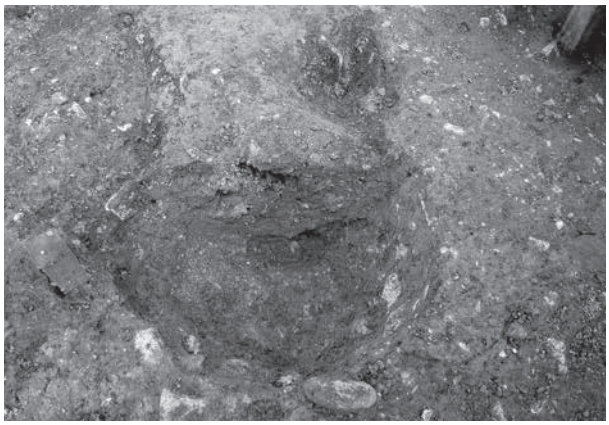


SI01（北から）

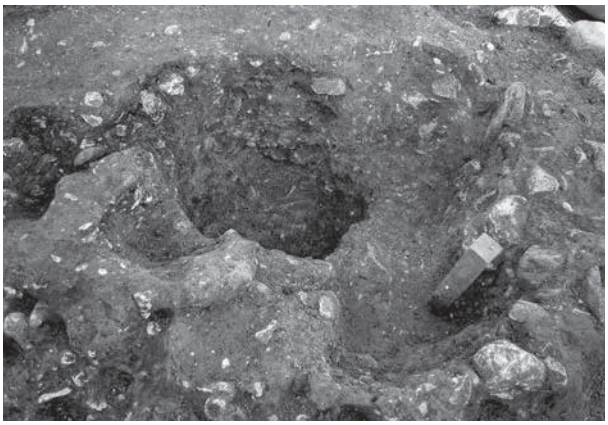


SI01（西から）

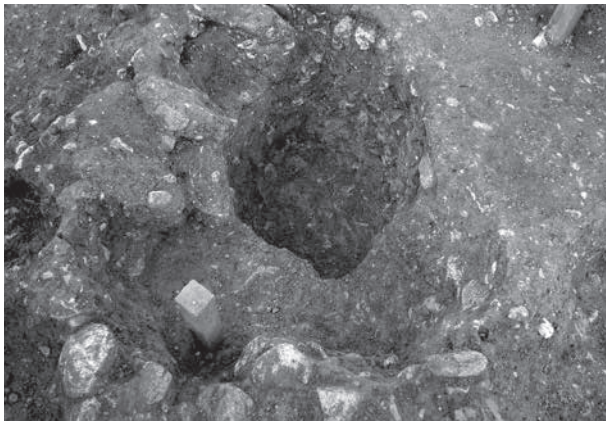
調査風景



SK01堆積状況（南から）

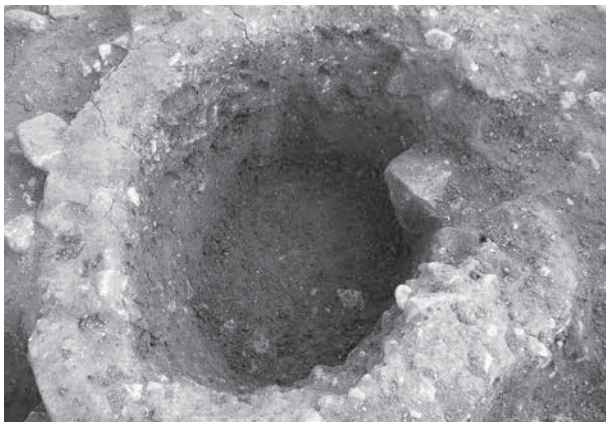


SK01（西から）

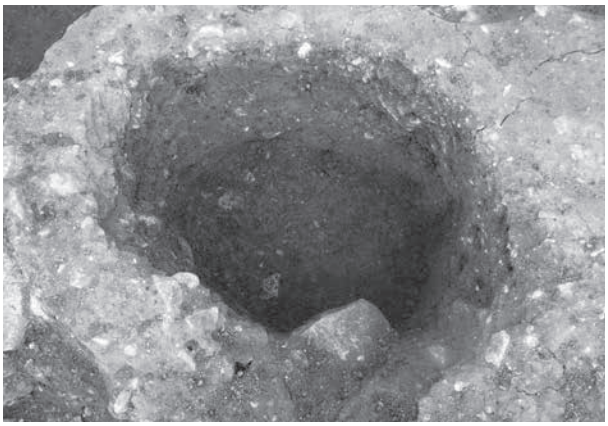


SK01（南から）

SK02（西から）



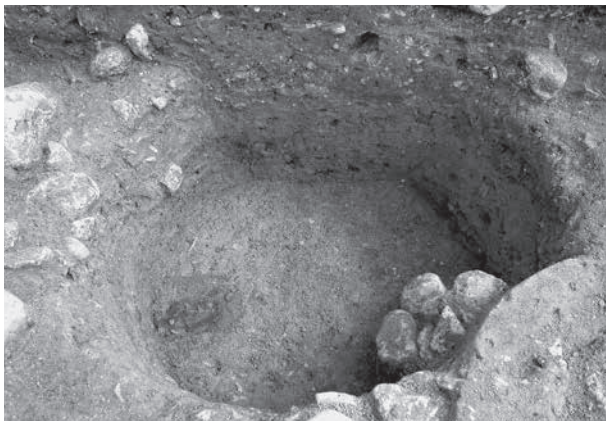
SK02（南から）



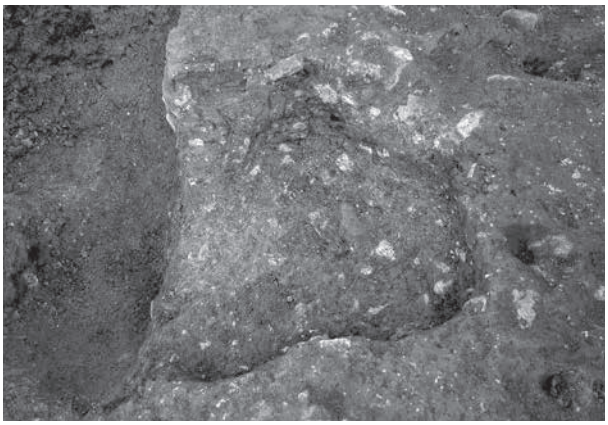
SK02（西から）

SK03（西から）

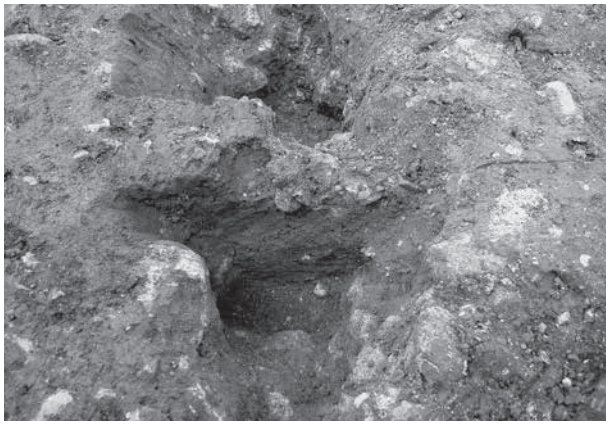
機械掘削風景



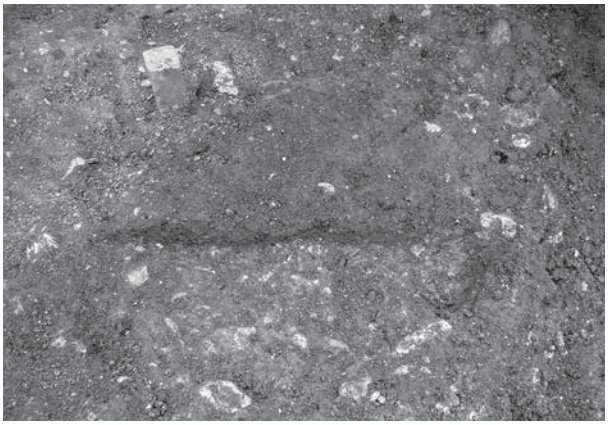
SK04（西から）



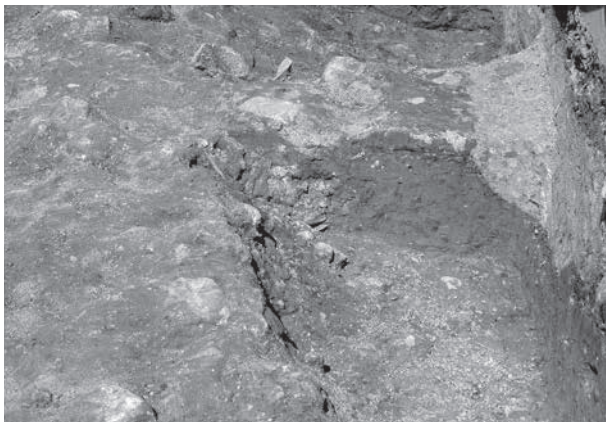
SK06（西から）

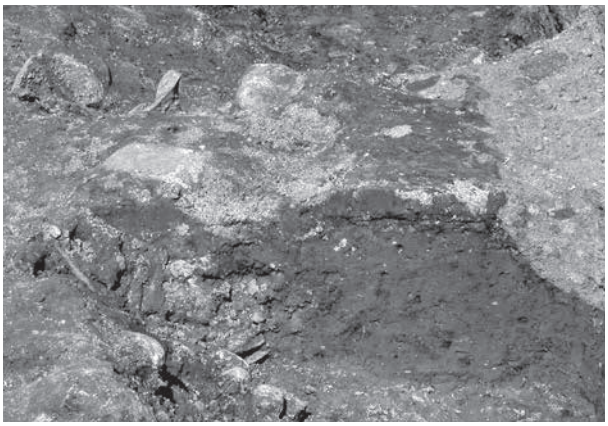


SK07（南から）



SK09（北から）





SX01（西から）

SX03（西から）

SX04上層（北西から）

SX04上層堆積状況（北から）

SX04埋桶遺物出土状況（南から）

SX04上層遺物出土状況（南から）

SX04埋桶遺物出土状況（西から）

SX04下層（北から）

SX04下層埋桶（西から）

SX04下層方形木組み断ち割り（西から）

SX04下層方形木組み（西から）

SX04下層埋桶（北から）

2

11

18

25

30

32

37

40

41

西地区遺構出土遺物

42

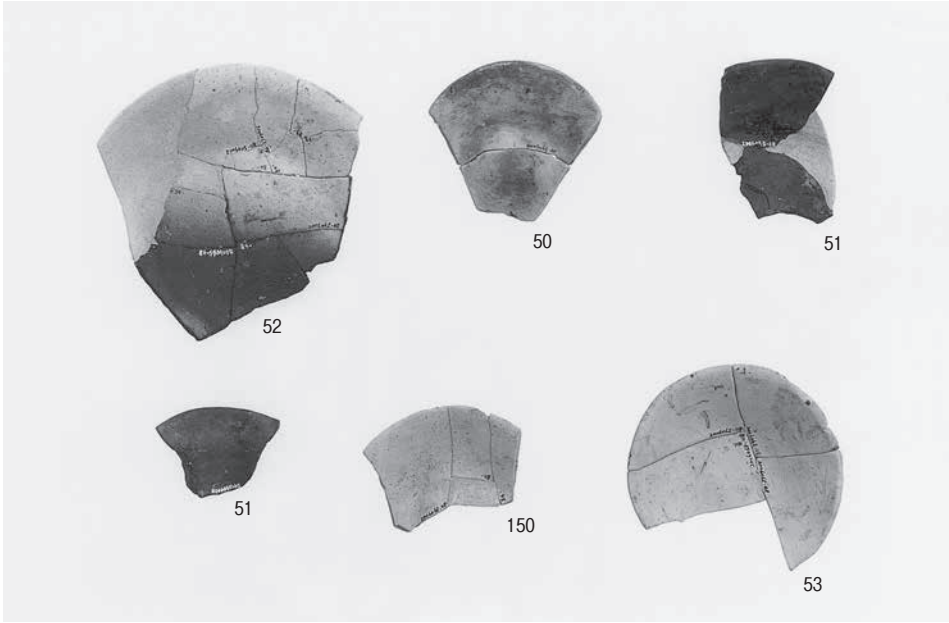
48

49

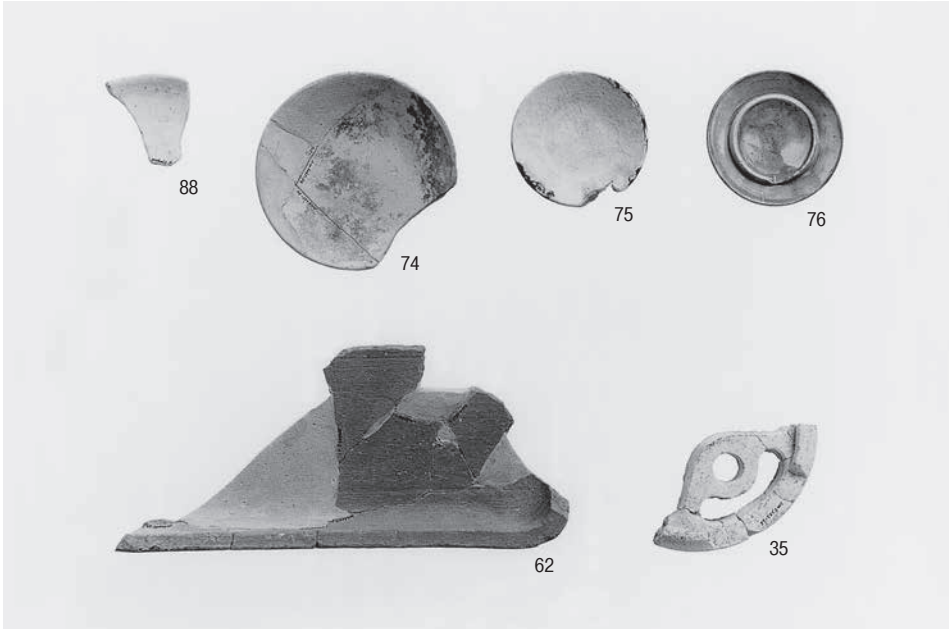
71

82

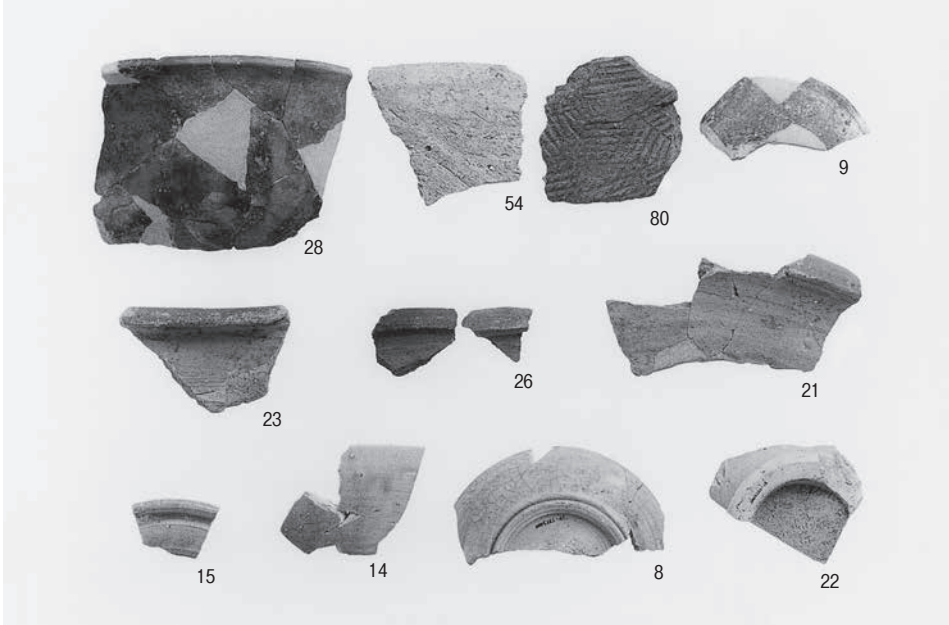
西地区遺構・包含層　東地区遺構出土遺物



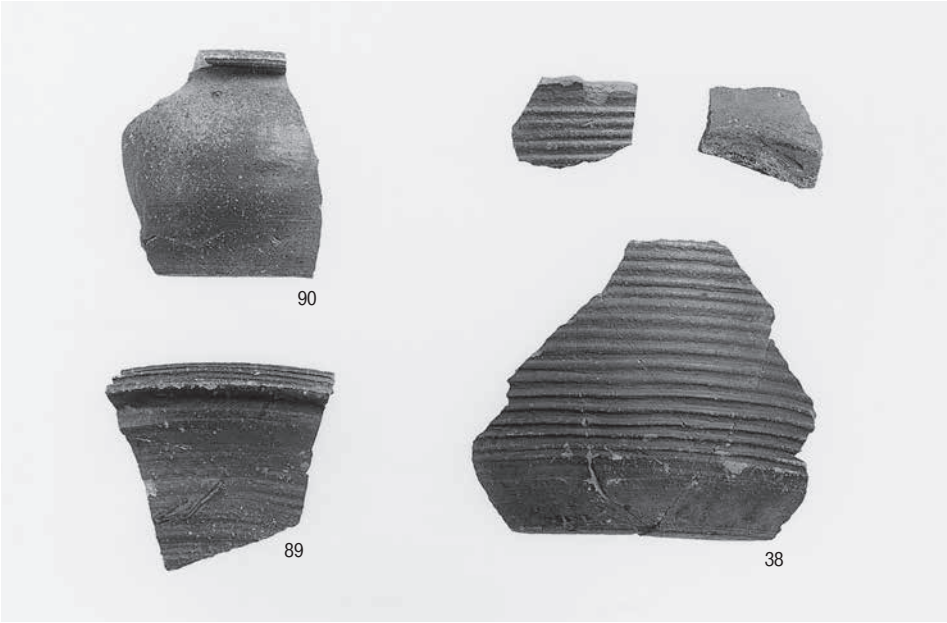
土師器・皿



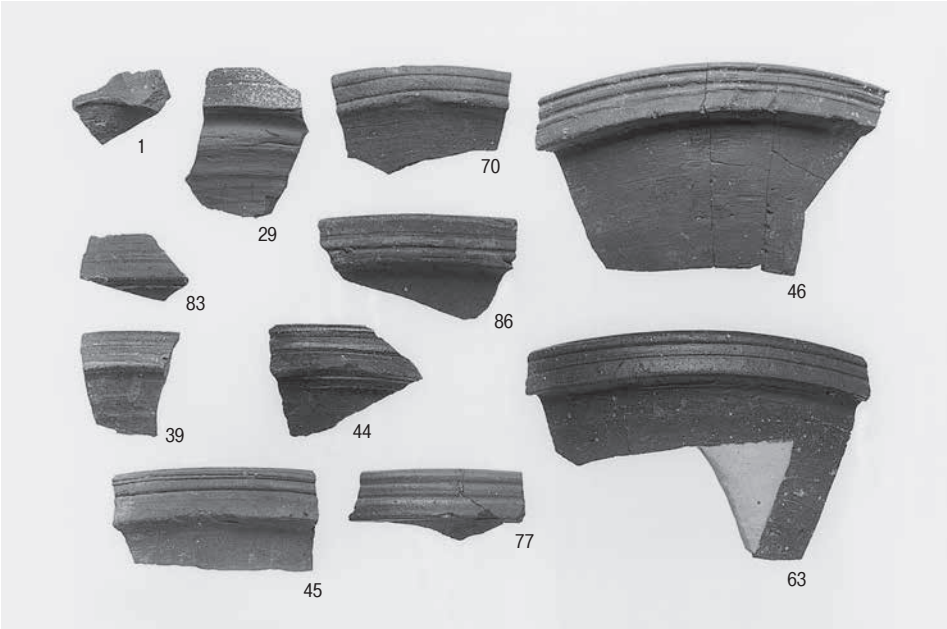
土師器・皿
灯明皿
三方
土製品・さな



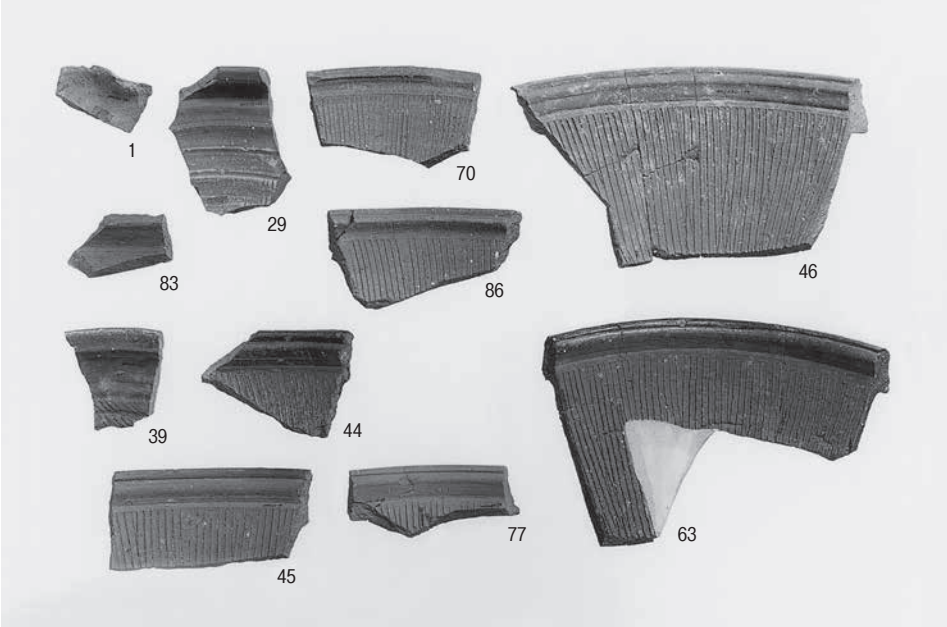
瓦質土器・鍋
土師器・鉢
瓦器・碗
須恵器・甕
鉢
施釉陶器・皿
碗
白磁・壺



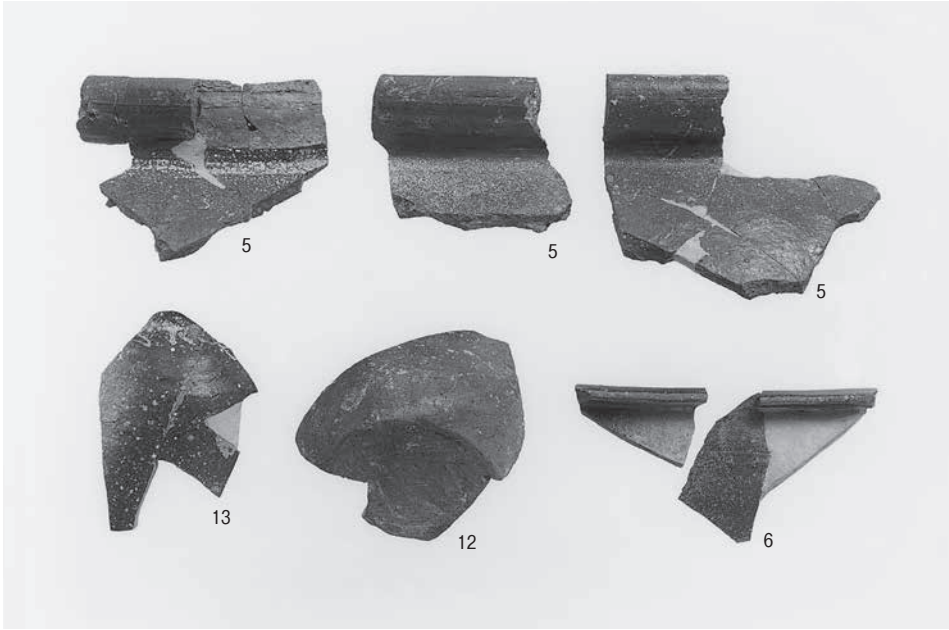
丹波焼・壺
鉢
擂鉢



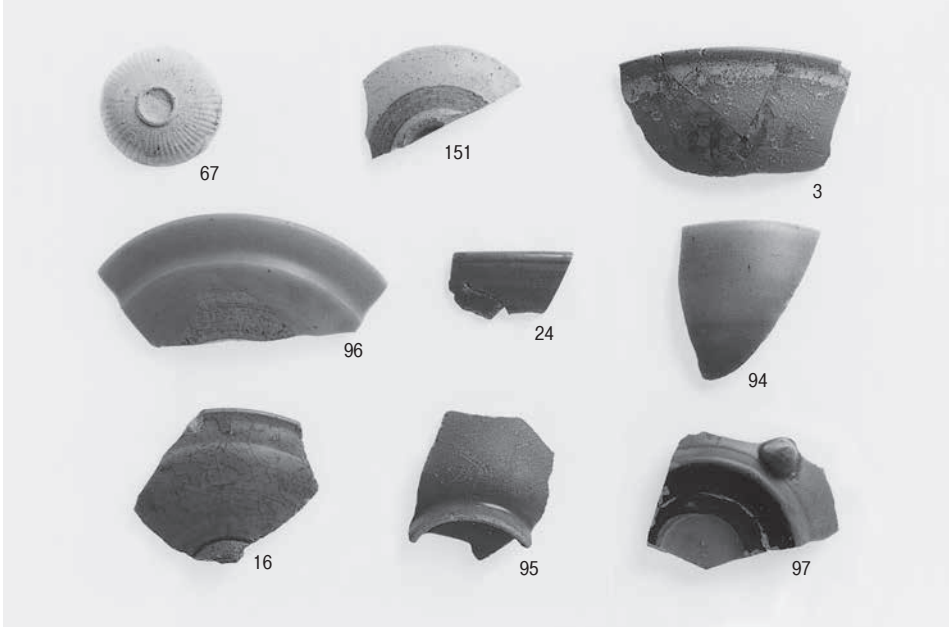
備前焼・擂鉢
堺・明石産擂鉢
（外面）



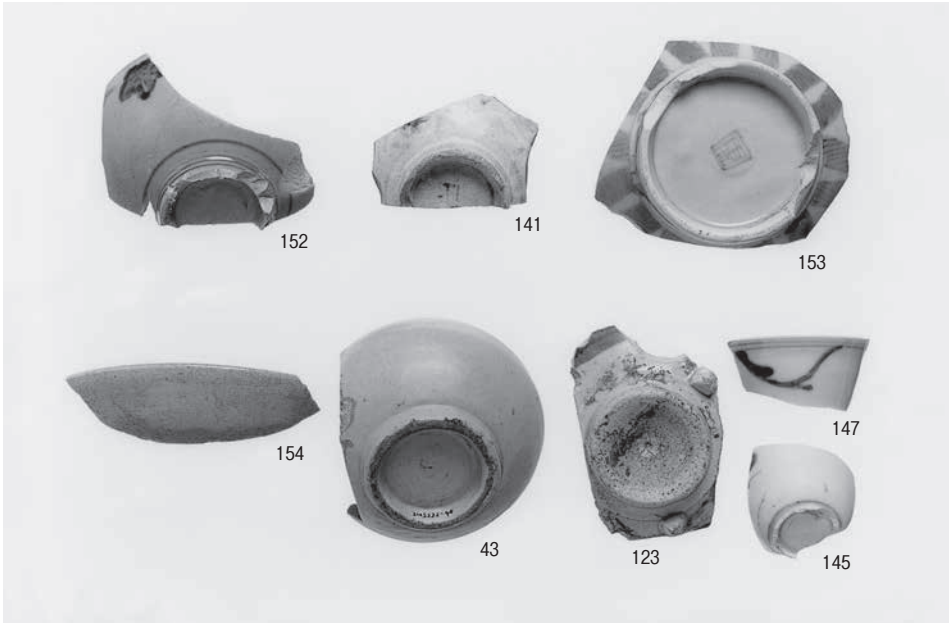
備前焼・擂鉢
堺・明石産擂鉢
（内面）



備前焼・甕
徳利
壺
丹波焼・甕



白磁・皿
青磁・碗
鉢
皿
香炉

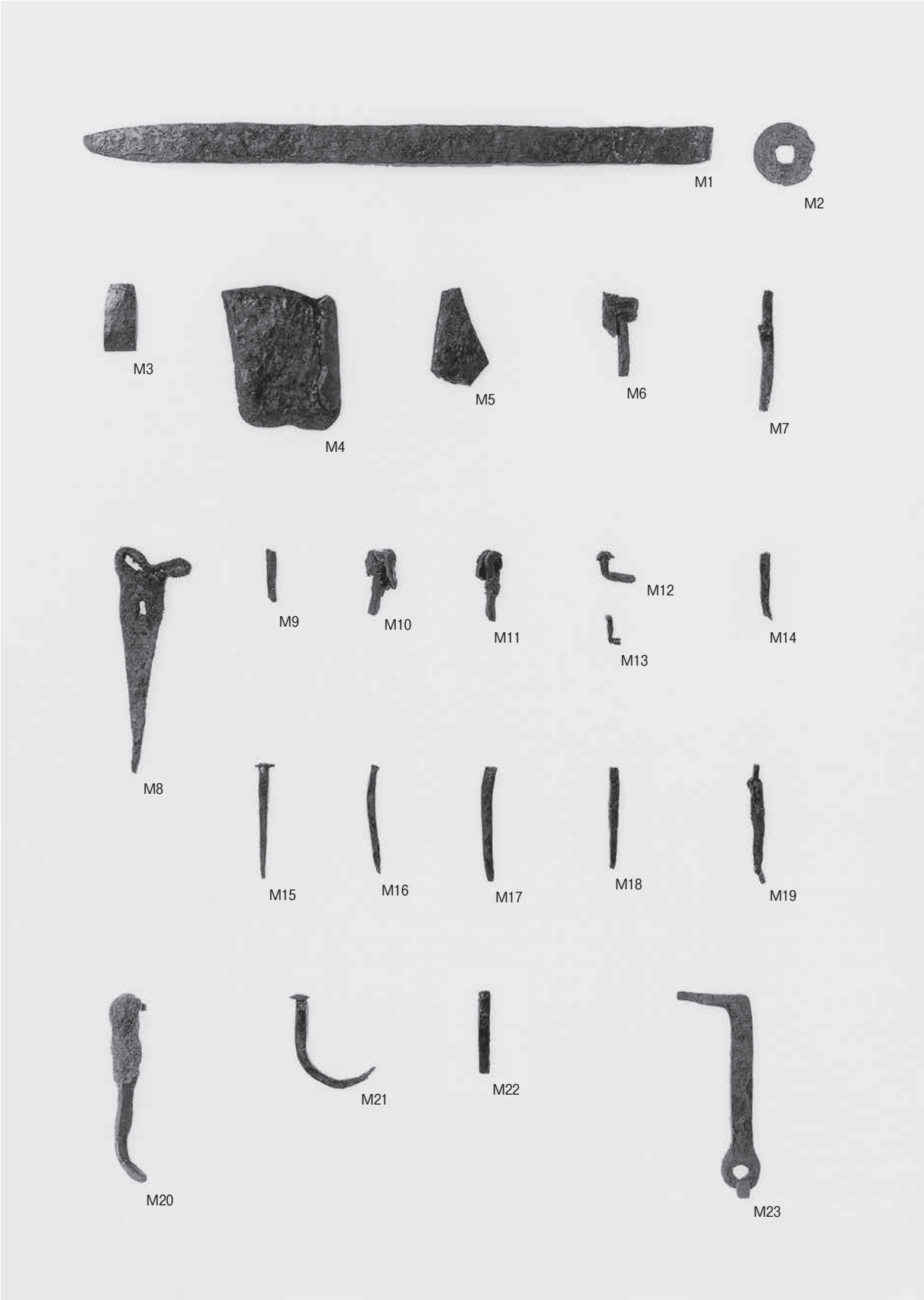


白磁・油壺
染付磁器・碗
杯

施釉陶器・碗
御神酒徳利
蓋
無釉陶器・火入れ
土製品・人形
石製品・硯

軒丸瓦
軒平瓦

砥石


M1
M2
M3
M4
M5
M6
M7
M8
M9
M10
M11
M12
M13
M14
M15
M16
M17
M18
M19
M20
M21
M22
M23

出土金属器

報　告　書　抄　録

ふりがな	みなみつじいせき
書名	南辻遺跡
副書名	ー都市計画道路伊丹飛行場線外１線（塚口長尾線）の都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財調査報告書ー
巻次	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告
シリーズ番号	第369冊
編著者名	上田健太郎・渡辺　昇・村上泰樹・中川　渉
編集機関	兵庫県立考古博物館
所在地	〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号　　TEL　079-437-5589
発行機関	兵庫県教育委員会
所在地	〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号　　TEL　078-341-7711
発行年月日	2010(平成22)年３月20日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
南辻遺跡（みなみつじいせき）	兵庫県伊丹市（ひょうごけんいたみし）昆陽６丁目（こやちょうめ）	28207	2005232 2006065	34度 46分 48秒	135度 23分 52秒	20060222～20060318 20060919～20061017	370㎡ 135㎡	都市計画道路塚口長尾線街路事業に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
南辻遺跡	集落	中世	土坑・落ち込み・柱穴・溝	土師器・陶磁器・銅銭・鉄製品・石製品	中世に遡る可能性のある堀状遺構を検出
		近世	井戸・埋甕・埋桶・炉・土坑・落ち込み・溝・貯水施設・排水路・堀状遺構	土師器・陶磁器・土製品・鉄製品	

要約	中世前半、中世後半、近世の三時期の遺構を確認した。中世を通じて調査区北部を中心とする柱穴の存在から掘立柱建物跡で構成される集落が存在したものと思われる。近世は調査区全体にわたって17世紀から19世紀までの遺構を確認した。中心となるのは18世紀後半以降、特に19世紀代前半から中頃にかけてである。井戸・埋桶・埋甕などの生活遺構の存在から通りに面した町屋が並び、炉（竈）は鍛冶関連の共同作業場であったことが想定される。東西に延びる堀状遺構は、井戸や貯水・排水施設と連結され近世を通して埋没しながらも水路として機能していたことが考えられ、掘削は17世紀以前に遡ることが明らかになった。

※緯度・経度は世界測地系にもとづく値である。

兵庫県文化財調査報告　第369冊

南　辻　遺　跡

－都市計画道路伊丹飛行場線外１線（塚口長尾線）
の都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財調査報告書－

2010(平成22)年３月20日　発行

編　集　兵庫県立考古博物館
〒675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中１丁目１番１号
TEL 079-437-5589

発　行　兵庫県教育委員会
〒650-8567　神戸市中央区下山手通５丁目10番１号

印　刷　ウニスガ印刷株式会社
〒677-0053　兵庫県西脇市和布町39